

第5層 明褐色土（7.5Y R5/6：礫混じり：第Ⅶ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.90mである。地山である。遺物は出土しなかった。

まとめ

床土直下が礫混じりの地山で、遺構は検出していない。

5-23区（付図2・図版15・19）

C地区の西南部で西北辺が開拓道水路に接し、5-52区の西北に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+10.20mである。調査区の形状は底辺が西南を向いたL字形である。調査面積は約470㎡である。

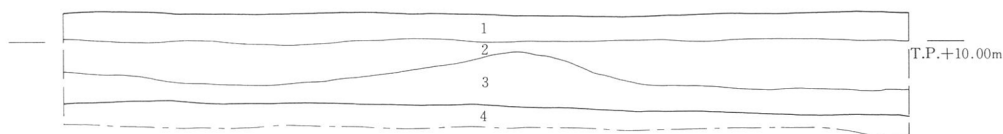
調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1・2層で近・現代の、第3層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で土坑、溝、鋤溝を検出した。層序（第53図）

第1層 褐灰色土（10Y R4/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（5Y4/1：黄色土のブロック土混じり（2.5Y7/8）：第Ⅴ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+10.00mである。層厚は0.2mを測る。整地土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第3層 褐灰色土（10Y R5/1：第Ⅶ-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.80mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 明黄褐色粘土（10Y R7/6：第Ⅳ層）で、西北方向に緩やかに傾斜している。上面の高さはT.P.+9.60mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第53図 末廣遺跡5-23区基本土層断面図

遺構

01-00 THの西北部からSHの西南部で検出した不整円形の土坑である。肩部直径2.3m、底部直径2.1m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（10Y R6/1）である。遺物は出土しなかった。

02-00 S Gの北部からR Gの南部で検出した不整形の土坑である。肩部直径1.7m、底部直径1.4m、深度0.16mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(10Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

03-00 O Eの南部で検出した円形の土坑である。肩部直径1.23m、底部直径1.1m、深度0.16mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

04-0S T Iの南部からR Eの東南部まで西北西方向に伸び、O Gの西南部まで北北東方向に伸びる、底辺が南南西を向いたL字形の溝である。R E～T Iまでは2本に分かれている。北北東端は5-11区の02-0Sにつながり、東南東端は5-52区へ伸びるが不明である。検出長31.0m、幅0.2～0.5m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

05-0S R Eの中央部からP Fを通してN Gの西南部まで南南西方向に直線的に伸びる溝である。北北東端は5-11区の02-0Sに続き、南南西端は調査区外へ伸びる。検出長16.0m、幅0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-0S R Eの中央部からQ Fを通してN Gの西南部まで南南西方向に直線的に伸びる溝である。北北東端は5-11区の02-0Sに続き、西南西端は調査区外へ伸びる。検出長17.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

07-0S U Iの西南部からT Jの西南部まで西南方向に直線的に伸びる溝である。東北端は5-39区の02-0Sに続き、西南端は調査区外へ伸びる。検出長3.0m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

08-0Z P GからT Iで検出した鋤溝群である。条数は約22条あり、南南西から北北東に伸びている。長さ1.0～8.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。11-0Zと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

09-0Z O DからR Eで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、南南西から北北東に伸びている。長さ4.5～10.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

10-OZ TGからUIで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、東南東から西北西に伸びている。長さ8.0~11.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

11-OZ PGで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、東南東から西北西に伸びている。長さ1.5~2.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。08-OZと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

土坑、溝、鋤溝は出土遺物がなく、時期は明らかでない。大半は近代以降の耕作に伴う遺構である。05・06-O Sは5-11区の01・02-O Sから続く側溝状の溝で、04-O Sと直角に交差し、耕地の地境となるようである。

5-36区(付図2・図版15・20)

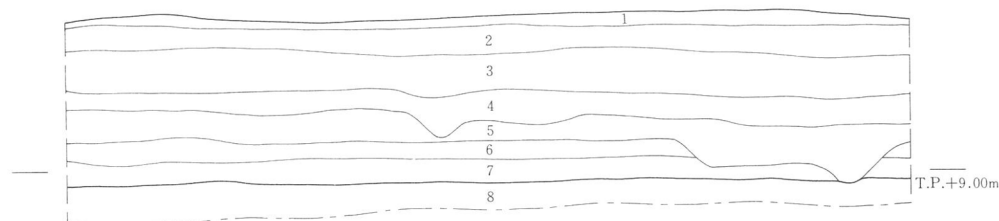
C地区の北隅で5-12区の東北に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はT.P.+9.80mである。調査区の形状は底辺が東南を向いた台形である。調査面積は約90m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1層で近・現代の、第2層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で土坑、鋤溝を検出した。

層序(第54図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第II層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。盛土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土(5Y4/1:黄色土のブロック土混じり(2.5Y7/8):第V層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.60mである。層厚は0.5mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。



第54図 末廣遺跡5-36区基本土層断面図

第3層 黒色土（10Y4/1：第Ⅶ-a層）で、TNからTMを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+9.10mである。層厚は0.1mを測る。旧耕作土である。遺物は出土しなかった。

第4層 灰色土（5Y5/1：第Ⅶ-c層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.00mである。層厚は0.1mを測る。旧耕作土である。遺物は出土しなかった。

第5層 灰黄色粘土（2.5Y6/6：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.90mである。地山である。遺物は出土しなかった。

遺構

01-00 UMの東北部で検出した不整楕円形の土坑である。肩部長径0.7m・短径0.6m、底部長径0.5m・短径0.4m、深度0.08mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

02-00 RLの東北辺中央部で検出したくびれた楕円形の土坑である。東北側は調査区外に広がっている。肩部長径0.3m・短径0.2m、底部長径0.2m・短径0.15m以上、深度0.05mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

03-00 RLの南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径0.4m・短径0.35m、底部長径0.2m・短径0.2m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

04-00 RLの南部で検出した不定形の土坑である。肩部長径0.6m・短径0.4m、底部長径0.45m・短径0.25m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

05-0Z QKからTNで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ3.0～5.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

鋤溝は出土遺物がなく、時期は明らかでない。01～04-00は5-12区の東北部で見られた06～12-00と一連の可能性も考えられる。時期、性格はともに不明である。

5-12区（付図2・図版15・17）

C地区の東北部で東南辺が開拓道水路、西北辺が無名道路に挟まれ、5-36区の西南辺

と東北辺に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+10.40mである。調査区の形状は底辺が東南を向いたL字形である。調査面積は約1,650㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1層で近・現代の、第2～4層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で井戸、土坑、溝、鋤溝、段を検出した。

層序（第55図）

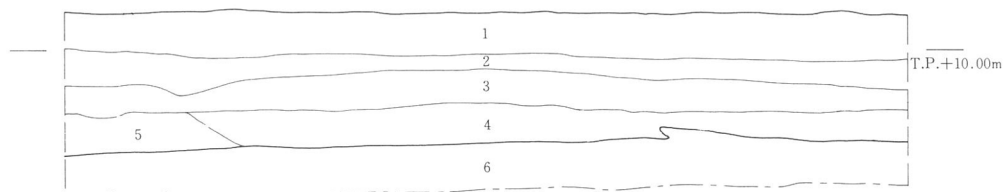
第1層 オリーブ灰色土（2.5G Y5/1：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.4mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（N5/0：明褐色土（7.5Y5/6）のブロック土混じり：第V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+10.00mである。層厚は0.3mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第3層 緑灰色粘土（10G6/1：第VII-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.70mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 青灰色粘土（5B G6/1：第VII-c層）で、全域に堆積するが、SKからUGを境として西北方向に厚く堆積している。上面の高さはT.P.+9.50mである。層厚は0.3mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第5層 明黄褐色粘土（10Y R7/6：第IV層）で、西北側が低くなっており、SKからUGを境として0.3mの標高差がある。上面の高さはT.P.+9.20mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第55図 末廣遺跡5-12区基本土層断面図

遺構

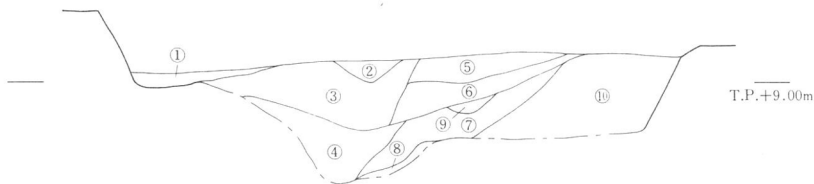
01-OW YNの西～中央部からYMの東部で検出した不整楕円形の井戸である。長軸が西方向を指す。肩部長径2.8m・短径2.2m、底部長径2.1m・短径1.7m、深度1.2m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認し

た埋土は1層で、褐灰色粘土（10Y R5/1：黄色土のブロック混じり）である。近世以降の陶磁器が出土した。

02-OW DOで検出した北北西～南南東方向に長い扇形の井戸である。長軸が北北西方向を指す。肩部長径6.5m・短径3.2m、底部長径6.4m・短径2.6m、深度0.14mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層で、灰色粘土（10Y R5/1）である。肩部に杭を打ち並べ、板を置いて護岸としている。遺物は近世の陶磁器が出土した。

03-OW DNの東部で検出した円形の井戸である。肩部直径1.8m、底部直径1.6m、深度0.3m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層で、褐灰色粘土（10Y R5/1）である。近世・近代の陶磁器が出土した。

04-OW（第56図） RJの中央～南部からSJの北部で検出した不整楕円形の井戸である。長軸が東北方向を指す。05-OWに切られている。断面形状は二段で西南部にテラスを有し、上部は口の開いたU字形、下部は逆台形である。肩部長径3.6m・短径3.2m、深度0.5m、二段目長径1.7m・短径1.2m、底部長径2.8m・短径1.2m、深度0.3m以上を測る。埋土は10層で、①灰色土（10Y R6/1）、②明褐灰色土（5Y R7/1）、③褐灰色シルト（5Y R6/1）、④灰色粘土（5Y 6/1）、⑤灰白色土（10Y 7/1）、⑥オリーブ灰色シルト（2.5GY 6/1）、⑦にぶい橙色粘土（7.5Y R7/4）、⑧褐灰色粘土（7.5Y R5/1）、⑨褐灰色シルト（7.5Y R6/1）、⑩明褐灰色粘土（7.5Y R7/2）である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。



第56図 末廣遺跡5-12区04-OW埋土断面図

05-OW SIの中央～東北部からRIの東南部で検出した不定形の井戸である。長軸が東北方向を指す。断面形状は二段で西南部にテラスを有し、上部は口の開いた逆台形、下部はU字形である。肩部長径3.8m・短径2.9m、深度1.61m、二段目長径1.75m・短径1.5m、底部長径1.1m・短径0.95m、深度0.15mを測る。埋土は1層で、灰色粘土（7.5Y 4/1）である。遺物は近世の陶磁器が出土した。

06-OO WQの西南部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東北東方向を指す。

西北側が07-00に切られる。肩部長径1.4m・短径0.4m、底部長径1.2m・短径0.3m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰黄褐色土（10Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

07-00 WQの西南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東北東方向を指す。06-00と08-00を切っている。肩部長径1.2m・短径0.5m、底部長径0.9m・短径0.3m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰黄褐色土（10Y R4/2）である。遺物は出土しなかった。

08-00 WPの東南部で検出した不整楕円形の土坑である。西南側が07-00に切られている。肩部長径0.6m・短径0.4m、底部長径0.4m・短径0.3m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

09-00 WPの南部からXPの北部で検出したくびれた楕円形の土坑である。長軸が東北東方向を指す。肩部長径1.6m・短径0.6m、底部長径1.2m・短径0.3m、深度0.17mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

10-00 WPの西南部からXPの西北部で検出した不定形の土坑である。肩部長径0.7m・短径0.5m、底部長径0.5m・短径0.3m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10Y R5/1）である。遺物は出土しなかった。

11-00 XPの西北部で検出した円形の土坑である。肩部直径0.8m、底部直径0.7m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10Y R5/1：拳大の礫混じり）である。遺物は出土しなかった。

12-00 XOの東北部で検出した不定形の土坑である。東北側が11-00に切られている。肩部長径0.6m・短径0.3m、底部長径0.4m・短径0.2m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

13-OS VPの西南部からXNを通してAKの西南部まで西南方向に直線的に伸びる溝である。西南端は5-7区の02-OSに続き、東北端は調査区外へ伸びる。検出長27.0m、幅0.7m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色粘土（5Y 6/1）である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

14-OS（図版17） CUの西北部からAQを通してYNの東北部まで東南東方向に直

線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東南東端は5-13区へ伸び、西北西端は18-O Sに切られている。検出長28.0m、幅0.7m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色粘土(5Y6/1)で、多量の礫が混入していた。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

15-O S DLの東南部からDNを通してDOの西北部まで東北東方向に直線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。東北東端は02-OWにつながり、西南西端は5-7区の04-O Sに続く。検出長10.0m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1:多量の礫混じり)である。遺物は出土しなかった。

16-O S FQからYNの東南部まで北北西方向に伸び、AKの西南部まで西南西方向に伸びる、底辺が南南東を向いたL字形の溝である。CP・DPで02-OWにつながる。南南東端は5-9区の03-O Sに、西南西端は5-7区の01-O Sに続く。検出長38.5m、幅0.6m、深度0.09mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(10Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

17-O S FPの北部からBOを通してYNの南部まで南南東方向にはほぼ直線的に伸びる溝である。COの東北部とDPの南辺中央部で02-OWとつながる。南南東端は5-9区の03-O Sに続き、北北西端は18-O Sにより切られている。検出長15.5m、幅0.8m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

18-O S TLの中央部からWMを通してYNの中央部まで北北西方向に直線的に伸びる溝である。南南東端は16-O Sに、北北西端は側溝により切られている。検出長22.0m、幅0.4~1.4m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

19-O S 2ヶ所で反対方向に直角に曲がる溝である。UJの西南部からTIの西北部まで西北方向に伸び、TIで直角に曲がり、SJの西南部まで東北方向に伸び、SJで西北方向に直角に曲がる。05-OWにつながる。検出長13.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

20-O S FMの東北部からEPの西北部まで東北東方向に伸び、FPの東北部まで南南東方向に伸びる、底辺が東北東を向いたL字形の溝である。南南東端は5-9区の6-O Sに続き、西南西端は5-7区へ伸びるが、不明である。検出長15.5m、幅0.2~0.4m、

深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

21-O S E Oの西北部からF Oの東部まで北北西方向に直線的に伸びる溝である。北北西端は02-O Wにつながり、南南東端は5-9区へ伸びるが、不明である。検出長6.0m、幅0.2m、深度0.04mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(5Y R5/2)である。遺物は出土しなかった。

22-O S A Nの東北部からA Oを通過してB Oの東南部まで北北西方向に直線的に伸びる溝である。17-O Sの中にある。検出長8.5m、幅0.3m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

23-O S W Qの南部からX Pを通過してX Nの東部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。東北東端は調査区外へ伸びる。検出長11.0m、幅0.4m、深度0.02mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

24-O S E Mの中央部からE Nを通過してD Oの西南部まで東北東方向に直線的に伸びる溝である。東北東端は02-O Wにつながり、西南西端は5-7区の03-O Sに続く。検出長8.0m、幅0.6m、深度0.07mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

25-O S X Jの東南部からV Jを通過してT Iの西南部まで南南東方向に直線的に伸びる溝である。検出長17.0m、幅0.5~1.1m、深度0.02mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

26-O Z U GからV Hで検出した鋤溝群である。条数は8条あり、西南から東北に伸びている。長さ0.5~2.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

27-O Z U IからY Jで検出した鋤溝群である。条数は5条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.0~15.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

28-O Z R GからS Hで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、東南から西北に伸びている。長さ2.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。29-O Zと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺

物は出土しなかった。

29-OZ RHからSHで検出した鋤溝である。条数は1条であり、西南から東北に伸びている。長さ2.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。28-OZと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

30-OZ WLからALで検出した鋤溝群である。条数は7条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.5~4.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。31・34-OZと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

31-OZ WLからEPで検出した鋤溝群である。条数は約40条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ2.0~13.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。30-OZと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

32-OZ XQからCRで検出した鋤溝群である。条数は約12条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.5~8.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

33-OZ WPからXQで検出した鋤溝群である。条数は6条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ1.0~4.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

34-OZ WLからXMで検出した鋤溝群である。条数は10条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ1.0~7.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。30-OZと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

35-OZ RKからUGで検出した第5層を削り込んだ段である。北北西側が低くなっており、高低差は0.15mである。段の上面はT.P.+9.40mで、割合平坦である。下面はT.P.+9.25mで、同じく平坦である。低い部分には青灰色粘土(5B G6/1)が堆積していた。西南西端は5-5区の04-OZにつながり、東北東端は05-OW・04-OWの東南側肩と重なって5-36区へ伸びるが、不明である。

まとめ

土坑、溝、鋤溝、段は出土遺物がないか、僅かであり時期は明らかでない。井戸は5基

検出している。その内02-OWは井戸というよりも水溜め状の遺構である。02・04・05-OWは出土遺物からすると、近世まで遡る可能性が考えられる。03-OWは15・31-OSを切っており、新しい時期のものである。現況の地割りに沿って伸びる13-OSは、層位的に見ても他の遺構との切り合い関係からしても、佐野飛行場廃絶以降のものである。16・17-OSは側溝状に伸びる溝で、18-OSへ続き、22-OSと直交する。また、23-OSは18-OSに直交するように伸びている。これらの溝は耕地を区画していたようで、その内部に鋤溝が認められる。

5-7区（付図1・図版15・20）

C地区の中央部で、東南辺が開拓道水路に面し、5-12区の西南に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+10.20mである。調査区の形状は長辺が西南を向いた長方形である。調査面積は約410m²である。

調査により確認した土層は基本的に6層あり、第1・2層で近・現代の、第3～5層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第6層上面で溝、鋤溝を検出した。

層序（第57図）

第1層 暗赤灰色土（2.5Y R3/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（N5/0：明褐色土（7.5Y 5/6）のブロック土混じり：第V層）で全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+10.00mである。層厚は0.2mを測る。整地土である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦・紡錘形の土錘が出土した。

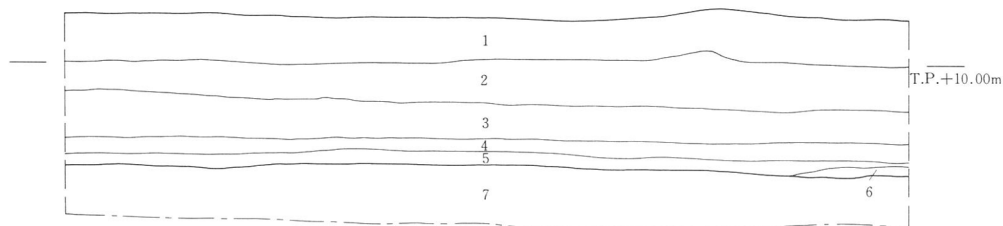
第3層 褐灰色粘土（7.5Y R5/1：第VII-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.80mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 暗赤褐色土（5Y 3/3：礫混じり：第VII-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.60mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 褐灰色粘土（7.5Y R5/1：第VII-c層）で、EMからFIを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+9.50mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 黄橙色粘土（10Y R8/6：第IV層）で、北側が低くなっており、EMからF

Iを境として0.2mの標高差がある。上面の高さはT.P.+9.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。

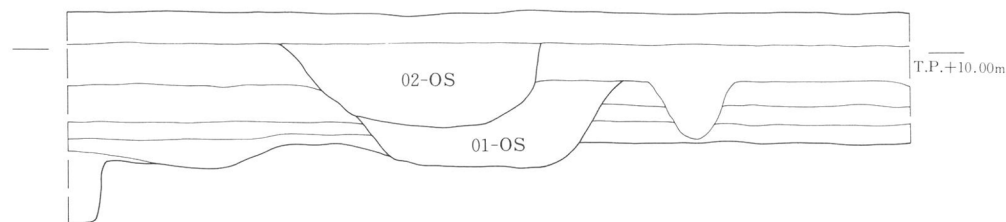


第57図 末廣遺跡5-7区基本土層断面図

遺構

01-O S (第58図) B Jの東北部からB Iまで東北東方向に直線的に伸びる溝である。東北端は5-12区の16-O Sに続き、西南端は直接ではないが、5-35区の15-O Sに続く。検出長11.0m、幅0.8m、深度0.14mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

02-O S (第58図) B Jの東北部からC Iを通過してD Hの西北部まで西南方向に直線的に伸びる溝である。東北端は5-12区の13-O Sに、西南端は5-8区の03-O Sに続く。検出長13.0m、幅1.2m、深度0.17mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、青灰色土(5PB5/1)である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。



第58図 末廣遺跡5-7区01・02-O S埋土断面図

03-O S E Lの東部からF Kを通過してF Iの東南部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。東北東端は5-12区の24-O Sに、西南西端は5-8区の05-O Sに続く。検出長13.5m、幅0.4m、深度0.07mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色粘土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

04-O S F Lの東北部からE Kの西南部を通過してF Iの東北部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。E Lの東北部に拳大の礫が残っている。東北東端は5-12区の15-O Sに、西南西端は5-8区の07-O Sに続く。検出長13.5m、幅0.4m、深度0.2mを測

る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1:拳大の礫混じり)である。遺物は出土しなかった。

05-OZ DKからELで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、南南東から北北西に伸びている。北北西端は5-12区の30-OSに続く。長さ4.5~10.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-OZ BJからGKで検出した鋤溝群である。条数は約25条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ1.0~13.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

07-OZ FMからGMで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ1.0~2.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

鋤溝、溝は出土遺物が無いか、極僅かで、時期は明らかでない。02-OSは5-12区の13-OSから続く現況の地割りに沿った水路で、層位的にみても、他の以降との切り合い関係からしても、時期が新しく、佐野飛行場廃絶以後のものである。01-OSは5-12区の22-OSから続く耕地を区画する溝と推定され、その東南側に多数の鋤溝が同一方向で伸びている。

5-5区(付図2・図版15・20)

C地区の東北部で、西北辺が無名道路に面し、5-7区の西北に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+9.90mである。調査区の形状は長辺の一边が西南を向いた長方形である。調査面積は約220m²である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1層で近・現代の、第2・3層で近世の遺物が近・現代の遺物とともに出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で溝、鋤溝、段を検出した。

層序(第59図)

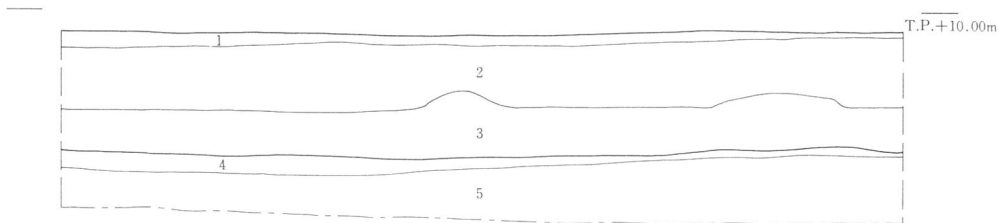
第1層 灰白色土(10YR8/2:第Ⅲ-a層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土(5Y4/1:にぶい黄橙色土のブロック土混じり(10YR7/3):第V

層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.80mである。層厚は0.4mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第3層 灰色土(N6/0:第Ⅶ-a層)で、UFからVFを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+9.50mである。層厚はTFで0.3m、YIで0mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 黄橙色粘土(10YR8/6:第Ⅳ層)で、西北側が低くなっており、UFからVFを境として0.3mの標高差がある。上面の高さはTFでT.P.+9.20m、YIでT.P.+9.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第59図 末廣遺跡5-5区基本土層断面図

遺構

01-O S VEの西北部からUFの中央部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。検出長6.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

02-O Z UEで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.0~3.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。03-O Zと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

03-O Z UEからUFで検出した鋤溝である。条数は1条であり、西南西から東北東に伸びている。長さ6.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。02-O Zと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

04-O Z TEからVEで検出した第4層を削り込んだ段である。西北側が低くなっており、高低差は1.05mである。段の上面はT.P.+9.20mで、割合平坦である。下面はT.P.+8.15mで、同じく平坦である。低い部分には灰色土(N6/0)が堆積していた。西南西端は5-6区の05-O Zに、東北東端は5-12区の35-O Zにつながる。

まとめ

段とその下に伸びる溝と鋤溝は出土遺物が無く、時期は明らかでない。段の上面東南側は削平を受けたのか、鋤溝は検出していない。

5-6区（付図 2・図版15・20）

C地区の東北部で、西北辺が無名道路に面し、5-5区の西南に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+10.10mである。調査区の形状は長辺の一边が西南を向いた長方形である。調査面積は約280㎡である。

調査により確認した土層は基本的に7層あり、第1・2層で現代の、第3～6層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第7層上面で溝、鋤溝、段を検出した。

層序（第60図）

第1層 灰色土（10Y R5/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（5Y5/1：第Ⅲ-a層）で、全域に広がる旧耕作土である。上面の高さはT.P.+9.90mである。層厚は0.15mを測る。遺物は現代の陶磁器が出土した。

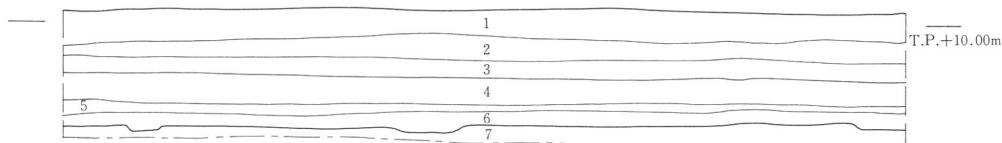
第3層 灰色土（5Y4/1：にぶい黄橙色土（10Y R7/3）のブロック土混じり：第V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.75mである。層厚は0.1mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 黄灰色粘土（2.5Y6/1：第Ⅶ-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.65mである。層厚は0.1mを測る。旧耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 にぶい赤褐色粘土（2.5Y R5/4：礫混じり：第Ⅶ-b層）で、XFからYDを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+9.55mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 明青灰色土（10B G7/1：第Ⅶ-c層）で、XFからYDを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+9.45mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第7層 浅黄色粘土（2.5Y7/4：第Ⅳ層）で、西北側が低くなっており、VEからWCを境として0.4mの標高差がある。上面の高さはT.P.+9.35mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第60図 末廣遺跡 5 - 6 区基本土層断面図

01-O S UDの西南部からVEの西南部まで南南東方向に05-O Zの下に沿って、直線的に伸びる溝である。北北西端は5-62区へ伸びるが、不明である。検出長3.5m、幅0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

02-O Z WDからCFで検出した鋤溝群である。条数は10条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.5~13.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。04-O Zと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

03-O Z VCからXDで検出した鋤溝群である。条数は7条あり、西南から東北に伸びている。長さ1.5~7.0m、幅0.2m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

04-O Z YEからBGで検出した鋤溝群である。条数は8条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ1.0~2.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。02-O Zと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

05-O Z VEの西南部からVDの東南部まで西南方向に伸び、VDの東南部で西北に、VDの北辺中央で西南に直角に曲がり、WBの北東部へ伸びる第7層を削り込んだ段である。西北側が低くなっており、高低差は0.2mである。段の上面はT.P.+9.35mで、割合平坦である。下面はT.P.+9.15mで、同じく平坦である。低い部分には赤褐色粘土(2.5YR5/4)、明青灰色土(10BG7/1)が堆積していた。5-5区の04-O Z、5-35区の19-O Zにつながる。

まとめ

段、溝、鋤溝は出土遺物が無く、時期は明らかでない。段の上面東南側では5-12区の31-O Z、5-7区の06-O Zと同一方向に伸びる鋤溝04-O Zの他に、段と同一方向に伸びる鋤溝03-O Zと直交する鋤溝02-O Zを検出している。

5-8区（付図2・図版15・21）

C地区の中央部で、東南辺が開拓道水路に面し、5-7区の西南に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+11.40mである。調査区の形状は底辺が東北を向いたL字形である。調査面積は約420㎡である。

調査により確認した土層は基本的に6層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第6層上面で井戸、溝、鋤溝を検出した。

層序（第61図）

第1層 灰白色土（5Y7/2：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.4mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

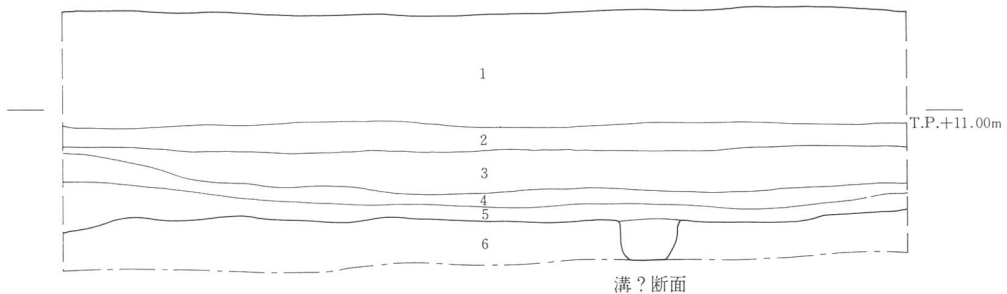
第2層 緑灰色土（10GY6/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+11.00mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰色土（N5/0：明褐色土（7.5Y5/6）のブロック土混じり：第V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+10.80mである。層厚は0.2mを測る。整地土である。遺物は出土しなかった。

第4層 青灰色土（10BG5/1：第VII-a層）で、FIからHFを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+10.60mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第5層 明緑灰色土（7.5GY7/1：第VII-c層）で、FIからHFを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+10.50mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

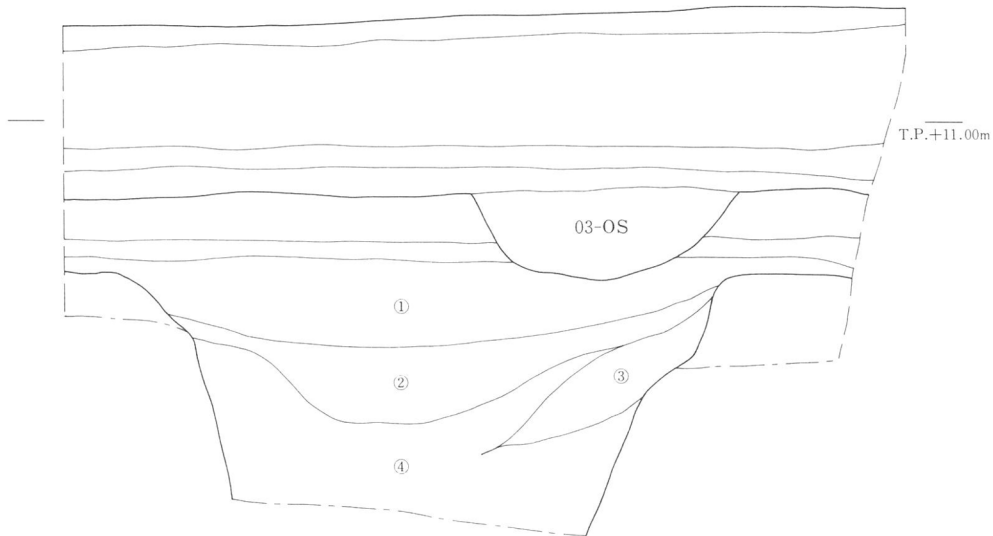
第6層 灰黄色粘土（2.5Y7/2：第IV層）で、西南側が低くなっており、FIからHFを境として0.2mの標高差がある。上面の高さはT.P.+10.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第61図 末廣遺跡5-8区基本土層断面図

遺構

01-OW (第62図) FEの西～中央部で検出した不整半円形の井戸である。5-20区の01-OWに続く。断面形状は二段でテラスを有し、上部は口の開いたU字形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。肩部検出長径3.8m・短径1.7m、深度0.5m、二段目長径3.2m・短径1.2m、底部検出長径1.9m・短径0.6m、深度0.8m以上を測る。確認した埋土は5層あり、①明緑灰色シルト(7.5GY7/1)、②明緑灰色シルト(7.5GY7/1:砂混じり)、③明緑灰色シルト(7.5GY7/1:小礫含む)、④明緑灰色シルト(7.5GY7/1:有機物含む)である。遺物は出土しなかった。



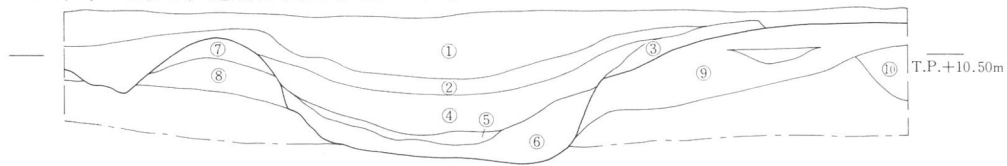
第62図 末廣遺跡5-8区01-OW・03-OS埋土断面図

02-OS HGの中央部で西南方向に曲がり、IJの東南部まで東南東方向に伸びる、底辺が西北を向いたL字形の溝である。東南東端は調査区外へ伸びるが、不明である。西南端は04-OSに交わる。検出長15.5m、幅0.6m、深度2.0mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

03-OS (第62図) DGの東北部からDFを通過してFEの北部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。東北端は5-7区の02-OSに、西南端は5-20区の15-OSに続く。検出長12.5m、幅1.3m、深度0.27mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐色灰色粘土(7.5YR4/1)である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

04-OS (第63図・図版21) JTの西北部からIHを通過してHFの東南部まで東南東

方向に直線的に伸びる溝である。11-O Rと重なり、切っている。多数の杭と杭跡を検出した。東南東端は調査区外へ伸びるが、不明である。西北西端は5-20区の10-O Sに続く。検出長15.0m、幅1.1m、深度0.26mを測る。断面形状はU字形である。埋土は8層あり、①浅黄色シルト(2.5Y7/4)、②青灰色シルト(10B G5/1)、③にぶい橙色粘土(7.5Y R6/4)、④オリーブ灰色砂(5G Y6/1)、⑤にぶい黄橙色粘土(10Y R7/4)、⑥明緑灰色粘土(10G Y7/1:砂混じり)、⑦明褐色粘土(7.5Y R5/6)、⑧緑灰色粘土(10G Y5/1)である。遺物は出土しなかった。



第63図 末廣遺跡5-8区04-O S・11-O R埋土断面図

05-O S F Iの東南部からG Gを通してH Fの西北部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。東北東端は5-7区の03-O Sに、西南西端は5-20区に伸びるが、不明である。検出長14.5m、幅0.5m、深度0.17mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(7.5Y R5/2)である。遺物は出土しなかった。

06-O S H Gの南部からI Hの中央部を通してI Jの南部まで伸びる、底辺が西北を向いたL字形の溝である。I Jの西南部から緩やかにカーブしている。検出長12.5m、幅0.2m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色粘土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

07-O S F Iの中央部からG Gを通してH Fの西北部まで東北東方向に緩やかに曲がって伸びる溝である。東北東端は5-7区の04-O Sに続き、西南西端は5-20区に伸びるが、不明である。検出長14.5m、幅0.4m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色粘土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

08-O S H Hの西部からI Hの東北部を通してI Jの西部まで西北西方向に直線的に伸びる溝である。検出長8.0m、幅0.2m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

09-O Z D GからI Iで検出した鋤溝群である。条数は約30条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ2.5~14.5m、幅0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

10-OZ EEからGFで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.5~8.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

11-OR (第63図) 平面では検出していないが、東南壁の中央部の断面で確認した流路である。東南端は5-11区の12-OR、西北西端は5-20区の39-ORに続く。04-OSに切られる。断面形状は浅いU字形である。長さ、幅、深度とも?-OSに切れ、不明である。埋土は2層で、①灰色粘土(N6/0:黄色粘土混じり)、②緑灰色シルト(7.5GY6/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

井戸、鋤溝、溝は出土遺物が無いか、極僅かで時期は明らかでない。03-OSは5-7区の02-OSから続く現況の地割りに沿った水路で、層位的にみても、01-OW・09-OZとの切り合い関係からしても時期が新しく、佐野飛行場廃絶以後のものである。06-OSは5-11区の09-OSから続く01-ORを切り込んで伸びる水路である。最終の埋没時期は埋土からすると佐野飛行場建設時である。07-OSは本来礫詰暗渠であったと推定される。5-12区の02-OWから5-12区の15-OS、5-7区の04-OSと続いて伸びた溝で、06-OSにつながる。鋤溝は09-OSが5-7区の06-OZに続くように、11-ORの東北側に拡がる。

5-35区(付図2・図版15・22)

C地区の西南部で、西北辺が無名道路に面し、5-6区の西南辺に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はT.P.+9.70mである。調査区の形状は長辺の一边が西南を向いた長方形である。調査面積は約650m²である。

調査により確認した土層は基本的に7層あり、第1層で近・現代の、第2~6層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第7層上面で井戸、溝、鋤溝を検出した。

層序(第64図)

第1層 褐灰色土(10YR4/1:灰色土・褐色土混じり:第III-a層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 黄褐色土(10YR5/6:灰黄褐色土(10YR4/2)のブロック土混じり:第V層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.60mである。層厚は0.2mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦・紡錘形の土錘が出土した。

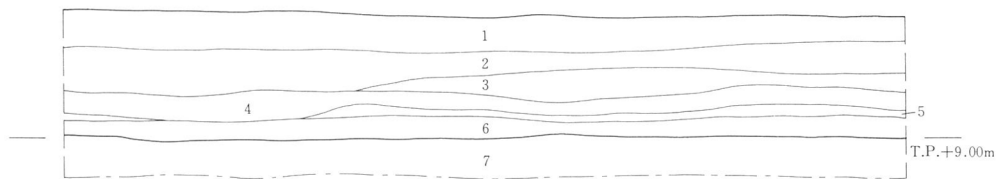
第3層 黄灰色土（2.5Y R5/1：第Ⅶ-a層）で、ほぼ全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.40mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第4層 褐色土（7.5Y R4/6：径0.15cmの礫混じり：第Ⅶ-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.30mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 褐灰色土（10Y R6/1：第Ⅶ-c層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.20mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 明黄褐色土（10Y R6/6：第Ⅶ-d層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.10mである。層厚は0.2mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第7層 灰黄色粘土（10Y R6/2：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.90mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第64図 末廣遺跡5-35区基本土層断面図

遺構

01-O W DDの中央部で検出した不整扇形の井戸である。北東側に6本の木杭と3段の矢板がある。肩部長径4.2m・短径3.4m、底部長径1.9m・短径1.9m、深度0.8m以上を測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は2層で、上から褐灰色粘土（7.5Y R5/1）が0.5m、灰褐色粘土（7.5Y R4/2）が0.2mである。遺物は出土しなかった。

02-O S ECの東南部からCAを通してAXの西北部まで東南方向に直線的に伸びる溝である。一方の先端が東南方向にU字形で曲がる。DBで10-O Sにつながり、東南端は5-20区へ伸びるが、不明である。検出長21.0m、幅0.2m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

03-O S FCの西北部からCYを通してAWの西北部まで東南方向に直線的に伸びる溝である。DAで10-O Sにつながる。西北端はAWで08-O Sに続き、東南端は5-20

区へ伸びるが、不明である。検出長24.0m、幅0.4m、深度0.14mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

04-OS AWの北部からECの西南部まで東南方向に伸び、ECの西南部でDDの西南部に向かって東北方向に直角に曲がる、底辺が東南を向いたL字形の溝である。石詰の暗渠である。西北端は06-OSに、東北端は01-OWにつながり、DAで10-OSとつながる。検出長24.5m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1：拳大の礫混じり）である。遺物は出土しなかった。

05-OS YWの東北部からWAの西南部まで北北西方向に伸び、WAでXYの東北部に向かって西北西方向に直角に曲がる、底辺が西北を向いたL字形の溝である。南南東端は01-OWに、西南西端は19-OZにつながる。検出長40.0m、幅0.5～1.2m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

06-OS XAの西北部からYBを通してABの東南部まで北北西方向に直線的に伸びる溝である。北北西端は05-OSにつながる。南南東端はABの東南部で浅くなり、消滅する。検出長13.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（5YR4/1）である。遺物は出土しなかった。

07-OS XYの東部からYXを通してYWの西部まで東北東方向に緩く曲線的に伸びる溝である。検出長12.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色粘土（10YR6/1）である。遺物は出土しなかった。

08-OS AVの東北部からYXを通してXAの中央部まで西南西方向に緩く曲線的に伸びる溝である。検出長15.5m、幅0.2m、深度0.14mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色粘土（10YR6/1）である。遺物は出土しなかった。

09-OS CEの西南部からBDを通してXBの西北部まで南南東方向に直線的に伸びる溝である。検出長23.0m、幅0.3m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（5YR6/1）である。遺物は出土しなかった。

10-OS DDの北部からDCを通してDAの中央部まで西南西方向に緩く蛇行して伸びる溝である。東北東端で01-OWにつながる。西南西端はDAの西南部で浅くなり、消滅する。検出長12.0m、幅0.9～1.9m、深度0.4mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色粘土（10YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

11-OS FBからEAを通してDYまで東南方向に直線的に伸びる溝である。検出長

10.0m、幅0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

12-O S D Yの東南部からE Yの西北部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。東北端は10-O Sにつながり、西南端は直接ではないが、5-20区の29-O Sに続く。検出長3.0m、幅0.4~1.4m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色粘土（5Y R6/1）である。遺物は出土しなかった。

13-O S F Aの西北部で検出した北北東方向に直線的に伸びる溝である。南南西端は5-20区へ伸びるが、不明である。検出長3.0m、幅0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

14-O S F Aの西南部からE Aの東南部まで南南西方向に直線的に伸びる溝である。南南西端は5-20区へ伸びるが、不明である。検出長4.5m、幅0.2m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

15-O S D Eで検出した西南西方向に直線的に伸びる溝である。西南西端は01-OWにつながり、東北東端は直接ではないが、5-7区の01-O Sに続く。検出長2.0m、幅0.6m、深度0.32mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層で、灰褐色土（10Y R6/1）である。遺物は出土しなかった。

16-O S E Aの西南部からE Yの東南部まで東北東方向にほぼ直線的に伸びる溝である。直接ではないが、5-20区の29-O Sに続く。検出長2.3m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R6/1）である。遺物は出土しなかった。

17-O Z D Yで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、東南から西北に伸びている。長さ0.8~2.2m、幅0.2m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

18-O Z Y CからB Dで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.5~4.5m、幅0.1m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

19-O Z W Aの東南部からY Wの中央部で検出した第7層を削り込んだ段である。北北西側が低くなっており、高低差は0.15~0.3mである。段の上面はT.P. +9.35m~T.P.

+9.25mで、割合平坦である。下面はT.P.+9.20m～T.P.+8.95mで、同じく平坦である。低い部分には褐灰色粘土（10Y R5/1）が堆積していた。5-6区の05-OZにつながる。
まとめ

調査区東北辺が一段高くなっており、西南側大部分と西北部が低くなっている。西南側の段の裾部に沿って溝（05-O S）が伸びており、段の途切れたところで西南方向に屈曲している。段の西北側は裾部に溝はない。この段は現在の地割りと平行しているが約4m西南にずれている。段の上面には溝、鋤溝が段や隣接する5-6区で検出した鋤溝と平行している。5-12・7・8・20区を通る溝13・02・03・15-O Sに直交するようであるが、実は5-12・7区で検出した16・01-O Sの地割りに沿っているようである。この両溝の終点が01-OWでここからは蛇行した溝（10-O S）となっている。当調査区のすぐ南から南西に谷5-46区（15-O R）・5-44区（16-O R）・5-11区（12-O R）・5-8区（11-O R）・5-20区（10-O S）・5-51区（04-O S）が伸びており、この谷の周辺は地割りが整然とはしていない。その影響で多少ゆがんでいると考えられる。西南部の溝・鋤溝はこの谷筋に並行している。西北部の溝も多少西に湾曲しており、谷筋の影響と考えられる。ここでは井戸（01-OW）・溝（02・03・04・10・15-O S）が同時期と考えられ、溝（05・06・07・08・09-O S）・鋤溝（18-O Z）・段（19-O Z）がほぼ同時期か、新しいと考えられる。

5-20区（付図2・図版15・22）

C地区の西南部で、東南辺が開拓道水路に面し、5-35区の南に位置する。調査直前は個人住宅と畠であった。標高はT.P.+10.50mである。調査区の形状は長辺の一边が西北を向いた長方形である。調査面積は980㎡である。

調査により確認した土層は基本的に6層あり、第1・2層で近・現代の、第3～5層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第5層上面で井戸、土坑、溝、鋤溝を、第6層上面で流路を検出した。

層序（第65図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。盛土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（N5/0：第III-a層）で、西北側が低くなっており、IVからHAを境として0.2mの標高差があり、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+10.30mで

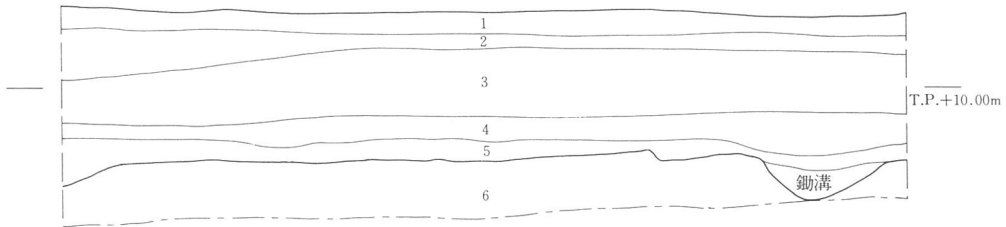
ある。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第3層 黄褐色土（10Y R5/6：灰黄色土（10Y R4/2）のブロック土混じり：第V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+10.20mである。層厚は0.4mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 灰色土（N5/0：第VII-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.80mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 灰色粘土（N5/0：第VI層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.70mである。層厚は0.1mを測る。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 にくい黄橙色粘土（10Y R6/4：第IV層）で、北側が低くなっており、NB・JD・JGを境として0.2mの標高差があり、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+9.60mである。遺物は出土しなかった。



第65図 末廣遺跡5-20区基本土層断面図

遺構

第1遺構面（付図2）

01-OW FDの東部で検出した不整半円形の井戸である。東側は5-8区の01-OWに続く。肩部検出長径3.3m・検出短径1.2m、底部検出長径2.0m・検出短径0.7m、深度0.63m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層で、灰褐色粘土（7.5Y R5/1）である。遺物は出土しなかった。

02-OO HDの西部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径1.5m・短径1.2m、底部長径1.0m・短径0.6m、深度0.79mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10Y R5/1）である。遺物は出土しなかった。

03-OO HBの東部からHCの中央部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径3.7m・短径1.2m、底部長径3.2m・短径0.9m、深度0.78mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層あり、上から褐灰色土（10Y R5/1：黄色粘土のプ

ロック混じり)が0.3m、黒褐色粘土(10Y R3/2)が0.45mである。遺物は近代の陶磁器・瓦が出土した。

04-00 JFの中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長辺1.3m・短辺1.0m、底部長辺1.0m・短辺0.6m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(7.5Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

05-00 KCの東部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が北北東方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.6m、底部長径0.4m・短径0.4m、深度0.15mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y 5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-00 IDの東北部からHDの東南部で検出した不整菱形の土坑である。肩部長軸3.5m・短軸2.9m、底部長軸1.7m・短軸1.4m、深度0.76mを測る。断面形状は片寄った逆台形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y 5/1)である。遺物は出土しなかった。

07-00 FYの西部で検出した不整楕円形の土坑である。東側は調査区外へ広がっている。肩部検出長径1.3m・短径0.7m、底部長径1.0m・短径0.6m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(10Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

08-00 MBの東南部で検出した不整隅丸長方形の土坑である。長軸が東北東方向を指す。肩部長辺0.9m・短辺0.7m、底部長辺0.5m・短辺0.4m、深度0.12mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

09-00 IDからJCの東北部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が北北東方向を指す。東北側が06-00に切られ、西南側が17-0Sを切っている。肩部検出長径4.0m・短径1.1~1.8m、底部検出長径3.5m・短径0.7~1.0m、深度0.35mを測る。断面形状は口の開いたU字形で、中央部で長軸に直交し、上幅0.5m、下幅1.0m、高さ0.2mの高まりがある。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

10-0S HFの中央部からGBを通してEWの南部まで東南東方向に緩く曲線的に伸びる溝である。東南東端は5-8区の04-0Sに、西北端は5-51区の04-0Sに続く。検出長27.5m、幅1.0~2.0m、深度0.21mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5Y R5/1)である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

11-OS EWの東部からEXを通してFXの東部まで西北西方向に直線的に伸びる溝である。西北西端は5-51区の05-OSに続く。FXの東北部で29-OSに切られ、浅くなり消滅する。検出長5.5m、幅0.4m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

12-OS FWで検出した西北方向に直線的に伸びる溝である。北北西端は5-51区の06-OSに続く。検出長3.5m、幅0.2~0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(5YR6/2)である。遺物は出土しなかった。

13-OS FWで検出した北北西方向に曲線的に伸びる溝である。北北西端は5-51区の07-OSに続く。検出長2.5m、幅0.2m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。37-OZと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、褐灰色土(5YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

14-OS IWの西辺中央部からIAの中央部まで東方向に伸び、JAの東北部まで南東方向に曲がり、LAの東北部まで南北方向に伸び、LYの東南部へ西南方向に鈍角屈曲する、やや角張った逆L字形の溝である。IWの西端は調査区外へ伸び、LYの西端は攪乱孔に切られ、IYで15-OSに切られる。検出長27.0m、幅0.4m、深度0.11mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(5YR5/2)である。遺物は出土しなかった。

15-OS FDの西部からHAを通してJWの東部まで東北東方向に直線的に伸びる溝である。東北東端は5-8区の03-OSに続き、西南西端は調査区外へ伸びる。検出長27.5m、幅1.0~1.8m、深度0.43mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、灰色粘土(5Y4/1)である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

16-OS MAの東南部からJCを通してHDの西南部まで南南西方向に直線的に伸びる溝である。北北東端は02-OOに、南南西端は調査区外へ伸びる。検出長22.0m、幅0.6m、深度0.11mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

17-OS NAの東北部からLBを通してJCの東北部まで南南西方向に伸びる、底辺が西北を向いたL字形の溝である。東南東端は09-OOに切られる。南南西端は調査区外へ伸びる。検出長17.0m、幅0.5m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

18-OS ICの東部からIBを通してHA東南部まで東南東方向に直線的に伸びる溝

である。I Aで15-O Sに切られている。検出長8.0m、幅0.8~1.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

19-O S J Gの東南部からJ Fを通過してI Eの中央部まで東南東方向に直線的に伸びる溝である。東南東端は5-8区へ伸びるが、不明である。検出長11.0m、幅0.4m、深度0.08mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

20-O S H Bの中央部で検出した西方向に直線的に伸びる溝である。検出長1.0m、幅0.5m、深度0.19mを測る。断面形状はU字形である。東端は03-O Oに切られている。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

21-O S H Bの中央部で検出した西方向に緩く曲線的に伸びる溝である。石詰の暗渠である。検出長2.0m、幅0.4m、深度0.11mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(10Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

22-O S K Gの西南部からK Fを通過してJ Eの東南部まで東南東方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。東南東端は調査区外へ伸びる。検出長8.5m、幅0.5m、深度0.11mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(7.5Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

23-O S L Gの西北部からK Fを通過してJ Eの中央部まで東南方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。東南東端は調査区外へ伸びる。検出長9.5m、幅0.2m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(7.5Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

24-O S J Dの東部からJ Eを通過してK Fの東南部まで西北方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。東南東端は調査区外へ伸びる。検出長10.0m、幅0.2m、深度0.03mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(7.5Y R6/1)である。遺物は出土しなかった。

25-O S J Dの西南部からK Eを通過してL Gの西北部まで西北西方向に直線的に伸びる溝である。東南東端は24-O Sに切られている。検出長12.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(7.5Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

26-O S G Yの中央部からG Cを通過してG Eの西南部まで西北西方向にほぼ直線的に

伸びる溝である。石詰の暗渠である。GYの中央部で10-O Sに切られている。検出長6.5m、幅0.5m、深度0.17mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1：拳大の礫混じり)である。遺物は出土しなかった。

27-O S KGで検出した西北方向に緩やかな曲線的に伸びる溝である。西北端は17-O Sに切れ、東南東端は調査区外へ伸びる。検出長2.5m、幅0.5~1.3m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

28-O S JGで検出した西北西方向に伸びる溝である。北側は19-O Sに切られている。検出長2.5m、幅0.3~0.6m、深度0.13mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

29-O S FXの西南部から北北東方向と東北東方向に分かれるY字形の溝である。西南端は直接続かないが、10-O Sに、北北東端は5-35区の12-O Sに、東北東端は5-35区の16-O Sに続く。検出長2.5m、幅0.4~0.8m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

30-O Z JCからMEで検出した鋤溝群である。条数は約11条あり、南南西から北北東に伸びている。長さ1.5~8.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。31-O Zと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

31-O Z JDからLDで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、東南東から西北西に伸びている。長さ1.0~3.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。30-O Zと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

32-O Z LCからNCで検出した鋤溝群である。条数は8条あり、南南西から北北東に伸びている。長さ1.5~4.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

33-O Z IYからMAで検出した鋤溝群である。条数は約14条あり、南から北に伸びている。長さ0.5~7.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。34-O Zと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

34-O Z JBで検出した鋤溝である。条数は1条であり、東から西に伸びている。長

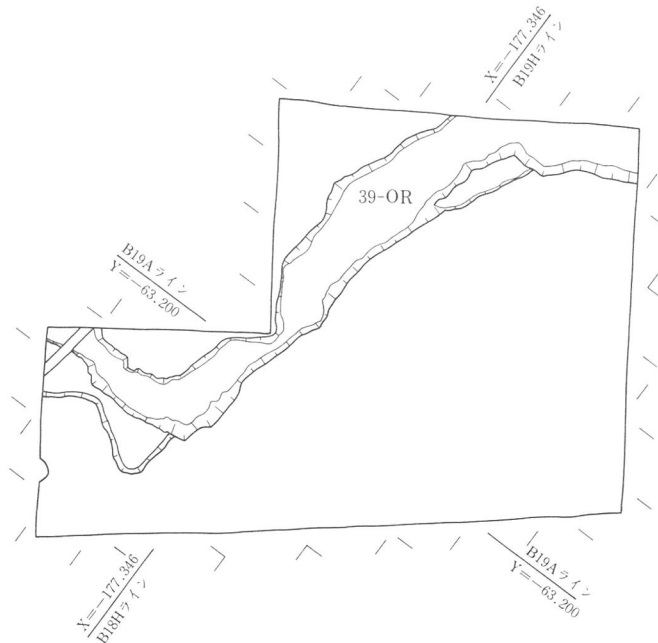
さ2.0m、幅0.2m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。33-OZに切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

35-OZ HVからJXで検出した鋤溝群である。条数は7条あり並行している。南から北に伸びている。長さ0.5~6.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。14-OSに切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

36-OZ IXからIYで検出した鋤溝である。条数は1条であり、東から西に伸びている。長さ2.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

37-OZ FVからGWで検出した鋤溝群である。条数は5条あり、東南から西北に伸びている。長さ0.5~4.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

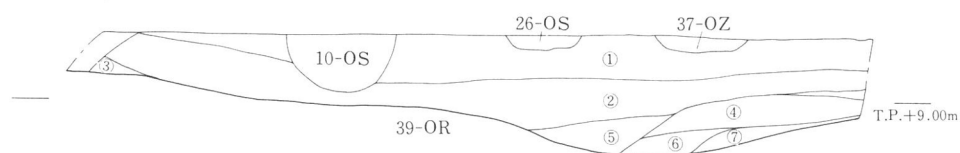
38-OZ KFからLFで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、東南東から西北西に伸びている。長さ1.0~3.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。



第66図 末廣遺跡5-20区第2遺構面平面図

第2遺構面（付図6第66図・図版22）

39-OR（第67図） DXからJGで検出した流路である。検出面での平面形状は緩やかなカーブを描く。東南端は5-11区の11-ORに続き、西北端は5-51区へ伸びるが、不明である。検出長45.0m、幅4.0~6.0m、深度0.6~0.7mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は7層あり、①にぶい褐色粘土（7.5YR5/4）、②灰色粘土（N6/0）、③黄橙色粘土（10YR7/8）、④灰オリーブ色粘土（5Y6/2）、⑤灰白色粘土（N7/0）、⑥橙色粘土（7.5YR6/6）、⑦灰黄色粘土（2.5Y6/2）である。遺物は出土しなかった。



第67図 末廣遺跡5-20区39-OR埋土断面図

まとめ

井戸、土坑、鋤溝、溝、流路は出土遺物が無いか、極僅かで時期は明らかでない。15-OSは5-8区の03-OSから続く現況の地割りに沿った水路で、時期が新しく、佐野飛行場廃絶以後のものである。10-OSは5-8区の06-OSから続く39-ORを切り込んで伸びる水路である。最終の埋没時期は埋土からすると佐野飛行場建設時であるが、掘削時期は不明である。16・17-OSは側溝状に伸びる溝で、16-OSは09-OSに続き、さらに5-11区の01・02-OS、5-23区の05・06・04-OSなどにつながり、耕地を区画している。区画する溝の西方では36-OZが南北2枚の耕地を形成しており、僅かに高さが異なっている。上面（南側）、下面（北側）で異なった方向に伸びる鋤溝を検出している。礫詰暗渠26-OSは10-OSと平行して伸びており、水路と関係を持って掘削されたのであろう。

5-51区（付図2・図版15・22）

C地区の西端で西北辺が無名道路に面し、5-35区の西南に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はT.P.+10.30mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた台形である。調査面積は約360m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第2~4層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で井戸、溝、鋤溝を検出した。

層序（第68図）

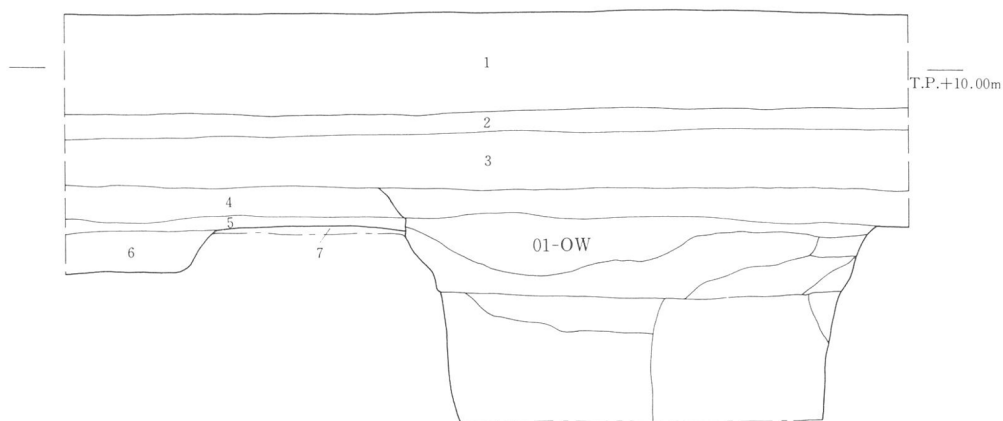
第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.5mを測る。盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色土（10Y R6/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.80mである。層厚は0.1～0.2mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第3層 黄褐色土（10Y R5/6：灰黄色土（10Y R4/2）のブロック土混じり：第V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.70mである。層厚は0.2mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第4層 褐灰色土（10Y R6/1：第VII-a層）で、全域に広がる耕作土である。上面の高さはT.P.+9.50mである。層厚は0.1mを測る。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 明黄褐色土（10Y R7/6：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。

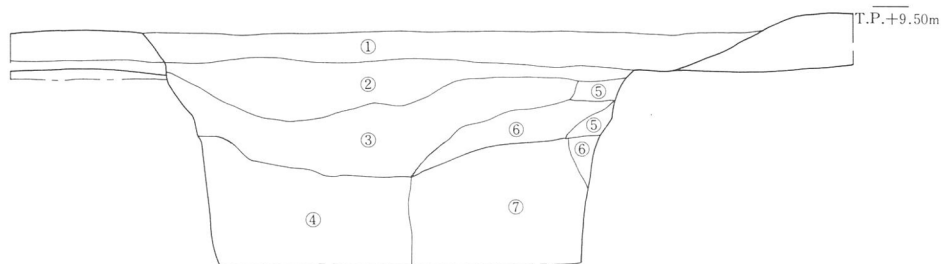


第68図 末廣遺跡5-51区基本土層断面図

遺構

01-OW（第69図） C Sの西～中央部で検出した楕円形の井戸である。西北側が調査区外へ広がっている。長軸が西南方向を指す。断面形状は二段で東南側にテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。肩部長径2.7m・短径1.0m・深度5.5m、二段目長径2.2m・短径0.5m、底部検出長径1.9m・検出短径0.3m・深度1.3m以上を測る。埋土は7層で、①灰白色土（2.5Y7/1）、②灰黄色土（2.5Y7/2：砂混じり）、③褐色土（7.5Y R4/4：灰色土混じり）、④灰白色土（N7/0:

褐色土混じり)、⑤黄色土 (2.5Y8/8: 砂混じり)、⑥黄色粘土 (2.5Y8/8)、⑦青灰色粘土 (5B G6/1: 砂・黄色粘土・灰色粘土混じり) である。遺物は出土しなかった。

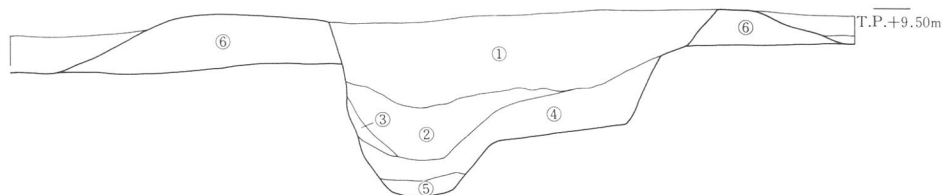


第69図 末廣遺跡 5-51区01-OW埋土断面図

02-OS AUの東部からAVの西北部まで東北東方向に緩やかに曲がって伸びる溝である。東北東端は5-35区の08-OSに続き、西南西端は調査区外へ伸びる。検出長3.0m、幅0.6~1.3m、深度0.05mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、褐灰色土 (10Y R6/1) である。遺物は出土しなかった。

03-OS CTからDTを通してETまで北方向に緩やかに曲がって伸びる溝である。北端はGTの西北部と04-OSにつながり、南端は調査区外へ伸びる。検出長10.0m、幅1.0~2.0m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土 (10Y R4/1) である。遺物は出土しなかった。

04-OS (第70図) EWからDUを通してBTまで東南方向にほぼ直線的に伸びる溝である。両肩で堤と杭列を検出している。東南端は5-20区の10-OSに続き、西北端は調査区外へ伸びる。検出長16.5m、幅2.0m、深度0.75mを測る。断面形状は片側(東北側)が二段でテラスを有し、上部は逆台形、下部はU字形である。埋土は5層あり、①灰白色土 (2.5Y7/1: 砂・礫混じり)、②明緑灰色粘土 (10G7/1)、③明青灰色粘土 (5B G7/1: 礫混じり)、④明青灰色粘土 (10B G7/1: 砂混じり)、⑤明緑灰色土 (10G Y8/1: 微砂混じり) である。遺物は①・②・③から近世以降の陶磁器が出土した。



第70図 末廣遺跡 5-51区04-OS埋土断面図

05-O S B Tの中央部からC Uを通してE Wの中央部まで西北西方向に直線的に伸びる溝である。東南端は5-20区の11-O Sに続き、西北端は調査区外へ伸びる。検出長14.5m、幅0.3m、深度0.12mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-O S E Vの南部からD Uを通してD Tの東北部まで東南方向に直線的に伸びる溝である。東南端は5-20区の12-O Sに続く。検出長10.5m、幅0.1~0.4m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(5YR6/2)である。遺物は出土しなかった。

07-O S D Tの東南部からE Uで西方に短く屈曲してE Vの南部まで西北西方向に伸びる溝である。東南端は5-20区の13-O Sに続く。検出長8.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土(5YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

08-O Z E Tで検出した鋤溝である。条数は1条であり、南から北に伸びている。長さ2.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

09-O Z D RからD Sで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、西南西から東北東に伸びており並行している。長さ0.5~2.0m、幅0.2~0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

10-O Z D VからE Wで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、東南から西北に伸びており、並行している。長さ3.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

04-O Sは5-20区の10-O Sから続く水路である。最終の埋没時期は埋土からすると佐野飛行場建設時である。また、01-O Wも最終の埋没時期は佐野飛行場建設時である。しかし、04-O S・01-O Wともに掘削時期は不明である。5-20区の39-O Rから続く流路は検出していない。ただし、04-O Sを境として調査区の西南部で黄色粘土(2.5Y8/6:微砂泥)、黄灰色土(2.5Y4/1)などの流路の埋土と推定される土層を断面で確認している。

5-C地区まとめ

C地区は佐野飛行場の跡地にあたり、1945年以降の遺構は飛行場建設時の整地土より上層の床土面などで検出している。戦後に開拓地として利用されたようで、井戸（5-12区の01-O W）、東南東から西北西に平行に伸びる礫詰暗渠（5-46区の12-O S、5-12区の14-O S）、現況の地割りに沿った水路、鋤溝などがある。

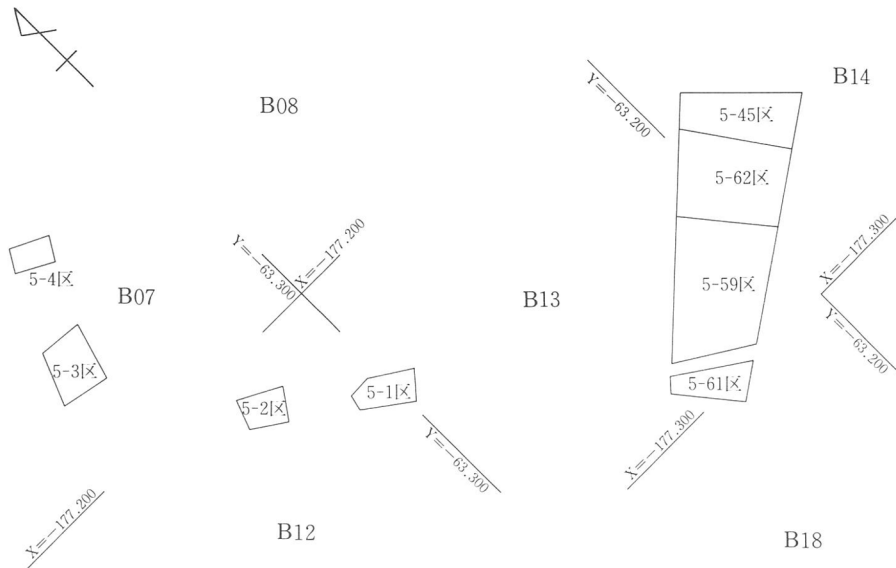
整地土よりも下層ないし、地山面で確認、検出した遺構が大半であるが、遺物の多くは整地土から出土しており、遺構からの出土遺物が無いか、極僅かで、それぞれの遺構の時期は明確にしがたい。C地区の西南部を蛇行する流路（5-46区の15-O R、5-44区の16-O R、5-11区の12-O R、5-8区の11-O R、5-20区の39-O R）は西北方向に続く。D地区5-51区の05-O Rの最下層より瓦器碗（13世紀中葉）が出土したことから、中世に遡ることが明らかとなった。しかし、他の埋土層からは出土遺物がなく、埋没の時期は不明である。

この流路を掘り込んで水路（5-46区の09-O S、5-44区の01-O S、5-11区の09-O S、5-8区の04-O S、5-20区の10-O S、5-51区の04-O S）が伸びる。この水路は明治年間（作成年不明）の「地籍図」に記された地割りと整合する部分があり、存続期間の一端が推定できる。近世の遺物が出土しており、掘削の開始は江戸時代まで遡る可能性が考えられる。

また、段、耕地を区画するように伸びる側溝状の溝、礫詰暗渠などは異なった方向性をもつが、最終的にはこの水路に結びついていくようである。これらの遺構はこの水路の存続期間のある時期に存在したものと見える。

4. 5-D地区の調査

無名道路（旧上町末廣線）と無名農道に挟まれた範囲で、面積は約17,000㎡である。全域が旧の末廣池であり、東南端は上町末廣線のつけ替えにより埋め立てられ、個人住宅が建っている。調査用の地区割りでは大C-3-5-B07・08・12・13・14・18地区でB07・08・12・13の交点が西北部にあたる。無名道路と上町末廣線の間は5-45・62・59・61区に分割して調査した。末廣池部分は5-1・2・3・4区として堤を部分的に調査し、その調査結果から池の中央部分は調査の必要がないと判断され、調査の対象からは除外された。



第71図 末廣遺跡 5-D地区調査区配置図

5-45区 (付図3・図版23・24)

D地区の東隅部で、西北辺が市道上町末廣線に、東南辺が無名道路に面し、5-62区の東北に隣接している。調査直前は工場と空地であった。標高はT.P.+10.40mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた台形である。調査面積は約480㎡である。

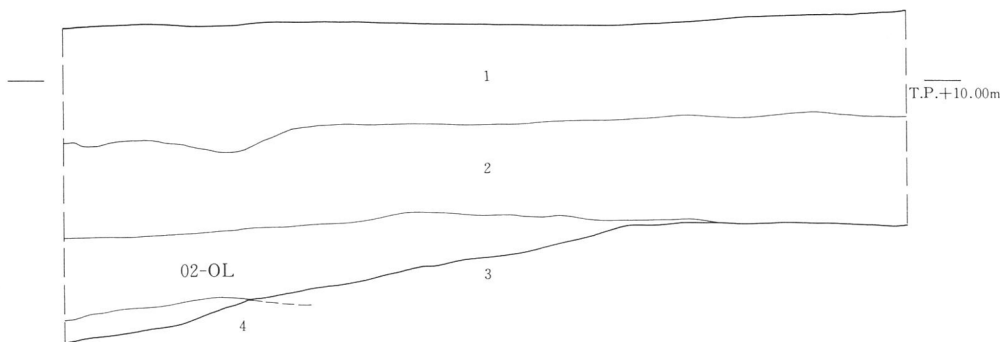
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1層で現代の遺物が出土しただけである。遺構の検出面は1面で、第2層上面で溝、旧末廣池を検出した。

層序 (第72図)

第1層 褐色土 (灰色土・黄色土混じり：第II層) で、全域に水平堆積している。層厚は1.2mを測る。上町末廣線建設時とその後の盛土である。遺物は現代の陶磁器・瓦が出土した。

第2層 黄色粘土 (2.5Y8/6：第IV層) で、ODからMGを境として南東方向にのみ堆積している。上面の高さはP EでT.P.+9.20mである。層厚は0.9mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第3層 明緑灰色土 (7.5GY7/1：礫混じり：第VI層) で、ODからMGを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+8.30mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第72図 末廣遺跡 5-45区基本土層断面図

遺構

01-O S NHの東南部からOGを通してPEの東南部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。西南端は5-62区の01-O Sに続く。検出長15.5m、幅1.1m、深度0.2mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層で、黄色粘土(5Y7/6)である。遺物は出土しなかった。

02-O L JDからMHで検出した池である。検出面での平面形状は底辺が東北を向いた台形である。西南側は5-62区の02-O Lに続く。東南～西北方向長径22.5～25.0m、東北～西南方向短径16.0m、深度0.9mを測る。断面形状は底辺が少し西北方向へ片寄った逆台形である。埋土は3層で、上から明黄褐色土(2.5Y7/6:小石・黄・灰色粘土のブロック混じり)が0.45m、オリーブ灰色土(2.5GY5/1:小石混じり)が0.3m、黒褐色粘土(7.5YR3/1)が0.15mである。遺物は出土しなかった。

まとめ

02-O Lは昭和40年代に埋められた末廣池の東南部にあたる。堤は検出していない。01-O Sは02-O Lの肩部から東南側へ約1～2m離れて直線的に伸びる溝である。この溝はちょうど削平された堤の基底部にあたること、また溝の埋土に良質の黄色粘土が埋められていることから、堤を築く前に池の水の漏水を防ぐために掘り込まれた鋼土の溝である。

5-62区(付図3・図版23・24)

D地区の東北部で、西北辺が市道上町末廣線、東北辺が無名道路に面し、5-45区の西南に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はQEでT.P.+10.30mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた台形である。調査面積は約530㎡である。

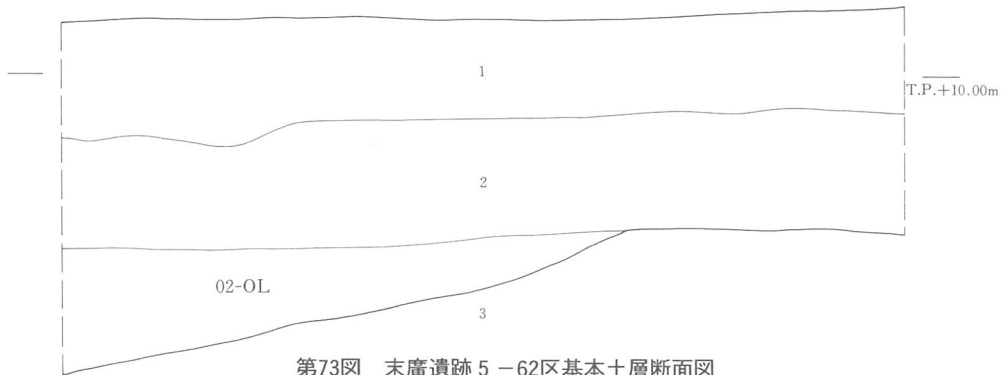
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で溝、池を検出した。

層序（第73図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は1.15mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 黄色粘土（2.5Y8/6：第IV層）で、SAからODを境として南東方向に堆積している。上面の高さはT.P.+9.15mである。地山である。遺物は出土しなかった。

第3層 明緑灰色土（7.5GY7/1：礫混じり：第VI層）で、SAからODを境として北西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+8.30mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



遺構

01-O S SAの中央部からRCを通過してQEの北部まで西南方向に直線的に伸びる溝である。東北端は5-45区の01-O Sに続き、西南端はSAの中央部で浅くなり、消滅する。検出長19.0m、幅1.0m、深度0.12mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層で、黄色粘土（5Y7/6）である。遺物は出土しなかった。

02-O L LAからPEで検出した池である。検出面での平面形状は底辺が東北を向いた逆台形である。東北側は5-45区の02-O Lに、西南側は5-59区の11-O Lに続く。東南～西北方向長径18.0～22.5m、東北～西南方向短径19.5m、深度0.8mを測る。断面形状は底辺が少し西北方向へ片寄った逆台形である。埋土は3層で、上から明黄褐色土（2.5Y7/6：小石・黄・灰色粘土のブロック混じり）が0.4m、オリーブ灰色土（2.5GY5/1：小石混じり）が0.3m、黒褐色粘土（7.5YR3/1）が0.1mである。遺物は出土しなかった。

まとめ

02-OLは昭和40年代に埋められた末廣池の東南部にあたる。堤は検出していない。01-OSは02-OLの肩部から東南側へ約2m離れて直線的に伸びる溝である。この溝はちょうど削平された堤の基底部にあたること、また溝の埋土に良質の黄色粘土が埋められていることから、堤を築く前に池の水の漏水を防ぐために掘り込まれた鋼土の溝である。

5-59区（付図3・図版23・24）

D地区の東南部で、西北辺が市道上町末廣線、東北辺が無名道路に面し、5-62区の西南に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はT.P.+10.60mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた台形である。調査面積は約840 m^2 である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1・2層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で溝、鋤溝、段、落ち込み、池を検出した。

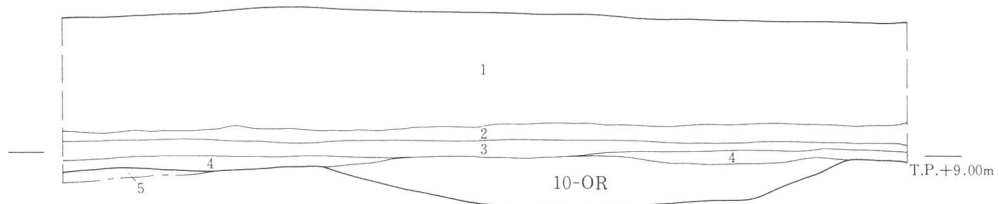
層序（第74図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は1.5mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰白色土（10Y8/1：マンガン斑混じり：第II-a層）で、ほぼ全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.10mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器・瓦が出土した。

第3層 黄色粘土（2.5Y8/6：第IV層）で、SY～WU～TQを境として南方向に全域に堆積している。上面の高さはT.P.+9.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 明緑灰色土（7.5GY7/1：礫混じり：第VII層）で、SY～WU～TQを境として北方向に全域に堆積している。上面の高さはTQでT.P.+8.80m、PWでT.P.+8.20mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第74図 末廣遺跡5-59区基本土層断面図

遺構

01-OS XSの東南部からWTを通過してVTの南部まで南南西方向に直線的に伸びる溝である。北北東端は11-OLへつながり、南南西端は調査区外へ伸びる。検出長10.5m、幅1.5m、深度0.3mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は2層あり、上から、黄色土（2.5Y8/6：黄灰色粘土ブロック混じり）が0.2m、明黄褐色土（2.5Y7/6：灰色粘土ブロック混じり）が0.1mである。遺物は出土しなかった。

02-OS XTの中央部で検出した西北西方向に直線的に伸びる溝である。西北西端は01-OSと交差し、東南東端は調査区外へ伸びる。検出長3.0m、幅0.6～1.0m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

03-OS VSの北部からVRを通過してWRの中央部まで東北方向にほぼ直線的に伸びる溝である。西南端は04-OSに切られている。検出長7.5m、幅0.4～1.8m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

04-OS XRの北部からVQを通過してUPの東南部まで東南方向に曲線的に伸びる溝である。西北端、東南端ともに調査区外へ伸びる。検出長11.0m、幅1.0m、深度0.16mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層で、灰白色粘土（10YR7/1）である。遺物は出土しなかった。

05-OS XTの東北部からXUの西北部まで西北方向に直線的に伸びる溝である。東南端は調査区外へ伸びている。検出長2.5m、幅0.6～1.0m、深度0.1mを測る。断面形状は浅く口の開いたU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

06-OS VSの西南部からNRの中央部まで東北方向に緩く曲線的に伸びる溝である。西南端は04-OSに切られている。検出長5.0m、幅0.2～0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

07-OZ VOからWQで検出した鋤溝群である。条数は5条あり、東南から西北に伸びている。長さ2.5～6.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（10YR7/1）である。遺物は出土しなかった。

08-OZ VPの北部からWQの東南部で検出した第3層を削り込んだ段である。東北

側が低くなっており、高低差は0.05mである。段の上面はT.P.+8.90mで、割合平坦である。下面はT.P.+8.85mで、同じく平坦である。低い部分には褐灰色土（10YR6/1）が堆積していた。両端とも調査区外へ伸びる。

09-OR XRからXSで検出した不整半円形の落ち込みである。東端は01-OSに切られる。南側は5-61区へ伸びるが、不明である。検出長5.5m、幅0.5~2.0m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層で、灰白色粘土（10Y8/1：マンガン斑混じり）である。遺物は出土しなかった。

10-OR WPからWQで検出した不定形の落ち込みである。南側が5-61区へ続いているが、検出しておらず、形状は明らかでない。検出長2.5m、幅0.4m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層で、灰白色土（10YR7/1）である。遺物は出土しなかった。

11-OL TQからWVを通りSYで検出した池である。旧末廣池の南隅に当たる。検出面での平面形状は不整扇形である。東北側は5-62区の02-OLに続く。長径27.0m、短径18.0m、深度0.85mを測る。断面形状は底辺が少し西方向へ片寄った逆台形である。埋土は3層あり、上から明黄褐色土（2.5Y7/6）が0.45m、オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）が0.3m、黒褐色粘土（7.5YR3/1）が0.1mである。遺物はどの層からも出土しなかった。

まとめ

11-OLは昭和40年代に埋められた末廣池の南隅部にあたる。堤は検出していない。また5-45区の01-OSや5-62区の01-OSなどの鋼土も検出していない。堤の基底部分にあたる場所から溝、鋤溝などの耕作に伴う遺構を検出している。堤築造以前に耕地であったと考えられる。

5-61区（付図3・図版23・25）

D地区の南隅で、西北辺が市道上町末廣線、東北辺が無名道路に面している。調査直前は個人住宅であった。標高はT.P.+10.40mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた四角形である。調査面積は約160m²である。

調査により確認した土層は基本的に7層あり、第1で現代の、第2・3層で近・現代の、第4・5層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第5層上面で井戸、溝、田畑、鋤溝を、第6層上面で流路を検出した。

層序 (第75図)

第1層 褐色土 (灰色土・黄色土混じり：第II層) で、全域に水平堆積している。層厚は1.1mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器・瓦が出土した。

第2層 黒色土 (10Y R2/1：第III-a層) で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.30mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

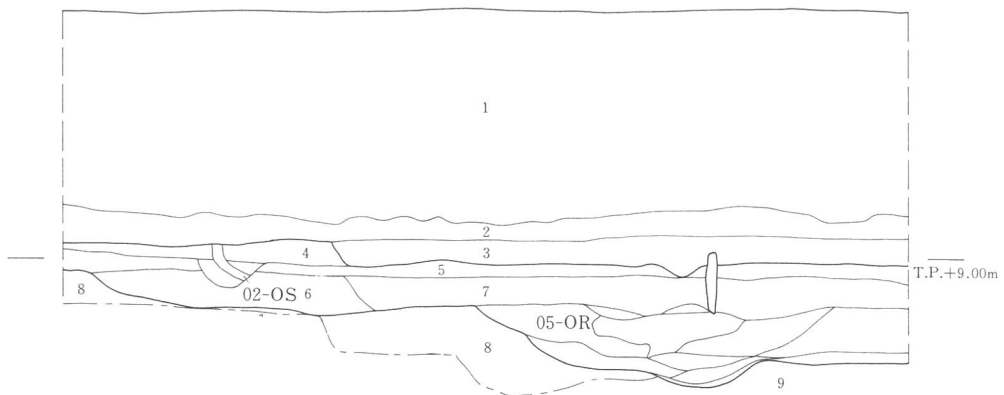
第3層 褐灰色土 (7.5Y R5/2：第III-b層) で、全域に広がる床土である。上面の高さはT.P.+9.20mである。層厚は0.2mを測る。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第4層 灰黄褐色土 (10Y R6/2：第VII-a層) で、AR～YQ～YOにかけて水平堆積している。上面の高さはT.P.+9.00mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 淡黄色土 (5Y 8/4：第VII-b層) で、AR～YQ～YOにかけて水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.90mである。層厚は0.2mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 黄色粘土 (2.5Y 8/8：第IV層) で、AR～YQ～YOより南側に堆積している。上面の高さはT.P.+8.70mである。層厚は0.3mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第7層 明緑灰色土 (7.5G Y7/1：礫混じり：第VI層) で、AR～YQ～YOより南側に堆積している。上面の高さはT.P.+8.40mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第75図 末廣遺跡5-61区基本土層断面図

遺構

第1遺構面（付図3・図版25）

01-OW YQの東北部で検出した不整半円形の井戸である。東北側は調査区外へ伸びる。肩部長径2.2m・短径1.4m、底部長径1.2m・短径1.0m、深度0.32m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層で、褐灰色粘土（10YR6/1）である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

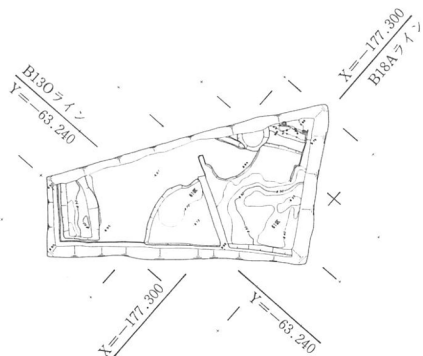
02-OS YQの東部からARの西北部まで北北西方向に直線的に伸びる溝である。両端とも調査区外へ伸びる。YQの東北部で01-OWに切られる。検出長3.0m、幅0.4m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

03-OZ YRからARで検出した第6層を削り込んだ畦畔である。YRの西北部で01-OWに切られる。西側が低くなっており、高低差は0.25mである。畦畔の上面はT.P.+9.05m、下面はT.P.+8.80mである。低い部分には灰黄褐色土（10YR6/2）、淡黄色土（5Y8/4）が堆積していた。

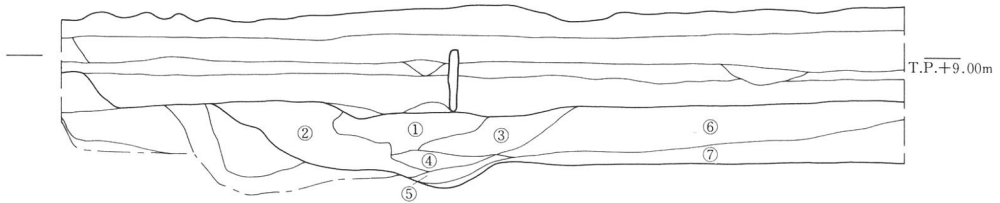
04-OZ XOからAQで検出した鋤溝群である。条数は約15条あり、南から北に伸びている。長さ3.5m、幅0.2m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（10YR7/1）である。遺物は出土しなかった。

第2遺構面（付図3-2第76図・図版25）

05-OR（第77図） YOからYQを通りARで検出した流路である。検出面での平面形状は不整扇形である。調査区外へ伸びるが、不明である。長径10.5m、短径6.5m、深度0.75mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は7層で、①浅黄色砂（5Y7/3）、②黄色粘土（2.5Y8/6）、③灰白色砂（7.5Y7/2）、④灰色砂（10Y6/1：小石混じり）、⑤褐灰色粘土（10YR4/1）、⑥灰褐色土（7.5YR6/2：砂混じり）、⑦褐灰色砂（7.5YR6/1：粗砂・拳大の礫混じり）である。遺物は⑤褐灰色粘土から瓦器碗、⑦褐灰色砂から須恵器が出土した。



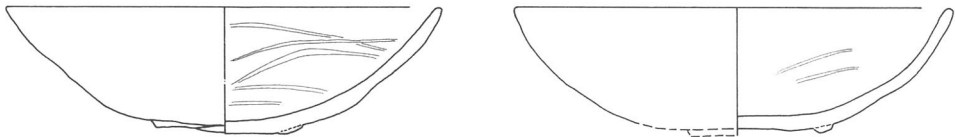
第76図 末廣遺跡5-61区第2遺構面平面図



第77図 末廣遺跡 5-61区05-OR埋土断面図

まとめ

01-OWは02-OS、03・04-OZよりも層位的に見て時期が新しい。03-OZはC地区5-51区の04-OSから続く溝の西南側の堤にあたる可能性もあるが、東北側が攪乱を受けており明瞭でない。05-ORはC地区から続く流路である。最下層より13世紀中葉の瓦器碗（第78図）が出土している。中世に遡ることが明らかとなった。



第78図 末廣遺跡 5-61区出土遺物実測図 S=1/2

5-1区（付図3・図版23・26）

D地区の末廣池堤の西南辺中央部に当たる。調査直前は末廣池の堤であった。標高はT.P. + 12.80mである。調査区の形状は長辺が東北を向いた長方形である。調査面積は約170㎡である。

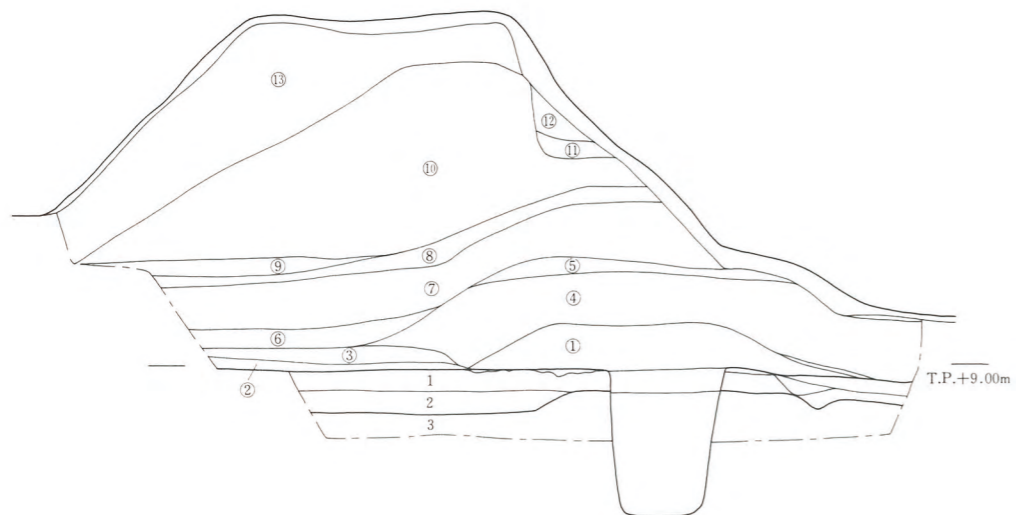
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第2層で近世～近代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で井戸、溝、段、堤を検出した。

層序（第79図）

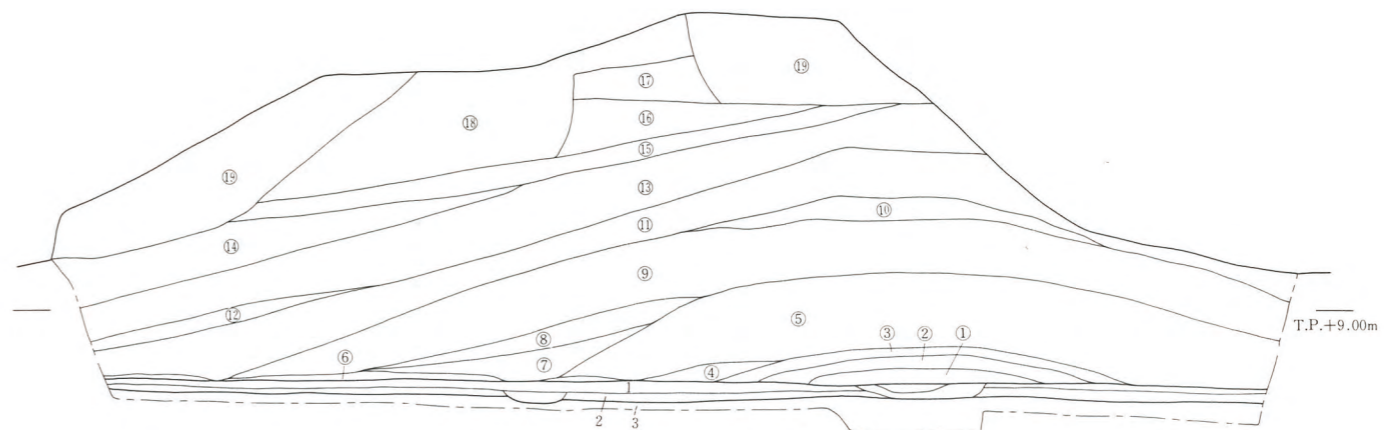
第1層 明褐色粘土（7.5YR5/6：径1～20cm大の礫混じり：Ⅲ-a）で、全域に水平堆積している。層厚は1.90mを測る。遺物は出土しなかった。

第2層 にぶい赤褐色土（7.5YR4/3：Ⅶ-a）で、西北側に堆積している。上面の高さはT.P. + 10.90mである。層厚は0.8mを測る。遺物は近世後半～近代初頭の陶磁器が出土した。

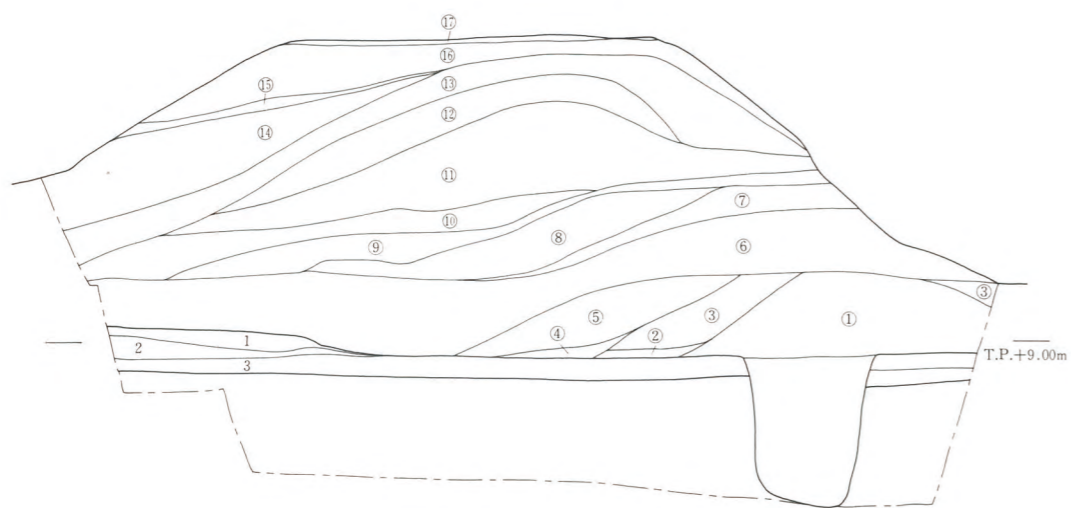
第3層 暗褐色土（5YR4/3：礫混じり：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P. + 10.10mである。層厚は1.20mを測る。地山である。



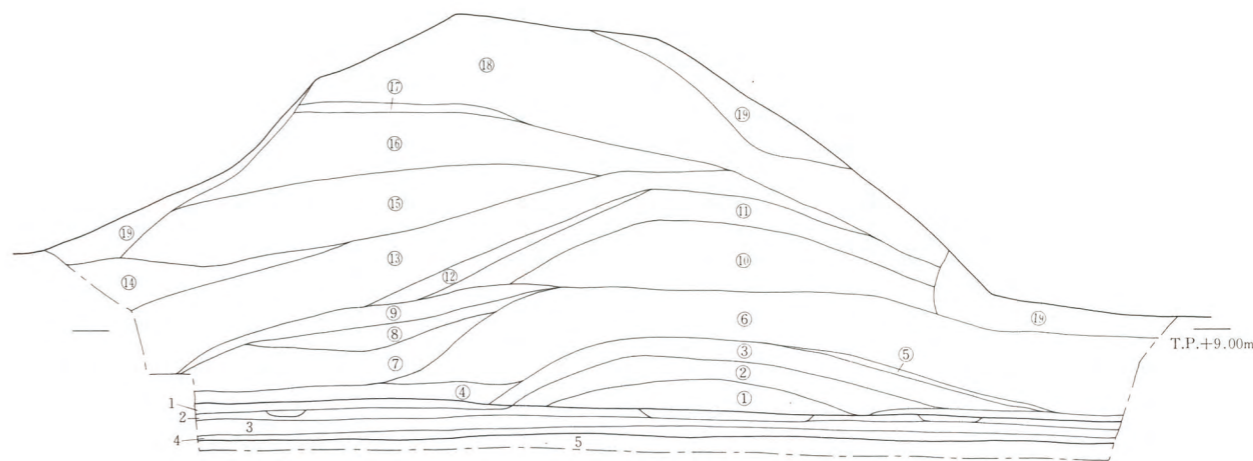
第79图 末廣遺跡 5-1区基本土層断面图



第81图 末廣遺跡 5-3区基本土層断面图



第80图 末廣遺跡 5-2区基本土層断面图



第82图 末廣遺跡 5-4区基本土層断面图

遺構

01-OW IAで検出した楕円形の井戸である。長軸が東北東方向を指す。IAで02-OSを切っている。肩部長径4.5m・短径3.5m、底部長径3.0m・短径2.0m、深度1.51mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色粘土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

02-OS HYの西南部からJAの西北部まで南南東方向に伸び、JAで東南東方向にくの字形に曲がる溝である。北北西端と東南東端は調査区外へ伸びる。検出長6.0m、幅1.0m、深度0.66mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、にぶい黄褐色土(10YR5/4:径1~10cm大の礫混じり)である。遺物は出土しなかった。

03-OZ IBの西部で検出した第3層を削り込んだ段である。IAで01-OWに切られる。東北側が低くなっており、高低差は0.4mである。段の上面はT.P.+8.60mで、下面はT.P.+8.20mで、同じく平坦である。低い部分には灰色粘土(N4/0)が堆積していた。

04-OL (第79図・図版26) 末廣池の東南辺の堤部分である。現在の堤は底辺8.55m、上辺2.8m、高さ3.8m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は3.85：2.8：2.2mを測る。断面形状は上辺が外側に寄った台形である。明褐色粘土(第1層)上に土盛りにより築堤されている。盛土は大きく4ブロックに分けられる。第1ブロックは、底辺5.15m、上辺2.9m、高さ1.2m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は0.5：2.9：1.75mを測る。盛土は①にぶい赤褐色砂(5YR4/4)②明黄褐色粘土(2.5Y7/6)③褐灰色粘土(10YR5/1)④明黄褐色粘土(2.5Y7/6:褐灰色粘土混じり)⑤明黄褐色粘土(2.5Y7/6)⑥暗褐色粘土(7.5YR3/3)で構成されている。第1ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第2ブロックは、底辺4.4m、上辺0.7m、高さ1.5m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は0.8：0.7：2.9mを測る。盛土は⑦灰白色粘土(7.5Y7/1)⑧淡黄色粘土(2.5Y7/3)で構成されている。第2ブロック段階での断面形状は上辺が東北に寄った台形である。第3ブロックは、底辺6.2m、上辺2.8m、高さ2.5m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1.9：2.7：1.6mを測る。盛土は⑨灰褐色土(5YR4/2:1~10の多量の礫混じり)⑩淡黄色粘土(2.5Y8/3:1~15cmの多量の礫混じり)⑪にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)⑫にぶい赤褐色土(5YR5/3)で構成されている。第3ブロック段階での断面形状は台形である。第4ブロックは底辺7.35m、上辺2.8m、高さ2.6m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は2.35：2.8：2.2mを測る。盛土は⑬明赤褐色土(2.5YR5/6)で構成されている。第4ブロック段階での断面形状は台形である。遺物は出土しなかった。

まとめ

堤の築堤にあたっては、盛土をする前にまず地山を掘り込んで整地をしている。盛土は4ブロックに分けられる。第3ブロックまで積み上げて成形した可能性があり、第4ブロックは昭和30年代の土地改良事業の際の山土を盛っている。堤の断ち割り断面で幅1.25m深cmの礫混じり)で遺物は出土していない。この溝はちょうど堤の基底部にあたり、この地点が地下水の通りの良い礫混じり土であることから、鋼土の溝として掘削されたと推定される。また整地土(第2層)出土の近世後半～近代初頭の陶磁器からこの堤の築造時期が限定できる。

が限定できる。

5-2区(付図3・図版23・27)

D地区の末廣池堤の西南辺中央部で西北よりに当たる。調査直前は末廣池の堤であった。標高はT.P.+12.20mである。調査区の形状は長辺が西北を向いた長方形である。調査面積は約150㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面である。第4層上面で堤を検出した。

層序(第80図)

第1層 にぶい赤褐色土(5Y R4/3III-a)で、西南部に堆積している。上面の高さはT.P.+9.20mである。層厚は0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第2層 明赤褐色土(5Y R5/6III-b)で、東北部と西南部に堆積している。上面の高さはT.P.+9.00mである。層厚は0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 黒褐色土(10Y R5/6:第VII-a層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.80mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 明褐色粘土(7.5Y R5/6:礫混じり:第IV層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.70mである。地山である。遺物は出土しなかった。

遺構

01-O L(第80図・図版27) 末廣池の東南辺の堤部分である。現在の堤は底辺10.3m、上辺4.0m、高さ3.6m、内側斜面:上辺:外側斜面の水平距離は3.6:4.0:2.7mを測る。断面形状は上辺が外側に寄った台形である。黒褐色土(第3層)上に土盛りにより築堤されている。盛土は大きく4ブロックに分けられる。第1ブロックは、底辺5.8m、上辺3.6

m、高さ0.9m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1：3.6：2.2mを測る。盛土は①褐灰色粘土（10Y R5/1）②褐灰色粘土（10Y R5/1）③明黄褐色粘土（2.5Y7/6）④明黄褐色粘土（2.5Y7/6：褐灰色粘土混じり）⑤明黄褐色粘土（2.5Y7/6：褐灰色粘土混じり）で構成されている。第1ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第2ブロックは、底辺6.95m、上辺2.3m、高さ2.0m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1：2.3：4.65mを測る。盛土は⑥灰白色粘土（7.5Y7/1：淡黄色粘土ブロック混じり）⑦淡黄色粘土（2.5Y7/3）⑧灰白色粘土（7.5Y7/1）⑨淡黄色粘土（2.5Y7/3：灰白色粘土混じり）で構成されている。第2ブロック段階での断面形状は台形が上下に段状に重なっている。第3ブロックは、底辺10.0m、上辺2.4m、高さ1.0m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1.9：2.5：5.6mを測る。盛土は⑩暗赤褐色シルト（5Y R3/3：少量の1～5cm大の礫混じり）⑪淡黄色粘土（2.5Y8/3：1～15cm大の礫混じり）⑫明黄褐色粘土（10Y R7/6）⑬淡黄色土（2.5Y8/3：多量の1～15cm大の礫混じり）で構成されている。第3ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第4ブロックは、底辺10.3m、上辺4.0m、高さ2.6m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は3.6：4.0：2.7mを測る。盛土は⑭明赤褐色土（2.5Y R5/6）⑮明赤褐色土（2.5Y R5/6：1～5cm大の礫混じり）⑯明赤褐色土（2.5Y R5/6）⑰赤灰色土（2.5Y R4/1）で構成されている。第4ブロック段階での断面形状は台形である。遺物は出土しなかった。

まとめ

第3層が旧耕作土で、この上面が堤築造以前の地表面となる。現在の堤となるまで盛土は4ブロックに分けられる。第3ブロックまで積み上げて成形した可能性がある。堤の断ち割り断面で幅1.4m、深度1.6mを測る断面U字形の溝を検出している。埋土はにぶい黄褐色土（10YR5/4：径1～10cmの礫混じり）で遺物は出土していない。この溝はちょうど堤の基底部にあたり、この地点の地山が地下水の通りの良い礫混じり土であることから鋼土の溝として掘削されたと推定される。

5-3区（付図3・図版23・28）

D地区の末廣池堤の西隅部に当たる。調査直前は末廣池の堤であった。標高はT.P.+12.20mである。調査区の形状は底辺が東を向いた台形である。調査面積は約200m²である。

調査により確認した土層は基本的に3層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第3層上面で鋤溝、堤を検出した。

層序（第81図）

第1層 灰色シルト（5Y4/1：第Ⅶ-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.20mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第2層 オリーブ黄色粘土（5Y6/4：第Ⅶ-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.10mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 灰オリーブ色粘土（5Y5/3：第X V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。

遺構

01-OZ QKからSLで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.5～9.0m、幅0.2～0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

02-OZ QJからRKで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、東南から西北に伸びている。長さ1.0～2.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

03-OL（第81図・図版28） 末廣池の西北辺の堤部分である。現在の堤は底辺13.4m、上辺1.65m、高さ4.0m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は4.75：1.65：7.0mを測る。断面形状は台形である。灰色シルト（第1層）上に土盛りにより築堤されている。盛土は大きく4ブロックに分けられる。第1ブロックは、底辺4.3m、上辺1.4m、高さ0.4m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1.5：1.4：1.4mを測る。盛土は①明黄褐色粘土（10YR7/6）②黄橙色粘土（10YR8/6）③明黄褐色粘土（10YR7/6：黄橙色粘土のブロック混じり）で構成されている。第1ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第2ブロックは、底辺7.7m、上辺2.3m、高さ1.2m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は2.8：2.3：2.6mを測る。盛土は④にぶい黄橙色粘土（10YR6/3：多量の1～15cm大の礫混じり）⑤明黄褐色粘土（2.5Y7/6）で構成されている。第2ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第3ブロックは、底辺13.4m、上辺1.3m、高さ3.0m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は5.0：1.6：6.8mを測る。盛土は⑥黄灰色シルト（2.5Y4/1）⑦暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）⑧灰白色粘土（10YR8/1：多量の1～10cm大の礫混じり）⑨灰白色粘土（7.5Y7/1：1～15cm大の礫混じり）⑩淡黄色粘土（2.5Y7/3）⑪淡黄色粘土（2.5Y8/3）⑫浅黄橙色粘土（7.5YR8/6：1～5cm大の礫混じり）⑬灰黄色粘土（2.5Y7/2）⑭浅黄橙色土（10YR8/4）⑮灰白色粘土（10YR7/1）で構成されている。第3ブロッ

ク段階での断面形状は上辺が東南に片寄った台形である。第4ブロックは、底辺9.6m、上辺1.65m、高さ2.7m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1.1：1.65：6.85mを測る。盛土は⑩淡黄色粘土（2.5Y8/4）⑪灰白色粘土（2.5YR8/2）⑫にぶい黄橙色土（10YR7/2）⑬明赤褐色土（2.5YR5/6）⑭にぶい黄橙色粘土（10YR7/3：1～5cm大の礫混じり）で構成されている。第4ブロック段階での断面形状は上下に段状に重なる台形である。遺物は出土しなかった。

まとめ

基本土層の第1層が旧耕作土で、この上面が堤築造以前の地表面となる。第2層の床土上面では01・02-0Zを検出している。現在の堤となるまで、盛土は大きく4ブロックに分けられるが、第1ブロックから第3ブロックの間には有機質の層がなく、第3ブロックと第4ブロックの間にわずかに有機質の層が認められる。そのため、各ブロックがそれぞれ古い段階での堤を形成していたというわけではなく、第1ブロックから第3ブロックまでを一時期に積み上げて台形に成形した可能性が高い。第4ブロックは昭和30年代の土地改良事業の際の山土を盛っているのである。このことから築堤は一時期のものであり、その後若干の補修が行われただけと考えるのが適当であろう。

5-4区（付図3・図版23・29）

D地区の末廣池堤の西北辺中央部で14区の東南東に当たる。調査直前は末廣池の堤であった。標高はT.P.+12.40mである。調査区の形状は長辺の一边が南南西を向いた長方形である。調査面積は約180m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第5層上面で堤を検出した。

層序（第82図）

第1層 灰色シルト（5Y4/1：Ⅶ-a）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.20mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第2層 灰色シルト（5Y4/1：Ⅶ-b）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.10mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第3層 灰色粘土（2.5Y8/2：Ⅶ-c）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.00mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 灰色粘土（10Y5/1：Ⅶ-d）で、全域に水平堆積している。上面の高さは

T.P.+7.90mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 灰オリーブ色粘土（5Y5/3：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.80mである。地山である。遺物は出土しなかった。

遺構

01-O L（第82図・図版29） 末廣池の西北辺の堤部分である。現在の堤は底辺11.3m、上辺2.2m、高さ4.1m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は4.4：2.2：4.7mを測る。断面形状は台形である。灰色シルト（第2層）上に土盛りにより築堤されている。盛土は大きく4ブロックに分けられる。第1ブロックは、底辺6.2m、上辺2.5m、高さ0.75m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は2.3：2.5：1.4mを測る。盛土は①明黄褐色粘土（10Y R7/6）②黄橙色粘土（10Y R8/6）③明黄褐色粘土（10Y R7/6：黄橙色粘土混じり）で構成されている。第1ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第2ブロックは、底辺6.5m、上辺3.3m、高さ1.2m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は1.4：3.3：1.8mを測る。盛土は④暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）⑤明オリーブ灰色土（2.5GY7/1）⑥明黄褐色粘土（2.5Y7/6）で構成されている。第2ブロック段階での断面形状は蒲鉾形である。第3ブロックは、底辺9.3m、上辺1.2m、高さ2.35m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は2.9：1.2：5.2mを測る。盛土は⑦黄灰色シルト（2.5Y4/1）⑧にぶい赤褐色粘土（5Y R5/4）⑨灰色粘土（7.5Y5/1）⑩灰白色粘土（7.5Y7/1）⑪淡黄色粘土（2.5Y7/3）⑫灰色粘土（N6/0）⑬淡黄色粘土（2.5Y8/3）で構成されている。第3ブロック段階での断面形状は上辺が東南に片寄った台形である。第4ブロックは、底辺10.5m、上辺2.2m、高さ3.05m、内側斜面：上辺：外側斜面の水平距離は3.6：2.2：4.7mを測る。盛土は⑭浅黄橙色粘土（7.5Y R8/6：1～5cm大の礫混じり）⑮灰黄色粘土（2.5Y7/2）⑯浅黄色粘土（10Y R8/4）⑰灰色シルト（5Y4/1）⑱にぶい黄橙色土（10Y R7/2：1～5cm大の礫混じり）⑲灰色土（5Y5/1）で構成されている。第4ブロック段階での断面形状は台形である。遺物は出土しなかった。

まとめ

基本層序第1層が旧耕作土で、この上面が堤築造以前の地表面となる。現在の堤となるまで盛土は4ブロックに分けられる。ここでも、第3ブロックまで積み上げて成形した可能性があり、第4ブロックは昭和30年代の土地改良事業の際の山土を盛っている。築堤は基本的に一度でなされており、上町末廣線建設時に現東南辺を築堤した時に全体の堤を補修したようである。

D地区のまとめ

D地区は末廣池とその近接地に当たる。末廣池の南隅から東南辺の近接した5-45・62・59区では、昭和30年代に入って末廣池東南辺側が埋められる以前の状態が明らかとなった。堤の盛土は削平されていたが、その基底部に当たる場所から「鋼土」の溝（5-45区の01-OS、5-62区の01-OS）を検出した。堤の調査では4ヶ所（5-1～4区）トレンチを設定した。ここでは、堤の盛り土の第1～第3ブロックの部分が版築工法がされていること、また「鋼土」の溝は礫混じりの地山が露出した2ヶ所（5-1・2区）でしか認められなかったことから、地山が地下水を透しにくい粘土質の場所では施工していないことがわかった。

末廣池の堤築造時期についてはわずかであるが出土遺物から、近世末～近代初頭と推定できる。

一方、5-61区の05-ORの下層から13世紀中葉と考えられる瓦器碗が出土した。この05-ORは東南へ約150m離れたB地区の5-54区の10-ORから始まり蛇行して伸びる流路である。中世に属する遺構は末廣遺跡全体を通じて明確でない。また遺物も見えてないが、開発の端緒となった時期かもしれない。

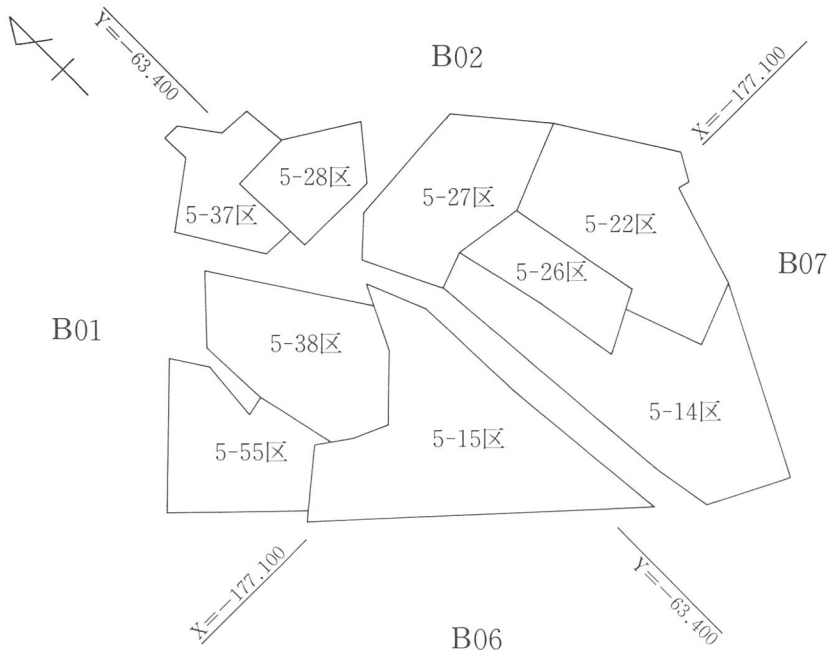
5. 5-E地区の調査

無名農道と南海本線に挟まれた範囲で、面積は約10,000㎡である。南隅から西北辺北よりに農道が斜めに伸びている。調査用の地区割りでは大C-3-5-B01・02・06・07地区で交点中央部にあたる。斜めに伸びる農道の東側は個人住宅と田畠であり、5-22・14・27・26・28・37区に分割して調査した。農道の西側も個人住宅と田畠であり、5-15・38・55区に分割して調査した。

5-22区（付図4・図版30・31）

E地区の東端で、東辺が末廣池西の西辺堤沿いの農道に接している。調査直前は北隅部が個人住宅で、他は田畠であった。標高はT.P.+7.90mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた多角形である。調査面積は1,000㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1層で現代の遺物が、第2層で近・現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、土坑、溝、鋤溝、流路を検出した。



第83図 末廣遺跡 5 - E 地区調査区配置図

層序 (第84図)

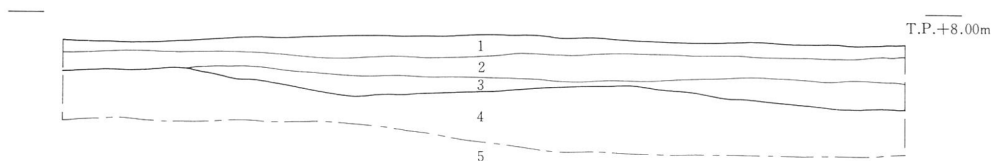
第1層 褐灰色土 (5Y R4/1 : 第Ⅲ-a層) で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器・瓦が出土した。

第2層 灰褐色土 (5Y R5/2 : 第Ⅲ-b層) で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P. +7.80mである。層厚は0.2mを測る。床土である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

第3層 明黄褐色土 (10Y R6/6 : 第Ⅵ層) で、FDからFIとLEからLKの間の範囲にはほぼ水平に堆積している。上面の高さはT.P. +7.60mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 橙色粘土 (5Y R7/6 : 第Ⅶ層) で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P. +7.50mである。層厚は0.2mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第5層 橙色粘土 (5Y R7/6 : 礫混じり : 第Ⅷ層) で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P. +7.30mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第84図 末廣遺跡5-22区基本土層断面図

遺構

01-OW YNの東南部からAOの西北部で検出した不整隅丸五角形の井戸である。肩部長径3.0m・短径2.5m、底部長径2.0m・短径1.0m、深度0.85m以上を測る。調査終了段階では素掘りではなく、縦板組の木枠が残存していた。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では上辺が東側に寄った逆台形であった。確認した埋土は2層で、上から、灰褐色土(N3/0:礫・黄褐色土混じり)が0.5m、暗灰色粘土(N3/:礫混じり)が0.35mである。遺物は灰褐色土から近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

02-OO ELの西から中央部で検出した東西に長い楕円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径1.8m・短径0.4m、底部長径1.7m・短径0.35m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

03-OS VIの西部からVKを通してUMの西北部まで西南西方向にはほぼ直線的に伸びる溝である。西南西端は5-27区へ伸びるが、不明である。東北東端は調査区外へ伸びる。検出長18.5m、幅0.6~1.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅い逆台形である。埋土は1層で、灰褐色土(5YR5/2)である。遺物は出土しなかった。

04-OS BJの中央部から東南方向に伸び、BJの東南部からBLを通してANの中央部まで東北東方向に伸びる、底辺が南南東を向いたL字形の溝である。検出長17.5m、幅0.3~0.9m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰褐色土(5YR5/2)である。遺物は出土しなかった。

05-OS CMの南部からEMを通してFMの西北部まで北方向に緩く曲線的に伸びる溝である。南端は5-14区へ伸びるが、不明である。検出長9.5m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色粘土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

06-OS CMの南部からDMの東南部を通してEMの南部まで北方向に緩く曲線的に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びる。検出長6.5m、幅0.3~0.6m、深度0.07mを

測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

07-O S C Nの西北部からDMの東部まで北北東方向に屈曲して伸びる溝である。南南西端は調査区外へ伸びる。検出長6.0m、幅0.2~0.8m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

08-O S D Iの中央部からD Jを通してC Jの東南部まで東北東方向に直線的に伸びる溝である。西南西端は5-14区の13-O Sに続く。東北東端はC Jの東南部で浅くなり消滅する。検出長6.0m、幅0.1~0.9m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

09-O Z B MからF Kで検出した鋤溝群である。条数は約20条あり、西南から東北に伸びている。長さ1.0~9.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

10-O Z V LからB Lで検出した鋤溝群である。条数は約10条あり、西南から東北に伸びている。長さ2.5~23.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

11-O Z D MからE Mで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ2.0~4.5m、幅0.2~0.6m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

12-O R (第85図) G JからG Kで検出した流路である。検出面での平面形状は扇形である。東南東方向は5-14区の22-O R、南方向は5-14区の23-O Rに現代の用水路を挟んで続く。長さ5.0m、幅2.5m、深度0.4mを測る。断面形状は上辺が南南東へ片寄った逆台形である。埋土は3層で、①明オリブ灰色粘土(5GY7/1)、②灰白色粘土(N7/0)、③灰オリブ色粘質砂(7.5Y6/2)である。遺物は近世の陶磁器が出土した。



第85図 末廣遺跡5-22区12-O R埋土断面図

まとめ

井戸、土坑、溝、鋤溝は出土遺物が無いが、極僅かで、時期は明確にしがたい。近代以降の耕作に伴う遺構と考えられる。12-O Rも時期は明らかでない。

5-14区（付図4・図版30・32）

E地区の南端から中央部で、西辺は稲倉2号用排水路、東南東辺は末廣池の西辺堤沿いの農道に接し、5-22区の南・西側にある。調査直前は南隅が個人住宅の一部、その他は田畠であった。標高はT.P.+8.20mである。調査区は現代用水路を挟んで南・北二つに分かれている。調査区の形状は北側の底辺が南を向いたL字形、南側の底辺が北北西を向いた多角形である。調査面積は1,290㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1層で近世・現代の、第2層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第4層上面で土坑、溝、鋤溝、段、流路を、第5層上面で流路を検出した。

層序（第86図）

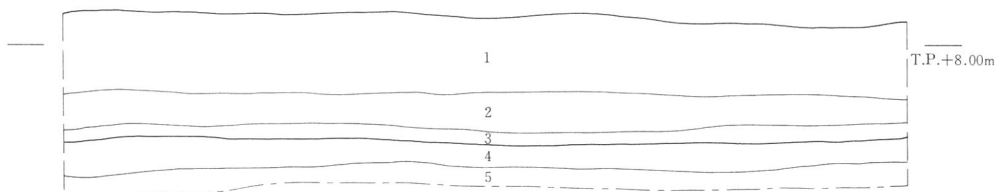
第1層 灰色土（N5/0：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器・瓦とともに近世の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第2層 緑灰色土（10GY5/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.00mである。層厚は0.3mを測る。耕作土である。遺物は近世の陶磁器が出土した。

第3層 灰白色粘土（2.5Y7/1：第Ⅵ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.70mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 黄橙色粘土（2.5Y7/8：第Ⅶ層）で、少し起伏があり、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+7.60mである。層厚は0.3mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第5層 黄橙色土（2.5Y7/8：拳大の礫混じり：第ⅩⅥ層）で、少し起伏があり、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+7.30mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第86図 末廣遺跡5-14区基本土層断面図

遺構

第1遺構面（付図4・図版32）

01-00 GHの東南部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東北東方向を指す。03-0Sに切られている。肩部長径2.1m・短径1.1m、底部長径1.5m・短径0.5m、深度0.65mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（5YR6/1）である。遺物は出土しなかった。

02-00 GIの東部で検出した隅丸正方形の土坑である。03-0Sに切られている。肩部長辺0.9m・短辺0.9m、底部長辺0.7m・短辺0.6m、深度0.32mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

03-0S HGの西部からHHを通過してGIの中央部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。西南西端は04-0Sに切れ、東北東端は02-00を切り、5-22区へ伸びるが、不明である。検出長7.5m、幅0.5m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

04-0S EDの中央部からEFの西北部まで東北東方向に伸び、HGの西南部まで南南東方向に伸びる、北北西を向いたT字形の溝である。東北東端は5-26区へ、西南西端は調査区外へ、南南東端は用水路を挟んで5-14区の南方へ伸びるが、それぞれの続きは不明である。検出長23.0m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

05-0S EDの北部からDEを通過してDFの西南部まで東北東方向に直線的に伸びる溝である。西南西端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長8.0m、幅0.6m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

06-0S JEの中央部からIHを通過してHRの中央部まで東北東方向にほぼ直線的に伸びる溝である。IHで07-0Sに切られるが、再び伸びる。検出長24.0m、幅0.6m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

07-0S IHの西部からJHを通過してJIの中央部まで西北方向に緩く曲線的に伸びる溝である。15-0Zを切っている。西北端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長8.0m、幅0.2m、深度0.8mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色

土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

08-O S K Kの中央部から南南西方向に伸び、O Iの西部からO Gの北部まで西北西方向に伸びる、底辺が東南東を向いたL字形の溝である。両端ともに調査区外へ伸びるが、不明である。検出長24.0m、幅0.6m、深度0.11mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色粘土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

09-O S N Eの中央部からN Gを通過してO Iの西北部まで西北西方向に直線的に伸びる溝である。東南東端は08-O Sに切られ、西北西端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長14.0m、幅0.7m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、黄灰色粘土（2.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

10-O S O Hの東部で検出した北方西方向に直線的に伸びる溝である。北北西端は16-O Sに、南南東端は08-O Sに切られている。検出長1.0m、幅0.2m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

11-O S M Eの西北部からN Eの西北部まで北方向に直線的に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長4.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

12-O S E Gの中央部で検出した北北西方向に直線的に伸びる溝である。北北西端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長2.0m、幅0.2~0.4m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

13-O S D Hの東南部からE Gを通過してF Fの北部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。西南西端は04-O Sに切られ、東北東端は5-22区の08-O Sに続く。検出長11.0m、幅0.4m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

14-O S F Fの西北部からE Fの西南部を通過してF Eの東北部まで伸びる、東北東を向いたY字形の溝である。西南西端は18-O Zに、東南東端は04-O Sに切られている。検出長3.0m、幅0.5m、深度0.14mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

15-O Z I HからN Iで検出した鋤溝群である。条数は約20条あり、南南西から北

北東に伸びている。長さ0.5～24.0m、幅0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

16-OZ VDからDEで検出した鋤溝群である。条数は8条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ0.5～31.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

17-OZ DHからFHで検出した鋤溝群である。条数は7条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ0.5～11.0m、幅0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

18-OZ FDからGEで検出した鋤溝群である。19-OZの低い方にある。条数は4条あり、西南西から東北西に伸びている。長さ2.5～6.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

19-OZ FDからIFで検出した第4層を削り込んだ段である。西側が低くなっており、高低差は0.25mである。段の上面はT.P.+7.50mで、割合平坦である。下面はT.P.+7.25mで、同じく平坦である。低い部分には灰白色粘土（2.5Y7/1）が堆積していた。南南東側は現代用水路を挟んだ5-14区へ伸びるが、不明である。西南西側は調査区外へ伸びる。

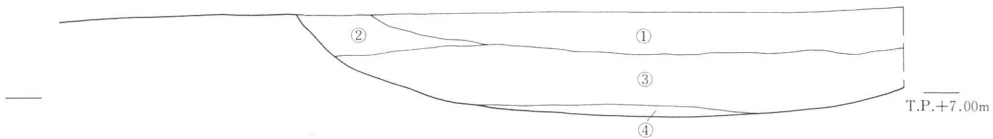
20-OZ VCからXDで検出した第4層を削り込んだ段である。西側が低くなっており、高低差は0.1mである。段の上面はT.P.+7.35mで、割合平坦である。下面はT.P.+7.25mで、同じく平坦である。低い部分には明黄褐色粘土（10YR6/6）が堆積していた。西南西側は調査区外へ伸びる。

21-OR HDからHEで検出した流路である。検出面での平面形状は扇形である。南南東側は23-ORに続く。長さ5.5m、幅3.0m、深度0.35mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は2層で、上から、黄色土（2.5Y7/8）が0.1m、暗灰色粘土（N3/0）が0.25mである。遺物は出土しなかった。

22-OR HKからILで検出した流路である。検出面での平面形状は底辺が西南を向いた丸みをもつ台形である。西北側は5-22区の12-ORに続く。長さ6.0m、幅4.0m、深度0.28mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は2層で、上から、黄色土（2.5Y7/8）が0.1m、暗灰色粘土（N3/0）が0.18mである。遺物はどちらの層からも出土しなかった。

第2遺構面（第88図）

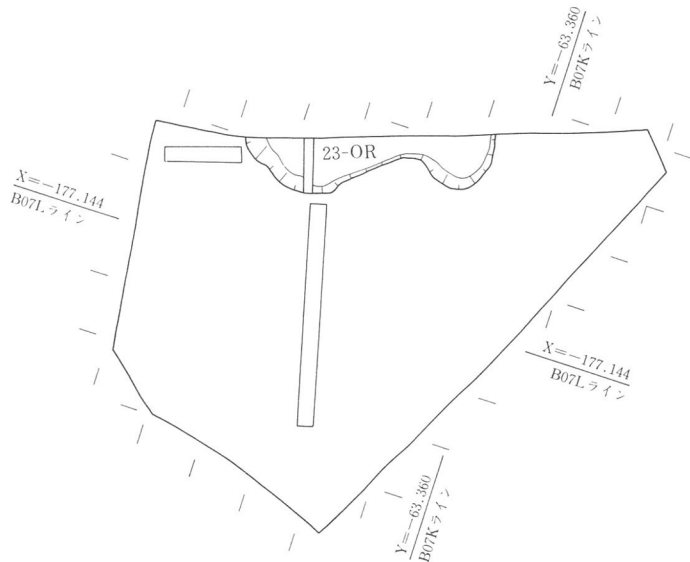
23-OR（第87図・図版32） JFからJHを通してHJで検出した流路である。検出面での平面形状は南南東を向いた角の丸いM字形である。東北側は5-22区の12-OR、5-14区の21-ORに続く。長さ17.0m、幅3.5m、深度5.5mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は4層で、①黄色土（5Y8/6：灰黄色粘土ブロック混じり）、②灰色粘土（7.5Y5/1）、③暗灰色粘土（N3/0）、④暗青灰色粘土（5B4/1）である。遺物は、②層より江戸時代初期の陶磁器片が出土した。



第87図 末廣遺跡5-14区23-OR埋土断面図

まとめ

溝、鋤溝、段は出土遺物が無く、時期は明確にしがたいが、近世以前に遡る可能性は少ない。近代以降の耕作に伴う遺構であろう。土坑は出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。流路は23-ORで近世初期の陶磁器片が出土している。



第88図 末廣遺跡5-14区第2遺構面平面図

5-27区（付図4・図版30・33）

E地区の東北部中央より、5-22区の北北西・西南西に隣接している。調査直前は個人住宅と私道であった。標高はT.P.+8.30mである。調査区の形状は底辺が西南を向いた多角形である。調査面積は約760㎡である。

調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1・2層で近・現代の遺物が出土した。

遺構の検出面は1面で、第3層上面で鋤溝を検出した。

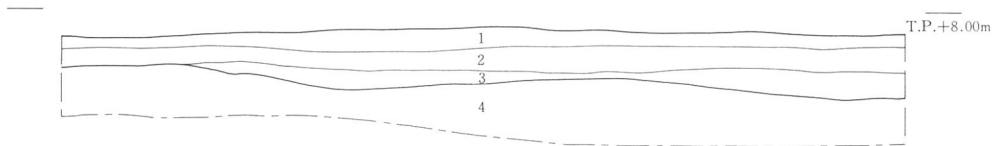
層序(第89図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第II層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.5mを測る。盛土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 褐灰色土(10YR6/1:第III-a層)で、部分的に広がる旧耕作土である。上面の高さはT.P.+7.80mである。層厚は0.1mを測る。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 灰褐色土(5GY7/1:第III-a層)で、部分的に堆積している。上面の高さはT.P.+7.70mである。層厚は0.1mを測る。旧耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第4層 橙色粘土(5YR7/6:第IV層)で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+7.60mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第89図 末廣遺跡5-27区基本土層断面図

遺構

01-OZ QDからTGで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ1.1~2.5m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

周辺と比べて標高が高いため攪乱と削平が激しく、旧耕作土の残りが悪い。耕作土直下が地山である。部分的に残存した鋤溝を検出しただけである。

5-26区(付図4・図版30・33)

E地区の中央よりで、5-22区の西と5-14区の東・北に隣接している。調査直前は東側は個人住宅、西北部は駐車場であった。標高はRAでT.P.+8.20mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた多角形である。調査面積は約480㎡である。

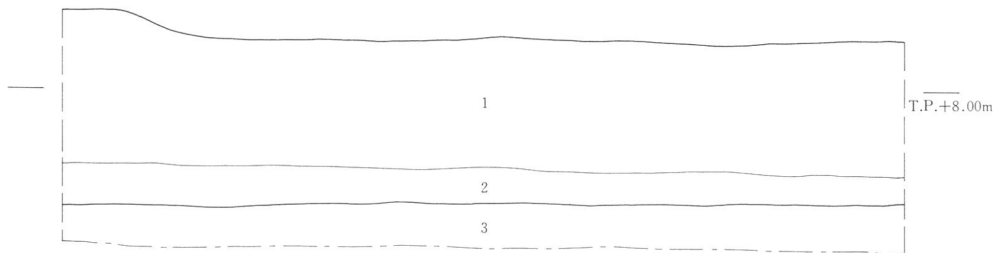
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1・2層で近・現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で溝、鋤溝を検出した。

層序（第90図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+8.30mである。層厚は0.7mを測る。盛土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（5Y4/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.60mである。層厚は0.2mを測る。旧耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第3層 にぶい橙色土（10YR6/4：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第90図 末廣遺跡5-26区基本土層断面図

遺構

01-O S Q Dの南部からQ Cを通過してQ Aの東北部まで東南東方向に直線的に伸びる溝である。西北西端は調査区外へ伸びる。検出長11.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

02-O S U Cの西部から東北東方向に伸び、T Eの西南部から直角に曲がりR Dの東部まで北北西方向に伸びる、底辺が東北東を向いたL字形の溝である。西南西端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長17.5m、幅0.4m、深度0.09mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

03-O S T Dの東南部からQ Dの西南部に直線的に伸びる溝である。Q Dの西南部で01-O Sとつながる。検出長12.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

04-O Z Q DからW Gで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ4.0~13.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形で

ある。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。06・07-OZとはほぼ並行し、05-OZとは直交する。

05-OZ UCからUGで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ2.5~6.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-OZ VEからYFで検出した鋤溝である。条数は1条であり、南南東から北北西に伸びている。長さ14.5m、幅0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

07-OZ WFからXHで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ0.5~1.5m、幅0.2m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

周辺と比べると標高が若干高く、5-27区と同じように削平が激しい。かろうじてばらついた鋤溝を検出した。

5-28区(付図4・図版30・33)

E地区の東北部で、5-26区の北に当たる。調査直前は個人住宅であった。標高はT.P.+8.00mである。調査区の形状は底辺が東南を向いた多角形である。調査面積は約420㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1~3層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で鋤溝を検出した。

層序(第91図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第II層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.5mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

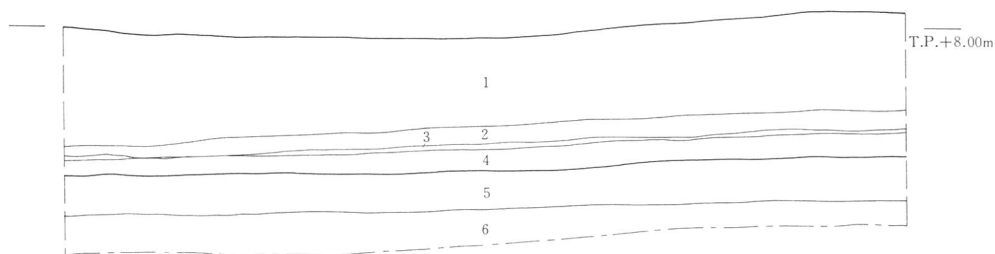
第2層 灰色土(5Y5/1:第III-a層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.50mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器片・瓦片等が出土した。

第3層 灰白色土(2.5Y7/1:第III-b層)で、KYからOYを境として西方向に堆積している。上面の高さはT.P.+7.40mである。層厚は0.05mを測る。床土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第4層 橙色粘土（5Y R6/6：第VI層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.35mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 灰黄色粘土（2.5Y7/2：第VII層）で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+7.25mである。遺物は出土しなかった。

第6層 明黄褐色粘土（2.5Y7/6：礫混じり：第VIII層）である。上面の高さはT.P.+7.00mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第91図 末廣遺跡5-28区基本土層断面図

遺構

01-OZ LBからMBで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、南から北に伸びている。長さ3.5~6.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

周辺と比べ標高が若干高く、削平を受けているため鋤溝を検出しただけである。

5-37区（付図4・図版30・34）

E地区の北端で、5-28区の北に隣接している。調査直前は空地であったが、個人住宅であったようである。標高はT.P.+7.40mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた凹形の多角形である。調査面積は約450m²である。

調査により確認した土層は6層あり、第1~3層で近・現代、第5層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第6層上面で井戸、溝、鋤溝、段、流路、堤を検出した。層序（第92図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.4mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

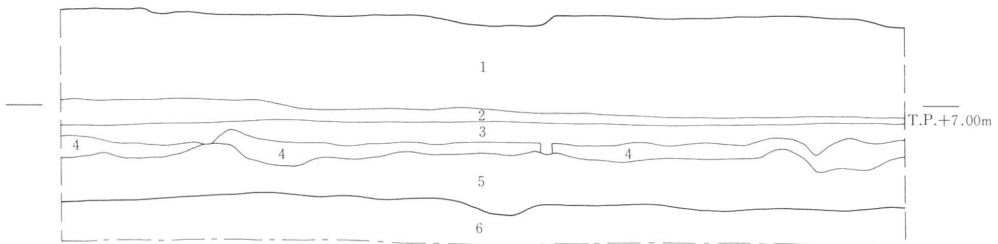
第2層 暗灰黄色土（2.5Y5/2：第III-a層）で、全域に広がる耕作土である。上面の高さはT.P.+7.00mである。層厚は0.1mを測る。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第3層 暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2：第Ⅲ－b層）で、東端突出部を除いた大部分に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.90mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第4層 にぶい黄色土（2.5Y6/4：礫混じり：第Ⅵ層）で、東端突出部を除いた大部分に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.80mである。層厚は0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 黄灰色土（2.5Y5/2：第Ⅶ－a層）で、東端突出部を除いた大部分に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.60mである。層厚は0.2mを測る。旧耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 明黄褐色土（10Y R6/6：第Ⅳ層）で、I AからJ Yを境として北西方向に0.5mの標高差がある。上面の高さはT.P.+6.40mである。地山である。

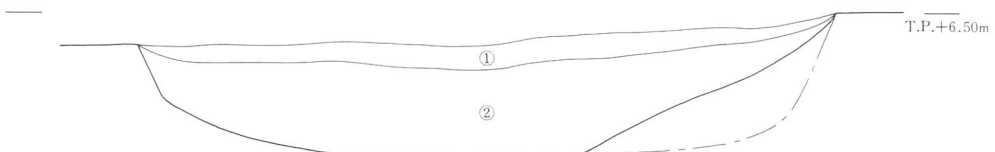


第92図 末廣遺跡5－37区基本土層断面図

遺構

01－0W GXの中央～南部からHXの北部で検出した不整半円形の井戸である。東南肩側は04－0Sに切られている。肩部長径3.9m・短径3.6m、底部長径2.4m、短径2.3m、深度0.7mを測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は2層で、上から明黄褐色土（10Y R6/8）が0.15m、灰黄色粘土（2.5Y6/2）が0.55mである。遺物は近代以降の陶磁器・瓦が出土した。

02－0W（第93図） KVからJWの西南部で検出した東隅が丸い長方形の井戸である。肩部長辺6.7m・短辺5.5m、底部長辺4.1m、短辺2.5m、深度1.3mを測る。断面形状は



第93図 末廣遺跡5－37区02－0W埋土断面図

未完掘で不明であるが、調査終了段階では口の開いたU字形であった。確認した埋土は4層で、①灰色砂質土(5Y6/1)、②明黄褐色土(10YR6/8:礫混じり)、③褐灰色粘質土(10YR5/1)、④灰色粘土(7.5Y4/1)である。遺物は近代以降の陶磁器・瓦が出土した。

03-O S HYの北部からJXを通してNWの北部まで北北東方向に緩く曲線的に伸びる溝である。礫詰の暗渠である。北北東端は調査区外へ伸び、南南西端は5-38区へ向かって伸びるが、不明である。検出長26.0m、幅0.3m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1:拳大の礫混じり)である。遺物は出土しなかった。

04-O S GYの西南部からHXの西南部まで西南方向に伸び、LWの西南部まで南南西方向に緩く曲線的に伸びる溝である。礫詰の暗渠である。北北東端は調査区外へ伸び、南南西端は5-38区へ向かって伸びるが、不明である。検出長23.0m、幅0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1:拳大の礫混じり)である。遺物は出土しなかった。

05-O S IUの南部からJUの西南部まで北北東方向に直線的に伸びる溝である。北北東端は調査区外へ伸びる。検出長4.5m、幅0.1m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

06-O S HWの西部から東方向に伸び、中央部からGWまで北方向に伸びる、底辺が東を向いたL字形の溝である。北端は調査区外へ伸びるが、不明である。検出長4.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

07-O Z HYからJXで検出した鋤溝群である。条数は5条あり、西南から東北に伸びている。長さ3.5~10.5m、幅0.2~0.3m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。08-O Zと重なる部分があり、切っている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

08-O Z HYで検出した鋤溝である。条数は1条で、南から北に伸びている。長さ3.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。07-O Zと重なる部分があり、切られている。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

09-O Z HAからJYで検出した第6層を削り込んだ段である。西北側が低くなっており、高低差は0.5mである。段の上面はT.P.+7.20mで、割合平坦である。下面是T.P.

+6.70mで、同じく平坦である。低い部分には黄灰色砂質土（2.5Y6/1）が堆積していた。

10-OR HVからKVで検出した落ち込みである。検出面での平面形状は緩く曲線的に伸びている。両端とも調査区外へ伸びる。長さ9.0m、幅4.0~7.0m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（10YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

11-OL NXからKXまで南から北方向に伸びる堤である。堤の裾部に木杭を打っており、東側は調査区外となる。検出長17.0m、上幅1.0m以上、下幅1.5m以上、高さ0.56mを測る。断面形状は台形を呈する。遺物は出土しなかった。

まとめ

調査区の東端突出部が高くなっており、東南に隣接する5-28区と同様の標高である。西端隅部は5-38区の02-ORから続く南北方向の谷筋である。谷筋の東側第6層（地山）上面で谷筋に並行するように2条の礫詰溝が伸び、礫詰溝のさらに東側にこれに切られた鋤溝群がある。調査区南端の堤は谷筋の形成された後に5-28区の土の崩壊をくい止める為になされた護岸と考えられる。この杭列と堤は、調査区域の関係で明らかにはなっていないが、調査区東北部の段につながるようである。井戸が2基あるが、谷筋が第5層で埋まってから作られたようである。谷と鋤溝の関係は直接的には不明であるが、この部分での遺構の先後関係は、鋤溝（07・08-OZ）、谷（10-OR）、堤（11-OL）・礫詰溝（03・04-OS）、井戸（01・02-OW）の順と考えられる。単純に考えると以上になるがもともと水田であったところに自然の流路ができ、流路消滅後に再び水田となっていたようである。その後、全体が埋められ調査直前のような宅地となっていたようである。当調査区で確認した遺構の最も古いものでも近代以前としかいえず、せいぜい遡っても近世後期位と考えられる。

5-15区（付図4・図版30・34）

E地区の西南部中央寄り、5-14区の西に当たる。東辺は稲倉2号用排水路に接し、道路を挟んで南北二つに調査区が分かれている。調査直前は田畠、荒地であった。標高はT.P.+8.10mである。調査区の形状は北側の底辺が南を向いた多角形、南側の底辺が南を向いた台形である。調査面積は1,250㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1~3層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で土坑、溝、鋤溝、流路を検出した。

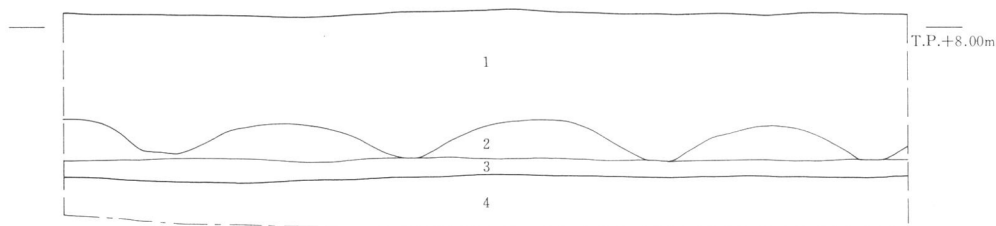
層序（第94図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.6mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰色土（5Y5/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.50mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 浅黄色粘土（5Y7/2：第III-b層）で、全域に広がる床土である。上面の高さはT.P.+7.30mである。層厚は0.1mを測る。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第4層 明黄褐色粘土（2.5Y7/6：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.20mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第94図 末廣遺跡5-15区基本土層断面図

遺構

01-00 BUの西部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が北北東方向を指す。肩部長径0.9m・短径0.5m、底部長径0.8m・短径0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐灰色土（7.5YR4/1）である。遺物は出土しなかった。

02-0S YOの中央部からXOを通過してXPの西部まで西南方向に直線的に伸びる溝である。両端ともに調査区外へ伸びる。検出長4.5m、幅0.6m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

03-0S YTの中央部からXSの南部まで東南東方向に直線的に伸びる溝である。検出長5.5m、幅0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

04-0S AYの西南部からXXを通過してVXの中央部まで南南東方向に直線的に伸びる溝である。北北西端は09-0Sに切られている。検出長17.0m、幅0.5m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

05-OS AVで検出した東北東方向に直線的に伸びる溝である。東北東端は14-ORに続く。検出長3.5m、幅0.4m、深度0.12mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

06-OS UYの西南部から西南西方向に伸び、UXの西南部から西北方向に直線的に伸びる溝である。両端ともに調査区外へ伸びるが、不明である。検出長4.5m、幅0.6m、深度0.06mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

07-OS VYの西北部からVXを通してVWの東部まで西南西方向に伸びる、先端部がY字形に分かれる溝である。西端は5-38区へ伸びるが、不明である。検出長6.0m、幅0.2~1.2m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

08-OS IAの東部からIBの西部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。両端ともに調査区外へ伸びる。検出長1.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

09-OS KBの中央部からHAの中央部まで北北西方向に緩やかな曲線的に伸び、JBから西南西方向に伸び、JAの東部で南南東方向に伸びる、底辺が西南西を向いたL字形の溝である。南南東2本、北北西端ともに調査区外へ伸びるが、不明である。検出長18.0m、幅0.2~0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

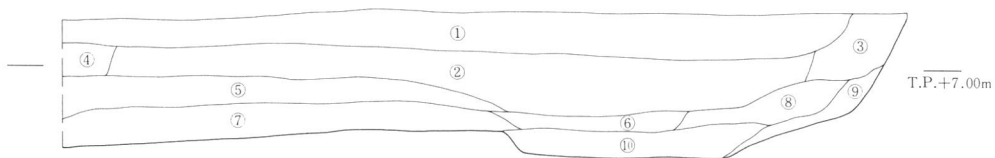
10-OS JBの西部で検出した東北東方向に直線的に伸びる溝である。両端ともに11-OSに切られている。検出長1.0m、幅0.2m、深度0.11mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

11-OS HAの中央部からJBの西北部まで南南東方向に伸び、JAの東部で二股に分かれ、KBの西北部まで南南東方向に伸びる、底辺が東北東を向いたL字形の溝である。二股の1本、北北西端ともに調査区外へ伸びるが、不明である。検出長14.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

12-OZ VYからCYで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ3.0~5.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

13-OZ WXからASで検出した鋤溝群である。条数は4条あり、南南西から北北東に伸びている。長さ1.0~5.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

14-OR (第95図) YVからFYで検出した流路である。検出面での平面形状は幅が一定しないが、ほぼ直線的に伸びている。西側肩部の裾に沿って約15m打ち並べた杭列を検出した。北北西端は5-38区の02-ORに続く。長さ30.0m、幅8.0m、深度0.5mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は10層で、①にぶい赤褐色土(2.5YR4/3)、②灰色粘土(5Y6/1)、③明黄褐色粘土(2.5Y7/6)、④灰白色粘土(5Y8/2)、⑤浅黄色粘土(2.5Y7/3)、⑥灰黄色粘土(2.5Y6/2)、⑦黄灰色粘土(2.5Y6/1)、⑧黄色粘土(2.5Y8/6)、⑨明黄褐色粘土(2.5Y6/6)、⑩褐灰色粘土(10YR6/1)である。遺物は出土しなかった。



第95図 末廣遺跡5-15区14-OR埋土断面図

まとめ

調査区は14-ORがほぼ南北に伸びている谷筋にあたる。土坑、溝、鋤溝は出土遺物が無いが、極僅かで時期は明確にしがたい。14-ORでは掘削中に西側肩部下で杭列を検出しており、水路のあったことが推定される。

5-38区(付図4・図版30・34)

E地区の西北~中央部で、5-15区の西北に当たる。調査直前は工場であった。標高はT.P.+7.80mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた多角形である。調査面積は約840m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1・2層で現代の、第3・4層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で溝、流路を検出した。

層序(第96図)

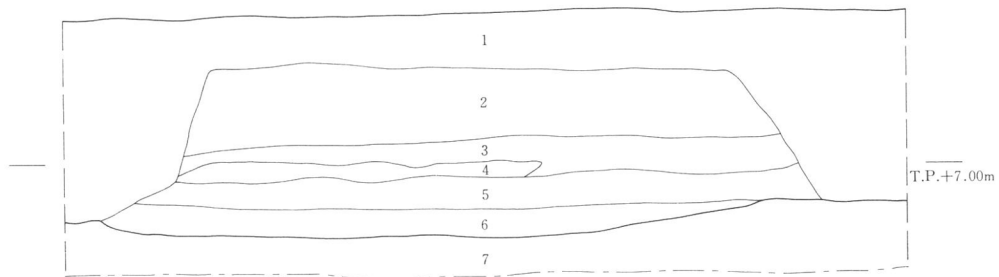
第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第II層)で、全域に水平堆積している。層厚は0.6mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 灰黄褐色土（10Y R4/2：第Ⅲ－a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.20mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 黄灰色土（2.5Y5/1：明黄褐色土（10Y R6/8）のブロック土混じり：第V層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.00mである。層厚は0.2mを測る。整地土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第4層 褐灰色土（10Y R5/1：第Ⅶ－a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.80mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 黄橙色粘土（10Y R7/8：第Ⅹ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.70mである。地山である。遺物は出土しなかった。



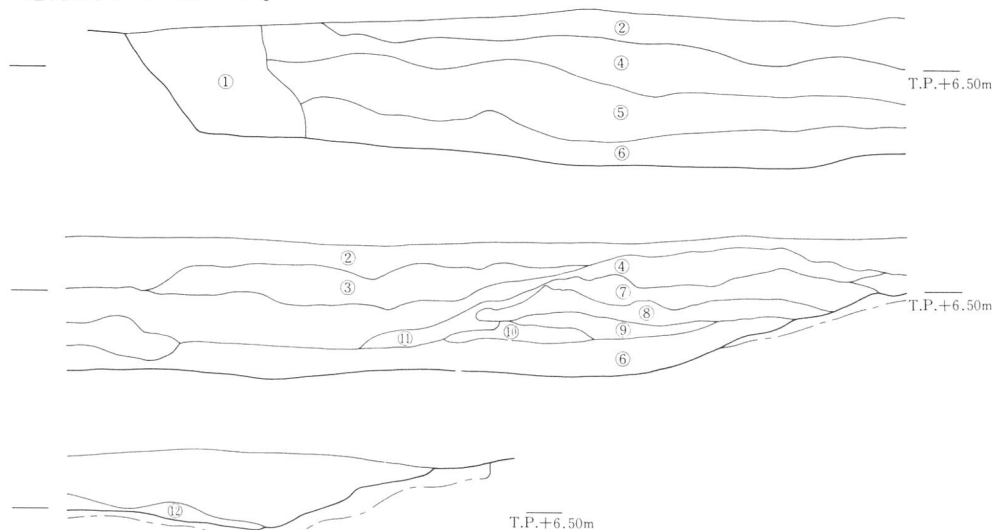
第96図 末廣遺跡5－38区基本土層断面図

遺構

01－OS NRの東北部から南南西方向に緩く曲線的に伸び、ORの東南東方向に伸びる礫詰溝である。ORの西南部から東南東方向に1本出ている。両端ともに調査区外へ伸びるが、不明である。検出長9.5m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1：拳大の礫混じり）である。遺物は出土しなかった。

02－OR（第97図） MSからXUで検出した流路である。検出面での平面形状は幅が一定しないが、曲線的に伸びている。南端は5－15区の14－ORに続き、北端は調査区外へ伸びるが、不明である。長さ42.0m、幅3.0～8.0m、深度0.3mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は12層で、①灰黄褐色砂質土（10Y R5/2）、②褐灰色土（10Y R6/1）、③黄灰色弱粘質土（2.5Y R6/1）、④にぶい黄橙色シルト（10Y R7/2）、⑤暗灰黄色土（2.5Y5/2：径10cm大の礫混じり）、⑥にぶい黄色粗砂（2.5Y6/3）、⑦黒褐

色土 (2.5Y R3/2)、⑧にぶい黄橙色シルト (10Y R7/2)、⑨黒色土 (10Y R2/1)、⑩灰黄褐色粗砂 (10Y R5/2)、⑪暗灰黄色砂 (2.5Y 5/2)、⑫浅黄色砂 (2.5Y 7/4) である。遺物は出土しなかった。



第97図 末廣遺跡 5-38区02-O R埋土断面図

まとめ

調査区の大部分が南北方向に伸びる谷筋にあたり、全体に低くなっている。西北部のみが周辺調査区と同様の標高を保っている。谷の東側は全体に低くなっており、流路の淀みになっていたようである。谷以外の遺構は西北部で検出した礫詰溝だけである。この溝は谷筋に沿うように伸びており、谷筋の形成後に作られたと考えられるが、直角に谷方向に派生する部分があり、谷の肩部で途切れている。これが流路に切られたのか、流路に入って終わっているのかは明らかでないが、流路に沿っていることから流路よりは若干新しい時期のものと考えられる。流路はあくまでも人工のものではなく、自然のものであるから、絶えず場所を移していたと考えた方が自然であろう。どちらにしても近世後半以降の遺構しか存在していない。ただ、遺物はサヌカイトの石鎌が流路の淀み部分で1個出土した。

5-55区 (付図4・図版30・35)

E地区の西端で、5-38区の西と5-15区の西北に隣接している。調査直前は工場と個人住宅であった。標高はT.P.+7.80mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた多角形である。調査面積は約710m²である。

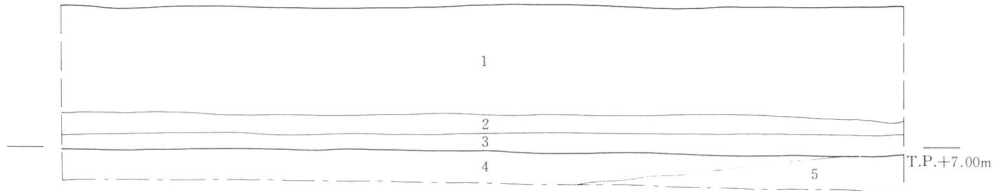
調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1～3層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は2面で、第3層上面と第4層上面で鋤溝を検出した。

層序 (第98図)

第1層 褐色土 (灰色土・黄色土混じり：第II層) で、全域に水平堆積している。層厚は0.6mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 褐灰色土 (10Y R5/1：第III-a層) で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.20mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

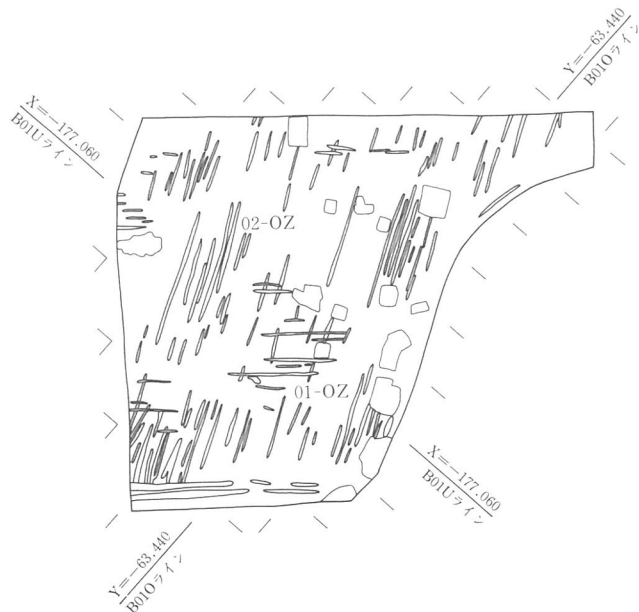
第3層 にぶい黄橙色粘土 (10Y R6/3：第III-b層) で、全域に広がる床土である。上面の高さはT.P.+7.10mである。層厚は0.1mを測る。遺物は現代の陶磁器が出土した。



第98図 末廣遺跡5-55区基本土層断面図

第4層 明黄褐色粘土 (2.5Y7/6：第IV層) で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+7.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。

第5層 明黄褐色粘土 (2.5Y7/6：礫混じり：第VII層) である。上面の高さはT.P.+7.00mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第99図 末廣遺跡5-55区第1遺構面平面図

遺構

第1遺構面（第99図・図版35）

01-OZ QMからXOで検出した鋤溝群である。条数は約22条あり、西南から東北に伸びている。02-OZを切っている。長さ1.0～8.0m、幅0.3m、深度0.25mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

02-OZ 全域で検出した鋤溝群である。条数は約40条あり、南南東から北北西に伸び、01-OZに切られている。長さ1.0～9.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

第2遺構面（付図4・図版35）

03-OZ RLからXOで検出した鋤溝群である。条数は約25条あり、西南から東北に伸びている。長さ1.0～14.0m、幅0.3m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

04-OZ ROからWOで検出した鋤溝群である。条数は9条あり、西南から東北に伸びている。05-OZを切っている。長さ1.0～19.0m、幅0.4m、深度0.15mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

05-OZ OOからUMで検出した鋤溝群である。条数は約10条あり、西南から東北に伸びている。04-OZに切られている。長さ1.0～19.0m、幅0.3m、深度0.05～0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

06-OZ OPからSLで検出した鋤溝である。条数は1条であり、西南から東北に伸びている。長さ24.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

07-OZ OPからUQで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、東南から北北東に緩く湾曲して伸びている。長さ1.0～30.0m、幅0.2～0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

遺物

調査の結果出土した遺物には、陶磁器・瓦・蛸壺などがあるが、どれも細片ばかりで、図化に耐え得るものは無かった。しかし、各遺構面の遺物に時期差は認められず、総て近

代から現代の範囲に入るものばかりであった。つまり、当調査区の2つの遺構面にはそれほど時間的な隔たりはなく、出土遺物から見る限り、両遺構面共に近代以降に形成されたものと考えられる。

まとめ

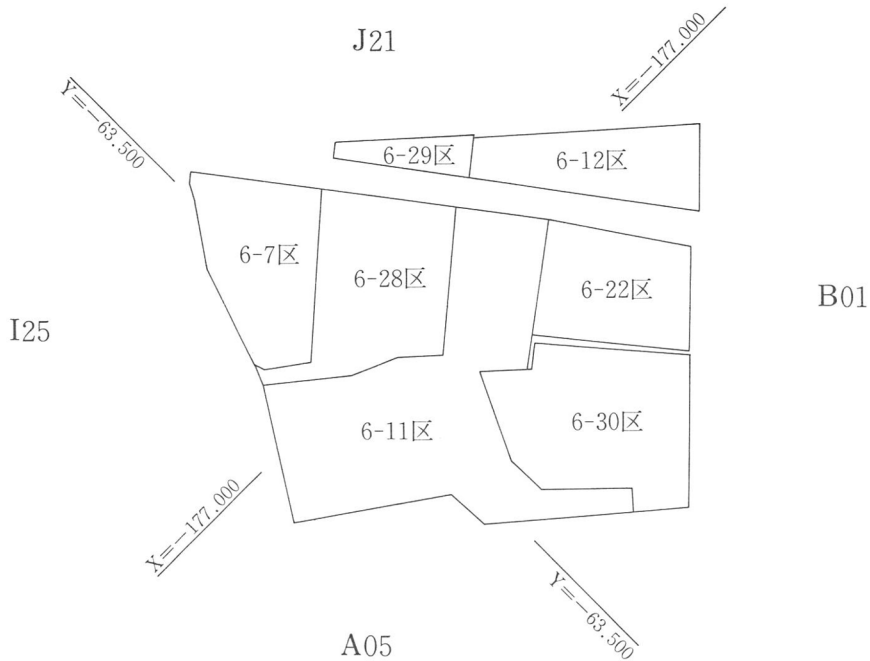
01-0Z、02-0Z、03-0Zは耕作の際に形成されたもので、いわゆる鋤溝である。07-0Zについては、溝が全体に浅いことや、何条かの溝が重複していることから、田畠の排水等に用いたとは考えにくく、旧水路添いの地割りに沿った鋤溝とするのが妥当であろう。また、07-0Zが沿っている旧水路であるが、明治30年以前の地形図にその存在が認められることから、07-0Zを含む第2遺構面の形成は近代以降と考えられる。04-0Zについては、幅・深度ともに同規模の溝が等間隔で並んでいることや、他の鋤溝群と比べると、かなり規模が大きいことなどから、他とは性格の異なる溝であることが窺える。等間隔であることと、鋤溝がそれぞれの間から検出されることから、畠の畝の痕跡の可能性も考えられる。また、同じ遺構面内に方向の異なる数種の鋤溝が検出されたが、それらの鋤溝の時期の差がどれ程のものかは確認できなかった。

E地区のまとめ

E地区は末廣池の西北に隣接し、谷筋に当たる。井戸、土坑、溝、鋤溝、段、流路の大半は地山面で検出しており、遺構からの出土遺物は無いが、極僅かでそれぞれの時期は明確にしがたい。ただ、5-14区の23-ORでは末廣遺跡全体を通じても数少ない近世初頭の陶磁器が出土している。この流路は蛇行して5-15区の14-OR、5-38区の02-ORへと続くもので、流路の中に水路が掘削されている。流路の埋没時期が近世初頭を遡らないことが明らかとなった。

6. 6-A地区の調査

南海本線と中開農道とに挟まれた範囲で、面積は約7,500㎡である。東隅を5-E地区を通過してきた農道が斜めに伸び、調査区を2分している。地区割りでは大C-3-9-I25・J21・大C-3-5-A05・B01地区で、交点が西隅付近である。農道より東北側は個人住宅で面積も少なく、6-12・29区に二分して調査した。西南側は南海本線寄りの部分は田畠が多く中開農道寄りの部分は住宅地であり、6-22・30・28・7・11区に分割して調査した。



第100図 末廣遺跡 6 - A 地区調査区配置図

6 - 12区 (付図 7・図版 36・37)

A地区の東隅部で、用水路で南北の二つに分断されている。調査直前は南半部は荒地で北半部は水田であった。標高はT.P.+7.70mである。調査区の形状は底辺が東南を向いた台形が二つに分かれている。調査面積は約560㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1～3層で現代の、第4層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で溝、鋤溝を検出した。

層序 (第101図)

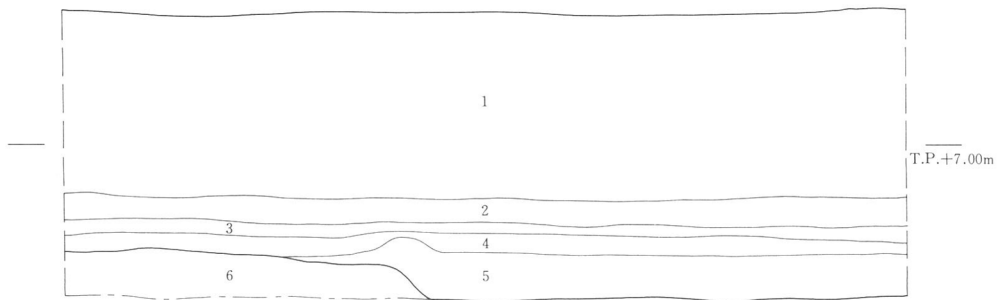
第1層 褐色土 (灰色土・黄色土混じり：第II層) で、全域に水平堆積している。層厚は0.95mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 黒色土 (10Y R2/1：第III-a層) で、DUからBSにかけて広がり、ほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.75mである。層厚は0.15mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器・瓦が出土した。

第3層 明赤褐色土（5Y R5/6：第Ⅲ－b層）で、DUからARにかけて広がり、ほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.60mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第4層 明黄褐色土（10Y R6/8：第Ⅶ－a層）で、DUからCTにかけて広がり、ほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.50mである。層厚は0.1mを測る。旧耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器・土師器が出土した。

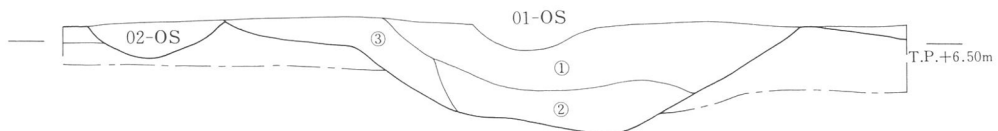
第5層 黄橙色土（10Y R7/3：第Ⅳ層）で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+6.40mである。層厚は0.1mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。



第101図 末廣遺跡6-12区基本土層断面図

遺構

01-OS（第102図） 南半部の南部にはほぼ南北に走る水路であるが、これは、6-12区を分断する水路の前身である。幅2.0～2.5m、深度0.4m程で、埋土は下層が灰色砂（N5/0）、上層が暗灰色土（N3/0）である。両岸には杭を打ち並べ、板を置いて護岸としている。現代の陶磁器片が出土しており、調査時には攪乱として扱った。



第102図 末廣遺跡6-12区01-OS埋土断面図

02-OS 01-OSの西、0.5m離れて並行する溝である。幅0.5m、深度0.1m、検出長14.5m、埋土は、にぶい橙色土（7.5Y R7/4）である。出土遺物は無かったが、02-OSは、01-OSと関連し、同時期のものと考えられる。

03-OS 01-OSの東2m離れて並行し、直角に曲がって01-OSにつながる溝である。幅0.2m、深度0.05m、埋土は灰色土（7.5Y 6/1）。出土遺物は無かったが、02-OS

と同様に01-O Sと関連し、同時期のものと考えられる。

04-O Z 北半部では、溝群を検出した。すべて現代耕作土に伴う鋤溝類と考えられる。
まとめ

この調査区では近～現代の遺構を検出した。それ以前のものと考えられる遺構は無かった。

6-29区（付図7・図版36・37）

A地区の東北辺の中央部で6-12区の北に隣接している。会計事務所の庭であった。標高はQHでT.P.+7.40m、ULでT.P.+7.60mである。調査区の形状は底辺を東北に向けた三角形であるが、浄化槽や埋設管の関係で3カ所に分けた。調査面積は約85㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構はなく、第4層上面での凹凸は全て現代の攪乱である。

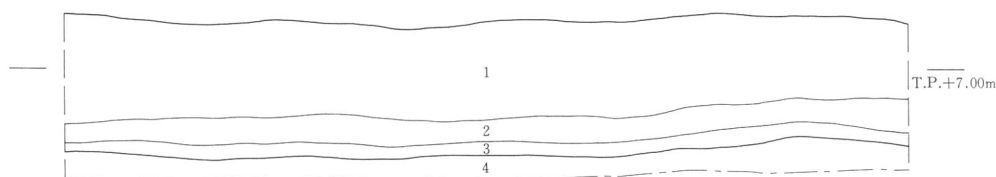
層序（第103図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、RIで南東方向に厚くなり、全域に広がっている。層厚はQHで0.5m、ULで0.8mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色土（10Y R4/1：第III-a層）で、RIで南東方向に若干厚くなり、全域に広がっている。上面の高さはQHでT.P.+6.70m、ULでT.P.+6.80mである。層厚はQHで0.1m、ULで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 褐灰色砂質土（7.5Y R5/1：第III-b層）で、RIより北西方向に広がり、水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.60mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色土（10Y R6/8：第IV層）で、RIで南東方向に高くなり、全域に広がっている。上面の高さはQHでT.P.+6.55m、ULでT.P.+6.75mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第103図 末廣遺跡6-29区基本土層断面図

まとめ

第2層は会計事務所ができるまでの水田の耕作土であり、現代の水田がいつまで遡るかは不明である。

6-22区（付図7・図版36・38）

A地区の東南辺中央部で6-12区から稲倉2号用水路を挟んだ西に当たる。調査直前は田畑であった。標高はCMでT.P.+7.20m、HPでT.P.+7.15mである。調査区の形状は底辺を西北に向けた台形である。調査面積は約530m²である。

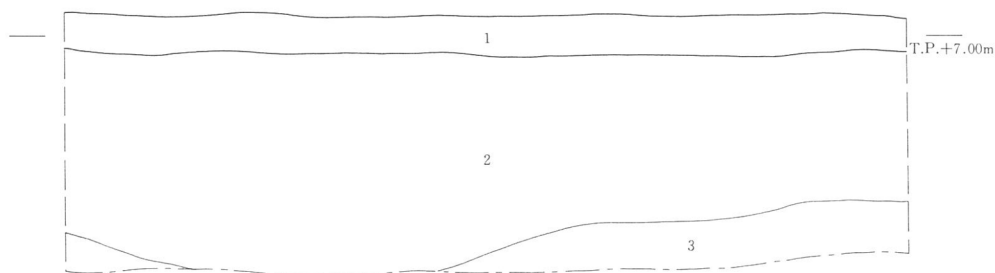
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第2層上面で土坑を検出した。

層序（第104図）

第1層 黒色土（N2/0：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 明黄褐色粘質土（10Y R7/6：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはHPでT.P.+6.95m、CMでT.P.+6.90mである。層厚はHPで0.4m、CMで1.2mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい黄褐色礫（10Y R5/4：第Ⅴ層）で、起伏があり、ほぼ全域に堆積している。上面の高さはHPでT.P.+6.35m、CMでT.P.+6.55mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第104図 末廣遺跡6-22区基本土層断面図

遺構

01-00 CLの東南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.4m、底部長径0.3m・短径0.1m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

02-00 CLの南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径1.9m・短径0.8m、底部長径0.7m・短径0.2m、深度0.11mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

03-00 DMの西南部で検出した楕円形の土坑である。長軸が北方向を指す。肩部長径0.6m・短径0.4m、底部長径0.3m・短径0.1m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

04-00 FKの西北部で検出した不定形の土坑である。肩部長径1.2m・短径0.6m、底部長径0.7m・短径0.2m、深度0.12mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

05-00 EJの東南部で検出した細長い楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径1.0m・短径0.2m、底部長径0.8m・短径0.1m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

06-00 FJの北部で検出した不定形の土坑である。肩部長径1.0m・短径0.2m、底部長径0.8m・短径0.1m、深度0.11mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

07-00 HLの北部で検出した不定形の土坑である。肩部長径1.0m・短径0.8m、底部長径0.4m・短径0.3m、深度0.09mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

西北辺で検出した溝は調査直前まで耕作されていた水田の用排水路である。土坑を7基検出したが、すべて時期・用途ともに不明である。ただ埋土が溝とは全く異質であり、調査直前の水田よりも古い時期の遺構であることは間違いない。

6-30区(付図7・図版36・37)

A地区の南隅部で6-22区の西南に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はOGでT.P.+7.90m、EEでT.P.+7.65mである。調査区の形状は底辺を東南に向けた多角形である。調査面積は約880㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第2・3層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で土坑、谷、落ち込みを検出した。

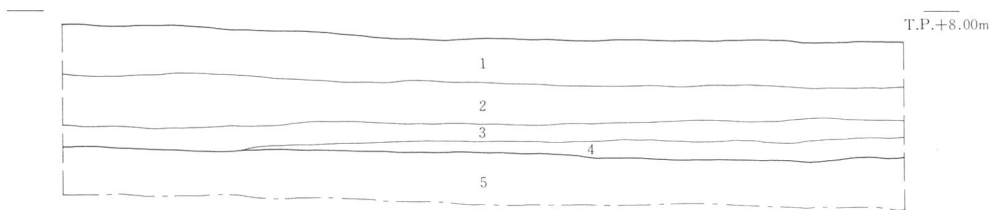
層序（第105図）

第1層 褐色土（10Y R4/4：第Ⅲ－a層）で、北方へ向かって低くなり、全域に広がっている。層厚はOGで0.2m、EEで0.4mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 にぶい黄褐色土（10Y R5/4：第Ⅲ－b層）で、南方へ向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはOGでT.P.+7.75m、EEでT.P.+7.25mである。層厚はOGで0.1m、EEで0.3mを測る。床土である。遺物は近世の陶磁器・染付、紡錘形の土錘が出土した。

第3層 灰黄褐色土（10Y R5/2：明褐色砂質土（7.5Y R5/8）：第Ⅵ層）で、北方へ向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはOGでT.P.+7.50m、EEでT.P.+7.10mである。層厚はOGで0.1m、EEで0.2mを測る。整地土である。遺物は土師羽釜が出土した。

第4層 明黄褐色土（10Y R7/6：上部にマンガ斑混じり：第Ⅳ層）で、北方へ向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはOGでT.P.+7.50m、EEでT.P.+7.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第105図 末廣遺跡6－30区基本土層断面図

遺構

01－〇〇 H Jの北部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸が北北東方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.5m、底部長径0.6m・短径0.3m、深度0.12mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

02－〇〇 I Iの東部で検出した長い楕円形の土坑である。長軸が南南東方向を指す。肩部長径1.2m・短径0.5m、底部長径1.0m・短径0.3m、深度0.3mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

03－〇〇 MEの東南部でNEの東北部にかかる不整楕円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。側溝により西南端を切られる。肩部検出長径0.9m・短径0.6m、底部検出長

径0.5m・短径0.4m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

04-OR ILからIKに一部かかる不整形の落ち込みである。側溝により東北部を切られる。長辺3.7m、検出幅2.0m、深度0.2mを測る。断面形状は頂点が東南部に極端にかたよったV字形である。埋土は1層であり、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

05-OR HFの南部からIEの東南部を通してIDの東南部に湾曲して伸びる谷である。IDの東南部で調査区外に続いている。検出長9.0m、幅0.7~2.3m、深度0.1~0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

遺物の出土は堆積層内に限られるため、遺構の時期は不明である。第2層は近世、第3層は中世の遺物しか出土していないことから、水田の造成はその時期まで遡る可能性が考えられる。しかし、周辺の調査からは近世以降の開発と考えた方が良さそうではある。

6-28区（付図7・図版36・38）

A地区の中央部で6-29区から稲倉2号用水路を挟んだ西南に当たる。調査直前は個人住宅及び倉庫であった。標高はWIでT.P.+6.55m、SEでT.P.+6.50mである。調査区の形状は長辺が東南を向いた長方形である。調査面積は約820㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構はなく、全て攪乱である。玉ねぎ小屋の柱跡を検出した。

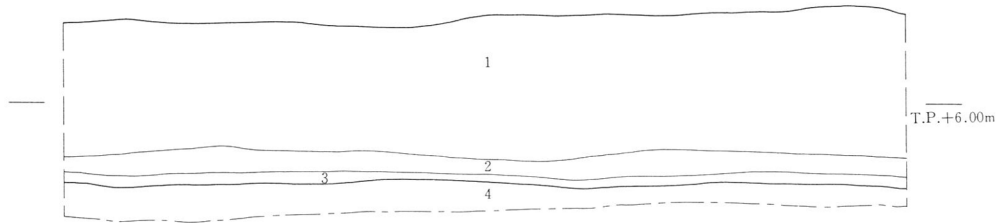
層序（第106図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.8mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色土（10YR5/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはSEでT.P.+5.80m、WIでT.P.+5.75mである。層厚はSEで0.1m、WIで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰黄褐色土（10YR5/2：第III-b層）で、SF~VHの間に水平堆積している。上面の高さはVHでT.P.+5.60m、SFでT.P.+5.65mである。層厚はVHで0.05m、SFで0.1mである。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 黄橙色土（10Y R7/8：第X V層）で、全域に広がっている。上面の高さはW IでT.P.+5.75m、S EでT.P.+5.55mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第106図 末廣遺跡6-28区基本土層断面図

まとめ

遺構・遺物とも出土せず、不明である。

6-7区（付図7・図版36・39）

A地区の中央で6-28区の西北に当たる。調査直前は水田であった。標高はN AでT.P.+6.70m、R EでT.P.+6.75mmである。調査区の形状は底辺を東南に向けた多角形である。調査面積は約810m²である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1層で現代の、第2層で時期不明の遺物が出土した。遺構の検出面は1面であり、第3層上面で土坑、溝、鋤溝、ピット等を検出した。

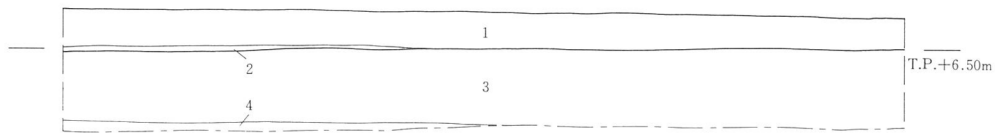
層序（第107図）

第1層 黒色土（10Y R2/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。現代の耕作土である。遺物は現代の陶磁器破片が出土した。

第2層 黄色粘土（2.5Y7/8：第III-b層）で、北西に向かって水平堆積し、Oラインより北方に広がる。上面の高さはT.P.+6.55mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は紡錘形の土錘が一点出土した。

第3層 黄色粘土（2.5Y8/8：砂混じり：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはN AでT.P.+6.40m、N BでT.P.+6.50mである。層厚はN Aで0.2m、N Bで0.3mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 褐色礫（2.5Y7/8：第IV層）で、北西に向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはN AでT.P.+6.15m、R EでT.P.+6.55mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第107図 末廣遺跡6-7区基本土層断面図

遺構

01-〇〇 Q Xの北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径1.4m・短径0.4m、底部長径1.0m・短径0.2m、深度0.18mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層あり、上から暗赤褐色土(5Y R3/4)が0.1m、にぶい赤褐色土(5Y R5/4:焼土塊混じり)が0.05m、灰褐色土(5Y R4/2)が0.03mである。遺物は出土しなかった。

02-〇S T Bの西部からT Aの西北部まで西北西方向にまっすぐ伸びる溝である。東端部は03-〇Sによって切られ、西端部は04-〇Zによって切られる。検出長5.3m、幅0.3m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐色土(10Y R4/4)である。遺物は出土しなかった。

03-〇S T Cの西部からU Aを通過してV Xの東部まで西南西方向に蛇行しながら伸びる溝である。長さ16.0m、幅0.35m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰黄褐色土(10Y R6/2)である。遺物は出土しなかった。

04-〇Z P AからT Cの西北部に集中して検出した鋤溝群である。条数は約11条あり、東北から西南に伸びている。06-〇Zを切っている。長さ1.0~4.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

05-〇Z P AからS Aで検出した鋤溝群である。条数は2条あり、東南から西北に伸びている。長さ1.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

06-〇Z P Aで検出した鋤溝である。条数は1条であり、東北東から西南西に伸びている。04-〇Zに切られている。長さ1.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

07-〇P R Wの東北部で検出した円形のピットである。直径0.35m、深度0.2mを測る。埋土は1層で、暗赤褐色土(5Y R3/4)である。遺物は出土しなかった。

08-〇P P XからV Yに散在する16個の円形のピット群である。直径0.1~0.35m、

深度0.05～0.1mを測る。埋土は全て1層で、暗赤褐色土（5Y R3/4）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

灰色土を埋土とする遺構は調査直前の水田よりも古い時期の水田の痕跡と考えられるが、その時期は不明である。暗赤褐色土等を埋土とする遺構はさらに古いと考えられるが、その時期は不明である。

6-11区（付図7・図版36・40）

A地区の西南辺で6-30区の西南に当たる。調査直前は水田で西半部は住宅地であった。標高はDDでT.P.+7.20m、WUでT.P.+7.30mである。調査区の形状は底辺を西南に向けた多角形と長方形に分かれている。調査面積は約2,040㎡である。

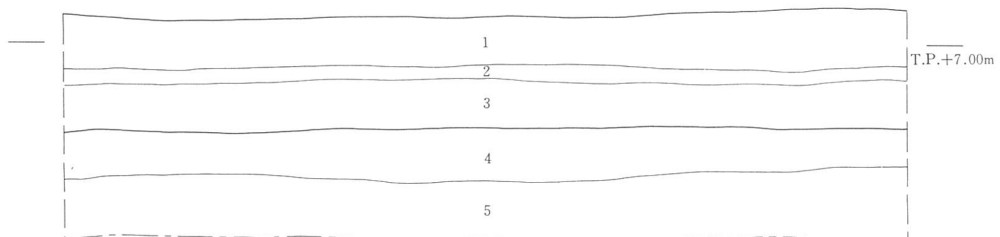
調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1層で現代の、第2層で近世・中世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、土坑、鋤溝を検出した。

層序（第108図）

第1層 黒色土（10Y2/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚はDDでは0.3m、WUで0.7m（盛土混）を測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 橙色土（7.5Y R6/8：第Ⅲ-b層）で、北側が低くなっており、AYを境として0.3mの標高差があり、全域に広がっている。上面の高さはDDでT.P.+6.95m、WUでT.P.+6.60mである。層厚はDDで0.1m、WUで0.2mを測る。床土である。遺物は近世以降の染付、中世の大蝸壺、紡錘形の土錘、土師器片が出土した。

第3層 灰褐色土（7.5Y R6/2：第Ⅶ-a層）で、AXから北西方向に広がり、水平堆積している。上面の高さはDDでT.P.+6.85m、WUでT.P.+6.50mである。層厚はDDで0.1m、WUで0.2mを測る。遺物は出土しなかった。



第108図 末廣遺跡6-11区基本土層断面図

第4層 黄橙色土・下部は粘土(10Y R8/8:第Ⅳ層)で、北西方向に傾斜しており、全域に広がっている。上面の高さはDDでT.P.+6.65m、WUでT.P.+6.30mである。地山である。

遺構

01-OW OEに所在する素掘り井戸である。大半は調査区外にあり、正確な大きさや深度は不明である。埋土は灰褐色土(7.5Y R4/2)で遺物は出土しなかった。近代以降のものと考えられる。

02-OO AGに所在する土坑で、南北1.3m、東西1.0m、深度0.2mを測る。埋土は灰や炭を含むもので、焚火等火を使用したものと考えられる。出土遺物はなく、時期は不明だが、近年のものと考えることが可能である。

03-OO DG、EH、KB、LC、MCの地山面上で検出された不定形の土坑である。埋土は明赤褐色土(5Y R5/8)であり、非常にきれいな土で、遺物や炭化物はない。遺構ではなく、地山内の土の違いに過ぎない可能性もある。

04-OO EHの西北部で検出した隅丸四角形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長辺1.4m・短辺0.9m、底部長辺1.2m・短辺0.7m、深度0.12mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、明赤褐色土(5Y R5/8)である。遺物は出土しなかった。

05-OO KBの東北部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が東北東方向を指す。肩部長径1.6m・短径0.7m、底部長径1.3m・短径0.4m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、明赤褐色土(5Y R5/8)である。遺物は出土しなかった。

06-OO LCの北部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が 方向を指す。肩部長径1.9m・短径0.6m、底部長径1.6m・短径0.3m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、明赤褐色土(5Y R5/8)である。遺物は出土しなかった。

07-OO MCの西部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径1.6m・短径1.2m、底部長径1.3m・短径0.9m、深度0.15mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、明赤褐色土(5Y R5/8)である。遺物は出土しなかった。

08-OZ 現代耕作土に伴う溝、ピット群である。溝は鋤溝、あるいは畝溝で、地山まで到着してしまったものであろう。ピット群は、畑作時に打ち込まれた杭跡と考えられる。

まとめ

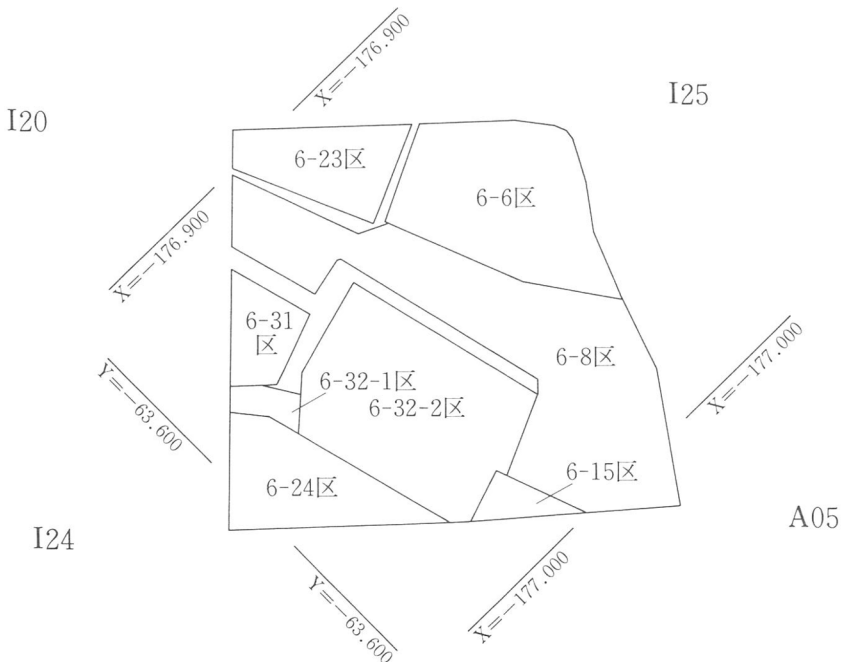
この調査区では、近・現代の遺構を検出した。それ以前と考えられる遺構はなかった。

6-A地区のまとめ

6-12区で検出した溝(01-O S)が規模・形状においては最も遺構らしいが、極端に現在に近い時期の遺物を出土している。ただ最終的に埋められたのは南海本線の線路敷設により、周辺の地割りが変更されて以後現在までの間というだけで、初源はもう少し遡る可能性があり、稲倉2号用水路の前身もしくは初期段階であろうと考えられる。調査直前の水田耕作土が埋土に含まれるものはすべて攪乱として扱った。遺構番号の付いている土坑やピットは若干古い時期の耕作に関係した遺構であろうと考えられる。当地区周辺は近世後半以降に初めて水田として開発されたのではないかと考えられる。

7. 6-B地区の調査

中開農道と府道堺阪南線とに挟まれた範囲で、面積は約6,500m²である。地区割りでは大部分が大C-3-9-I25地区で3隅がI20・I24・大C-3-5-A05地区にかかる。倉庫・田畠であり、6-6・23・8・15・32-2・31・32-1・24地区に分割して調査した。



第109図 末廣遺跡6-B地区調査区配置図

6-6区（付図7・図版39・41）

B地区の東北辺で6-7区から中開農道を挟んだ西北に当たる。調査直前は水田であった。標高はT.P.+6.55mである。調査区の形状は底辺を西南西に向けた台形である。調査面積は約1,040m²である。

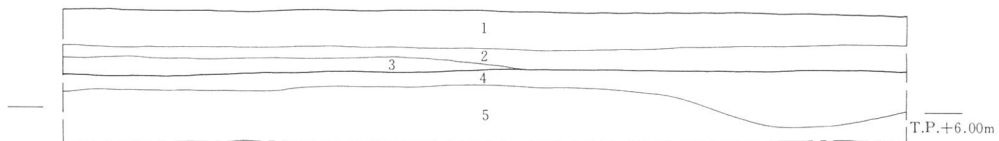
調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1層で現代の、第2層で近世・中世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で土坑、鋤溝、ピットを検出した。層序（第110図）

第1層 黒色土（10YR2/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 黄色粘土（2.5Y7/8：第Ⅲ-b層）で、北西方向に厚くなり、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+6.35mである。層厚は0.05~0.15mを測る。床土である。遺物は近世の陶磁器・染付、中世の蛸壺が出土した。

第3層 黄色粘土（2.5Y8/8：砂混じり：第Ⅳ層）で、所々で厚くなり、全域に広がっている。上面の高さはJXでT.P.+6.30m、FTでT.P.+6.10mである。層厚はJXで0.1m、FTで0.2mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 黄褐色礫層（10YR5/6：第Ⅴ層）で、北西方向に低くなり、全域に広がっている。上面の高さはJXでT.P.+6.20m、FTでT.P.+6.00mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第110図 末廣遺跡6-6区基本土層断面図

遺構

01-00 LWの西北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。肩部長径1.0m・短径0.8m、底部長径0.8m・短径0.6m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、茶褐色土（10YR4/6）である。遺物は土師器片が出土した。

02-00 HUの東部で検出した不整形の土坑である。肩部直径1.3m、底部直径1.0m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、褐色土（10YR4/4）である。遺物は出土しなかった。

03-OZ PUで検出した鋤溝である。条数は1条であり、南北に伸びている。長さ1.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

04-OP 全域に23個が散在する円形のピット群である。直径0.1~0.3m、深度0.05~0.2mを測る。埋土は1層で、暗赤褐色土(5YR3/4)である。遺物は出土しなかった。
まとめ

現水田の床土である第2層の除去後に各遺構を検出した。第2層は客土であり、各時期の遺物が少量出土した。遺構面は北西方向に緩やかに傾斜している。鋤溝の明確なものは1条(03-OZ)のみであったが、微妙な痕跡は調査区南半部に多少認められた。調査直前の水田以前にも水田が存在しており、土坑・ピットは旧水田耕作時の遺構であろう。時期的には近世末から近代と考えられる。

6-23区(付図7・図版41・42)

B地区の北隅で6-6区の北に隣接している。調査直前は居酒屋桃太郎の駐車場であった。標高はYMでT.P.+6.60m、FTでT.P.+6.90mである。調査区の形状は底辺を東北に向けた三角形である。調査面積は約470㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1層で近世の、第2層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で溝を検出した。

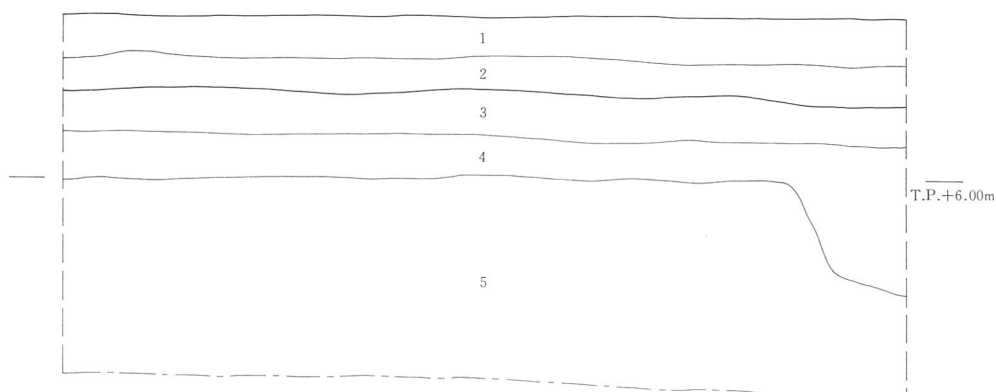
層序(第111図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり：第II層)で、南・南西方向に厚くなり、全域に広がっている。層厚はYMで0.3m、FTで0.7mを測る。盛土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第2層 黒色土(10YR2/1：第III-a層)で、ほぼ全域広がる耕作土である。上面の高さはT.P.+6.40mである。層厚は0.15~0.2mを測る。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 橙色粘土(2.5YR6/8：第IV層)で、北西方向に向かって厚くなり、Bラインから北方、Dラインから南方に広がる。上面の高さはT.P.+6.20mである。層厚は0.2~1.0mである。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 橙色礫土(7.5YR6/6：第V層)で、地点によって上面に標高差があり、全域に広がっている。上面の高さはYMでT.P.+5.10m、CPでT.P.+6.20m、FTでT.P.+6.00mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第111図 末廣遺跡6-23区基本土層断面図

遺構

01-O S (図版42) 調査区北部で、北東-南西方向に走る溝である。幅0.6m、深度0.5~0.8mのしっかりした溝で、埋土はにぶい赤褐色土(5Y5/3)である。埋土中より、弥生時代後期の壺が出土している。しかし、これがこの溝の時期を示すものかどうか、溝が旧国道26号線とほぼ平行していることを含めて検討の余地があろう。

まとめ

01-O Sは、その幅・深度・方向から見て6-32-2区の04-O Sおよび6-24区の01-O Sにつながる事が確実なものである。しかし、当区と6-32-2区に位置する6-8区においてこの溝は検出されていない。いまこの溝の検出レベルを調べていくと、6-23区ではT.P.+5.80~5.90mでこの溝を検出しており、6-8区ではT.P.+6.10mの面で地山面と見たことが判明した。6-8区調査時において、地山を見誤り、その一層上面で止めたために溝が検出できなかった可能性を考えることができる。他に特記すべき遺構はなかった。

6-8区 (付図7・図版41・43)

B地区の西北辺から中開農道までで6-23区の西に当たる。調査直前は水田であった。標高はC PでT.P.+6.40m、S UでT.P.+6.70mである。調査区の形状は底辺を東北東に向けた多角形である。調査面積は約2,050㎡である。

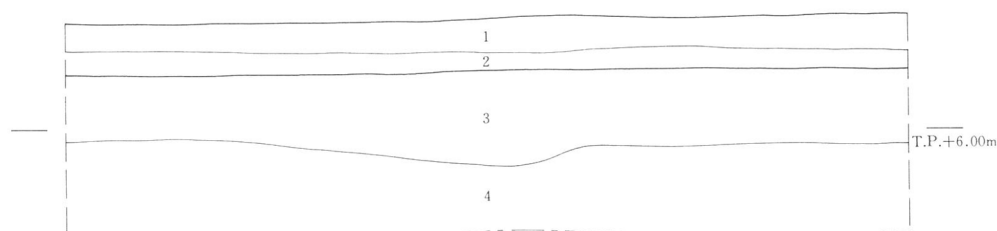
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1層で現代の、第2層で近世・中世の遺物(図版44・45)が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で井戸・土坑・溝・ピット等を検出した。

層序（第112図）

第1層 黒色土（10Y R2/1：第Ⅲ-a層）で、CQを境にして0.2m高くなり、全域に広がっている。層厚は0.1～0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の磁器が出土した。

第2層 浅黄橙色土（7.5Y R8/6：第Ⅲ-b層）で、CQを境にして0.2m高くなり、全域に広がっている。上面の高さはCPでT.P.+6.25m、SUでT.P.+6.55mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器・染付・紡錘形の土錘、中世の土錘・蝸壺・土師器が出土した。

第3層 褐色土（7.5Y R4/4：第Ⅳ層）で、下部にいくと、暗色気味となり、さらに灰白色土（10Y R8/2）、にぶい黄橙色土（10Y R7/2）となる。全域に広がっている。上面の高さはCPでT.P.+6.15m、SUでT.P.+6.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第112図 末廣遺跡6-8区基本土層断面図

遺構

01-OW 調査区の北部で検出した素掘りの井戸である。東半分は調査区外にある。径約5mで、深度1.0mまで掘削したが、危険なためこれ以上の掘削を中止した。近・現代の遺物が出土した。

02-OO 01-OWの西約6mの位置に所在する。東西2.0m、南北1.5m、深度0.5m。埋土は基本的に灰褐色土で、出土遺物はなかった。埋土の状況から、近・現代と思われる。

03-OO 02-OOの西2m程離れて所在する。東西2.5m、南北1.8m、深度0.5m。埋土は基本的に灰褐色土で、出土遺物はなかった。埋土の状況から、近・現代と思われる。

04-OO 03-OOの北13mの位置に所在する。東西0.8m、南北2.3m、深度0.1m。埋土は拳大の礫土で、出土遺物はなかった。埋土の状況から、近・現代と思われる。

05-OS 調査区東端に沿って検出した。検出長35.0m、幅0.5m、深度0.1mである。深度は、北へ行く程、深くなっていく。埋土はにぶい黄橙色砂質土（10Y R7/2）で出土遺物はなかった。この溝は、5m東に流れる農業用水路に平行している。この水路は、北

へ向かうとS字形に屈曲しており、もし、屈曲しない場合を想定すると、01-O Sと全く重なり合う。従って、01-O Sは、この水路の前身であり、ある時点で水路を屈曲させて、現在の農業用水路となったものと、推測できる。

06-O Z 調査区中央～南部に、小ピットや小溝を検出した。現代耕作土に伴うものと考えられる。

まとめ

この調査区では近～現代の遺構を検出した。それ以前と考えられる遺構はなかった。

6-15区（付図7・図版41・46）

B地区の西南辺で6-8・32区の西南に当たる。調査直前は水田であった。標高はY LでT.P.+6.50m、V IでT.P.+6.70mである。調査区の形状は底辺を西南に向けた三角形である。調査面積は約75m²である。

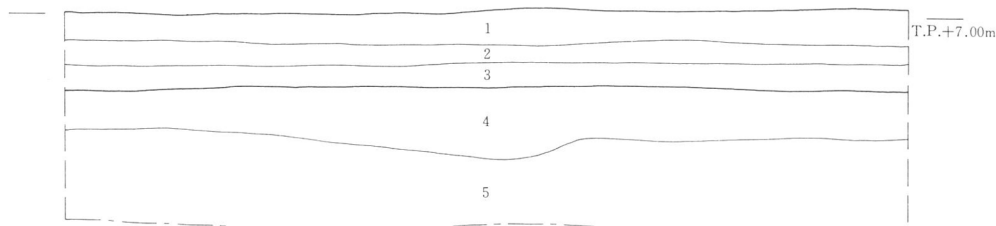
調査により確認した土層は基本的に3層あり、第1層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第3層上面で鋤溝を検出した。

層序（第113図）

第1層 黒色土（10Y R2/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 浅黄橙色土（7.5Y R8/6：第Ⅲ-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはY LでT.P.+6.65m、V IでT.P.+6.60mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第3層 褐色土（7.5Y R4/4：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはY LでT.P.+6.60m、V IでT.P.+6.55mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第113図 末廣遺跡6-15区基本土層断面図

遺構

01-OZ V JからUKで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ8.0~11.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

02-OZ V JからW Jで検出した鋤溝である。条数は1条であり、南南東から北北西に伸びている。長さ3.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

現代より古い時期の遺構は無かった。

6-32-2区(付図7・図版41・46)

B地区の中央部の西寄りで6-8区の西に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はT.P.+7.00mである。調査区の形状は長辺の一边を西に向けた長方形である。調査面積は約1,510㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、溝、段を検出した。

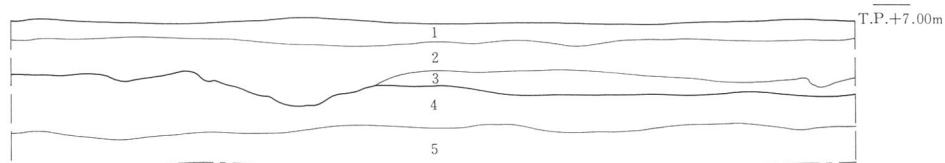
層序(第114図)

第1層 コンクリート殻(第I層)で、全域にはほぼ水平堆積している。層厚は0.2mを測る。攪乱層である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 褐灰色土(7.5Y R5/1:砂混じり:第III-a層)で、部分的に広がり、ほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.80mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい褐色土(7.5Y R5/3:砂混じり:第VII-c層)で、第2層と同じ範囲で、ほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.60mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第4層 赤褐色土(10Y R5/4:第XV層)で、KG~IMの東側は明黄褐色の粘土が堆積している。上面の高さはT.P.+6.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。

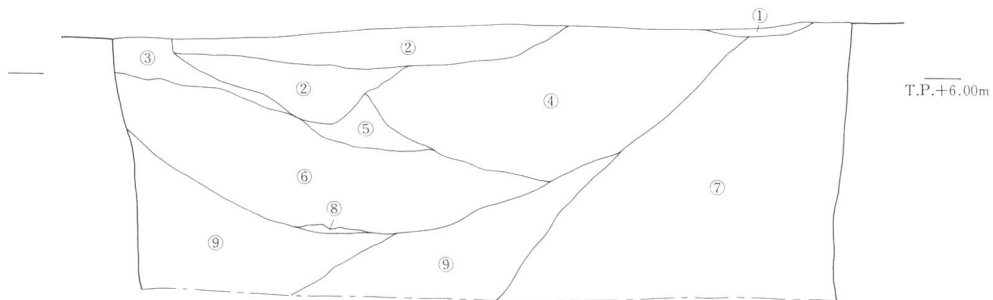


第114図 末廣遺跡6-32-2区基本土層断面図

遺構

01-OW SNの中央部で検出した不整円形の井戸である。肩部直径1.6m、底部直径1.1m、深度0.66m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では口の開いたU字形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

02-OW (第115図) UHからUIの西部で検出した不整楕円形の井戸である。肩部長径5.9m・短径4.3m、底部長径5.4m・短径3.4m、深度1.5m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は9層あり、①明黄褐色土(2.5Y6/8)、②灰褐色土(7.5YR6/2:礫混じりで下部は砂粗い)、③褐色砂(7.5YR4/6)、④灰褐色砂(7.5YR6/2)、⑤褐色土(7.5YR4/4)、⑥灰褐色砂(7.5YR5/2:拳大の礫混じり)、⑦黄褐色砂(10YR5/6:小礫混じり)、⑧灰色土(N4/1)、⑨褐色土(7.5YR4/6:中央部付近礫が大きい)である。遺物は②灰褐色土・⑤褐色土から陶磁器・瓦が、③褐色砂から紡錘形の土錘が出土した。



第115図 末廣遺跡6-32-2区02-OW埋土断面図

03-OW UIの東部で検出した不整円形の井戸である。肩部直径1.5m、底部直径1.1m、深度1.04m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

04-OS IIの西南部からKGを通過してLEの南部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。西南端は6-24区の01-OSに続き、東北端は6-8区へ伸びるが、不明である。検出長19.5m、幅0.3~0.6m、深度0.15~0.5mを測る。断面形状は口の開いた逆台形とU字形である。埋土は1層であり、茶灰褐色粘土(7.5YR4/4)である。遺物は出土しなかった。

05-OS OMの東北部からSOまで東北東方向に伸び、TMの中央部まで西南西方向

に伸びる、底辺が南南東を向いた逆L字形の溝である。検出長27.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

06-0Z VIからSOまで東北東方向に伸び、SOで直角に曲がりKMまで北北西方向に伸びる明黄褐色粘土を削り込んだ畦畔である。西北側が低くなっており、高低差は0.2mである。上面はT.P.+6.50mで、割合平坦である。下面はT.P.+6.30mで、同じく平坦である。西南西側は調査区外へ伸びるが、不明である。

まとめ

検出したOW群の内02-OWはもっとも古く、6-32-1区の01-OWと同じ性格をもつと考えられる。近世末から近代初頭の時期が考えられる。01・03-OWは新しく、近代以降と考えられる。06-0Zの地山削りだしの畦畔の位置と方向は付近の現在の区画と同じであり、何ら変わらない。02-OW埋没後現況の区画となったと考えられるが、02-OWを含めたOW群の位置からすれば、調査区南側の東西方向の区画はあまり変化していない。04-OSは遺物の出土もなく時期や性格は不明である。大半の遺構は埋土の質や状況から近代以降と考えられる。

6-31区（付図7・図版41・46）

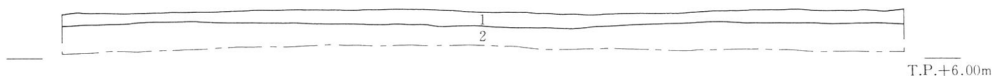
B地区の西北辺の中央で6-32区の北に隣接している。調査直前は田畠であった。標高はHJでT.P.+6.25m、JFでT.P.+6.30mである。調査区の形状は底辺を東北東に向けた台形である。調査面積は約230m²である。

調査により確認した土層は基本的に2層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第2層上面で井戸を検出した。

層序（第116図）

第1層 黒色土（10YR2/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 赤褐色土（5YR4/6：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.20mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第116図 末廣遺跡6-31区基本土層断面図

遺構

01-OW 調査区南西隅で井戸を検出した。素掘りのもので、その半分は調査区外にあり、安全のため0.5m程の掘削にとどめ、底まで到達していない。大きさは径3.0m程である。この井戸は、近年の耕作に伴うものと考えられるものである。

02-OW 01-OWの西1m離れて所在する。01-OWと同様に素掘りのものでその半分は調査区外にあり、安全のため0.5m程の掘削にとどめた。大きさは検出径2.0mである。この井戸も、近年の耕作に伴うものと考えられる。6-32-1区の01-OWに続く。

他に溝やピット群を検出しているが、これらは調査着手前の耕作土に伴うものと考えられるもので、攪乱として扱った。

まとめ

この調査区では、近年の遺構を検出しただけである。それより古いと思われる遺構は無かった。

6-32-1区（付図7・図版41・46）

B地区の西北辺の中央で6-32区の西北に隣接している。調査直前は個人住宅の進入路であった。標高はJ FでT.P.+6.70m、HDでT.P.+6.80mである。調査区の形状は底辺を西に向けた台形である。調査面積は約80㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1・2層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、鋤溝を検出した。

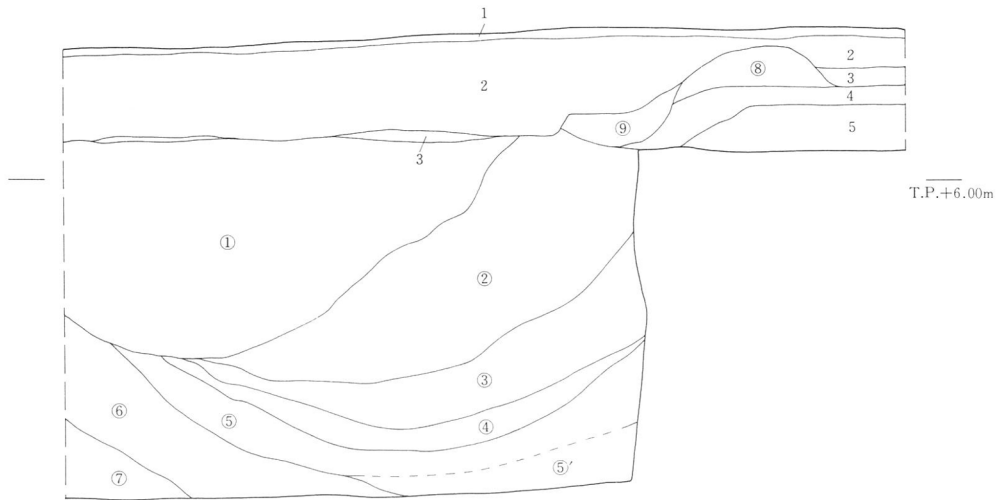
層序（第117図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚はJ Fで0.2m、HDで0.5mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 褐灰色土（7.5Y R5/1：砂混じり：第III-a層）で、J F・K Eに水平堆積している。上面の高さはJ FでT.P.+6.60mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 にぶい褐色土（7.5Y R5/3：砂混じり：第VII-c層）で、J F・K Eに水平堆積している。上面の高さはJ FでT.P.+6.50mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第4層 にぶい橙色粘土（5Y R6/4：第IV層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.40mである。遺物は出土しなかった。



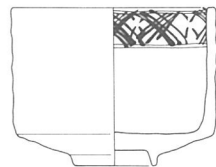
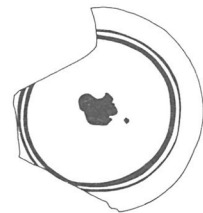
第117図 末廣遺跡6-32-1区基本土層・01-OW埋土断面図

遺構

01-OW（第117図） J Dの東部からJ Eの中央部で検出した不整隅丸三角形の井戸である。6-31区の西南端部に続く。肩部長径3.7m・短径3.5m、底部長径2.7m・短径2.4m、深度1.86mを測る。断面形状は長方形である。埋土は7層で、①灰褐色細砂（7.5Y R6/2：上部に泥質・礫混じり）、②にぶい黄橙色砂礫（10Y R6/3）、③灰褐色粗砂（7.5Y R6/2）、④黒褐色泥砂（10Y R3/1）、⑤明黄褐色砂礫（10Y R6/6：上部に粘土混じり）、⑥黄褐色砂礫（10Y R5/6：粗砂混じり）、⑦明黄褐色礫（10Y R6/6：粗砂混じり）である。遺物は灰褐色細砂・にぶい黄橙色砂礫から陶磁器・瓦・土錘が、灰褐色粗砂から陶磁器・瓦が出土した。

02-OZ I DからI Eで検出した鋤溝群である。条数は5条あり、南南東から北北西に伸びている。長さ0.5～3.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

03-OZ I Fで検出した⑧赤灰色土（2.5Y R5/1）を盛りあげた畦畔である。平面的には確認しておらず、断面観察により、畦畔に伴う溝とともに確認した。西北側が低くなっており、高低差は0.2mである。幅約1.0mを測る。溝内埋土は⑨褐灰色土（7.5Y R4/1）である。



第118図 末廣遺跡6-32-1区出土遺物実測図

遺物（第118図）

1は01-OWより出土した18世紀後葉頃の肥前系青磁染付け筒茶碗である。口径8.2cm、器高6.5cmを測る。外面は青磁釉を施す。内面は見込みに崩れた五弁花と二条の圏線を配し、口縁近くには四方禱紋を描く。高台畳付には赤土を塗る。

まとめ

01-OWの性格は耕作に関連した野井戸である。遺物の出土状況から掘削時期は近世末頃で、埋没時期は近代初頭の時期が考えられる。02・03-OZは01-OZが埋没した後に耕作に伴ってできた鋤溝であるが、現在の耕作には伴っていない。

6-24区（付図7・図版41・46）

B地区の西隅で6-32区の西に隣接している。調査直前は畑で植木が栽培されていた。標高はOYでT.P.+6.70m、UGでT.P.+6.60mである。調査区の形状は底辺を東に向けた三角形である。調査面積は約600㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1・2層で現代の、第3層で近世の遺物とともに中世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面であり、第4層上面で溝、池を検出した。

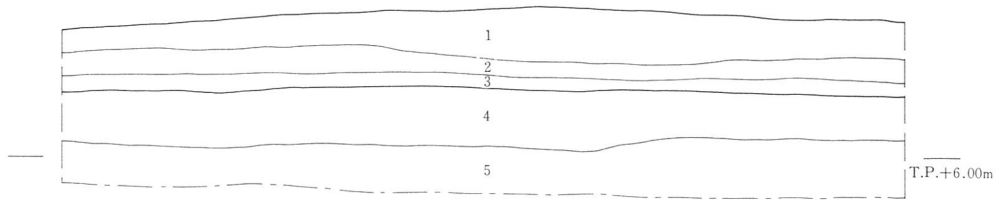
層序（第119図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、OY～RCにかけてほぼ水平堆積している。層厚はUGで0.1m、OYで0.2mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 黒色土（10YR2/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+6.50mである。層厚はUGで0.2m、OYで0.05mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3：第III-b層）で、OY～QBにかけて水平堆積している。上面の高さはQBでT.P.+6.30m、OYでT.P.+6.45mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近世の石臼・陶磁器・備前の挿り鉢、中世の蛸壺・紡錘形の土錘・須恵器が出土した。

第4層 橙色土（7.5YR6/6：第IV層）で、北西方向に低くなり、全域に広がっている。上面の高さはUGでT.P.+6.50m、OYでT.P.+6.35mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第119図 末廣遺跡6-24区基本土層断面図

遺構

01-O S 調査区北部で検出された溝で、北東-北西方向に走り、幅0.8~1.0m、深度0.6mを測る。埋土はにぶい褐色土(7.5Y5/4)である。出土遺物は無かった。

02-O L 調査区北端部、旧26号に接して池の一部と考えられる遺構を検出した。埋土にヘドロ状のものがたまり、湧水が多かった。小さな池で、旧国道26号線建設時に廃棄され、埋められたものと思われる。そのごく一部がこの調査区にかかったようで、池の全容は知りえないものである。

他に土坑群が多く検出されたが、これらは植木の根元で、植え替えや撤去するときに掘られた穴と考えられる。

まとめ

01-O Sは、その幅と深度、方向、位置から考えて6-23区の01-O Sにつながるものが確実なものである。その時期については、検討の余地があろう。

02-O Lは近~現代と考えられる。土坑群は近年のもので攪乱として扱った。

6-B地区のまとめ

遺物としては弥生時代の壺体部破片が溝(6-23区01-O S)より出土しているが、同溝内より他にも中世の蛸壺や近世の陶磁器等も出土しており、弥生時代の遺構とはいえない。溝の掘削時期はさほど遡らないようである。井戸からは多少遺物を出土したが、近世の陶磁器が極僅かで近・現代の陶磁器がほとんどで、近世を大きく遡るものはない。その他の遺構も大半は遺物が皆無で、時期の明確なものはほとんどない。埋土から考えると古い時期に属するような遺構は皆無といえる。この他に現在の水田用排水路と僅かにずれた溝(6-8区05-O S)があり、現水田地割りが旧水田地割りとは多少ずれた部分もあったことが判る。調査結果からは旧水田地割りの時期は近世末から近代と考えるのが適当であろう。

8. 末廣遺跡のまとめ

末廣遺跡の考古学的痕跡は縄文時代に遡る。しかし石匙が1点出土しただけで、この時期の土器はない。また遺構も検出していない。次に痕跡を残すのは古墳時代である。土器がほんの僅かに出土した程度である。

土器が比較的まとまって出土したのは13世紀中葉に入ってからである。流路内だけの限られた地点で出土したが、この地域に人間が生活した始まりといえる。流路を利用して耕地開発をしたとしても小規模なものであったようである、

土器が各地点で出土し始めるのは江戸時代の初期である。全体的にみて点数は少ない。生活範囲の広がりや推定できるが、流路はまだ完全に埋まっていなかったようである。

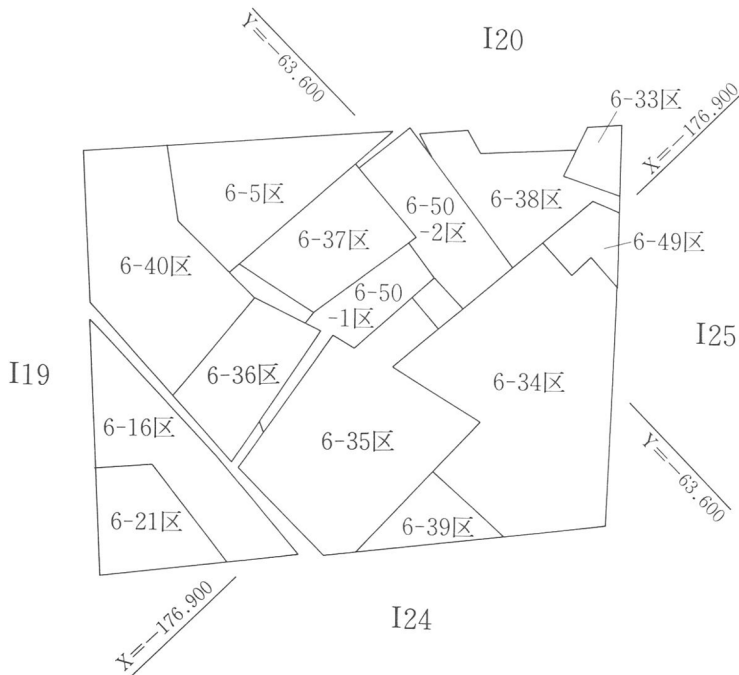
土器が爆発的に出土したのは近世後半から近代にかけての時であり、多数の耕作にともなう遺構を検出している。耕地の造成は大きくみると、段として痕跡が残る地山面削り出しによる整地と、その上の堆積層上での整地が何回か行われ、最終的には現代の耕地が形づくられている。耕地開発による整地とは別に、末廣池より東南側では1945年の飛行場建設時に整地が行われている。こうした耕地造成と関連した遺構に末廣池、水路、側溝状に伸びる溝、灌漑用井戸、鋤溝などがある。末廣池は築造時期が遡ることも考えられるが、現代まで存続した堤は近世末から近代初頭頃に築堤されたようであり、その下では溝と鋤溝を検出している。水路と多くの灌漑用井戸は廃絶時期が飛行場建設時に当たる。しかし、水路は明治年間の地籍図に描かれたものと符合し、また比較的出土遺物の多い井戸では近世土器が認められるものがある。耕作にともなう遺構についてはこの時期を十分に把握できたとはいえない。掘削された時期の検討を要するようである。いずれにしる近世後半から近代にかけてこの地域で本格的に耕地開発がされたのである。

第3節 中開遺跡の調査

中開遺跡は府道堺阪南線（旧国道26号線）から市道本町羽倉崎線までの範囲である。調査は約100m幅で遺跡の中央を東南から西北へ二分する形で行った。調査は6-C・6-Dの2地区に大きく分けて行った。

1. 6-C地区の調査

当地区は府道堺阪南線と市道見出川羽倉崎線とに挟まれた範囲で、面積は約9,000㎡である。農道が西隅部を三角形に切りとるように南北に伸びている。地区割りでは大C-3-9-I19・20・24・25地区で、当地区の東北部に交点がある。農道の東部分は道路沿いに鉄鋼所・自動車修理工場、奥には個人住宅が多くあり、6-33・38・49・34・39・50-2・50-1・37・5・40・35・36区に分けて調査した。農道より西側は田畠と倉庫であり、6-16・21区に分けて調査した。



第120図 中開遺跡 6-C地区調査区配置図

6-33区（付図8・図版47・48）

C地区の東隅部に当たる。調査直前は鉄工所の入口であった。標高はW JでT.P.+6.50m、V IでT.P.+6.50mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた五角形である。調査面積は約100㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第4層上面で土坑、鋤溝、ピットを検出した。

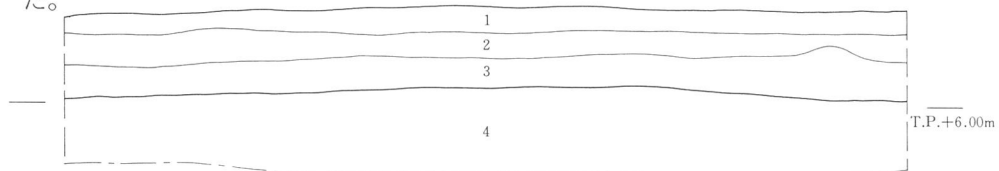
層序（第121図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.1mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黄灰色土（2.5Y6/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはW JでT.P.+6.40m、V IでT.P.+6.40mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰黄褐色土（10Y R6/2：第III-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはW JでT.P.+6.20m、V IでT.P.+6.20mである。層厚は0.15mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色土（10Y R6/6：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはW JでT.P.+6.05m、V IでT.P.+6.05mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第121図 中開遺跡6-33区基本土層断面図

遺構

01-00 V Hの西南部からW Hの西北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径0.9m・短径0.6m、底部長径0.6m・短径0.4m、深度0.19mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

02-00 W Iの東北部からW Jの西北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径0.9m・短径0.6m、底部長径0.7m・短径0.4m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物

は出土しなかった。

03-00 XHの東部からXIの西部で検出した不整楕円形の土坑である。東南端が側溝に切られている。肩部検出長径1.3m・短径0.9m、底部長径1.2m・短径0.6m、深度0.24mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR6/1)である。遺物は出土しなかった。

04-00 WIの中央部で検出した円形の土坑である。肩部直径0.7m、底部直径0.3m、深度0.08mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

05-00 WHの北部で検出した底辺が南を向いた隅丸五角形の土坑である。肩部長径1.0m・短径0.4m、底部長径0.8m・短径0.3m、深度0.11mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

06-00 WHの東北部で検出した楕円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径1.0m・短径0.5m、底部長径0.7m・短径0.2m、深度0.18mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

07-00 WIの西南部からWHの東南部で検出した細長い楕円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径2.4m・短径0.6m、底部長径2.0m・短径0.4m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

08-00 WIの西部からWHの東部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径0.9m・短径0.4m、底部長径0.8m・短径0.2m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

09-0Z VIからXHで検出した鋤溝群である。条数は3条あり、西南西から東北東に伸びている。長さ9.5m、幅0.3m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

10-0P WIの西部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

11-0P WHの中央部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

12-0P WHの中央部で検出した楕円形のピットである。長径0.4m、短径 m、深

度0.15mを測る。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

13-OP WHの中央部で検出した不整形形のピットである。直径0.4m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

14-OP WHの東南部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

15-OP WIの中央部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

検出された遺構は、埋土の状況から耕作土の床土に伴うものと考えられることのできるもので、すべて近年のものと考えられる。

6-49区（付図8・図版47・48）

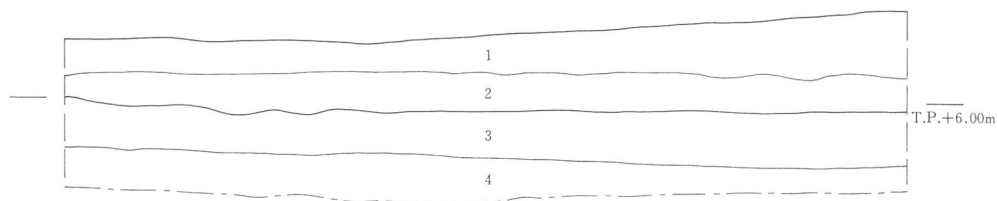
C地区の東南部で、東南辺が府道堺阪南線の西北に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はAGでT.P.+6.60m、XCでT.P.+6.30mである。調査区の形状は底辺が東南を向いた多角形である。調査面積は約200㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第2層で現代の遺物が出土した。遺構は検出しなかった。

層序（第122図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、北西方向に低くなり、全域に広がっている。層厚はAGで0.3m、XCで0.2mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黄灰色土（2.5Y4/1：第III-a層）で、全域にほぼ水平堆積している。上面の高さはAGでT.P.+6.30m、XCでT.P.+6.10mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器片が出土した。



第122図 中開遺跡6-49区基本土層断面図

第3層 明赤褐色粘土（5Y R5/8：第Ⅳ層）で、少し起伏があり、全域に広がっている。上面の高さはA GでT.P.+6.10m、X CでT.P.+5.90mである。層厚はA Gで0.2m、X Cで0.3mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色砂礫（10Y R6/8：第Ⅴ層）で、少し起伏があり、全域に広がっている。上面の高さはA GでT.P.+5.70m、X CでT.P.+5.70mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。

まとめ

住宅基礎による攪乱が顕著であり、現代以前の遺構・遺物はなかった。

6-34区（付図8・図版47・48）

C地区の南隅部で東南辺が府道堺阪南線の西北に隣接している。調査直前は個人住宅及び駐車場であった。標高はK UでT.P.+6.30m、H QでT.P.+6.40mである。調査区の形状は底辺が東方を向いた多角形である。調査面積は約1,510m²である。

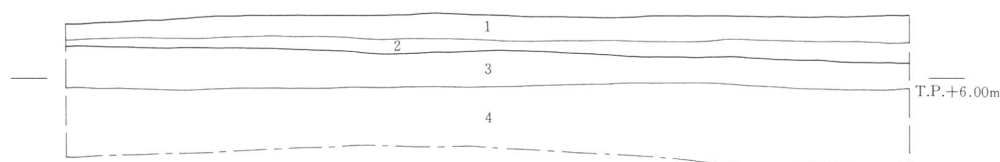
調査により確認した土層は基本的に3層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出しなかった。

層序（第123図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第Ⅱ層）で、全域にほぼ水平堆積している。層厚は0.1mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 灰色土（N6/0：第Ⅲ-a層）で、西南に向かって厚くなり、J Sから東北方向へ堆積している。上面の高さはJ SでT.P.+6.20m、H QでT.P.+6.30mである。層厚は0.3mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい橙色土（5Y R6/4：小石・小礫混じり：第Ⅲ-b層）で、西南方向に向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはK UでT.P.+6.20m、H QでT.P.+6.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第123図 中開遺跡6-34区基本土層断面図

6-38区（付図8・図版47・48）

C地区の東北辺で6-33区から私道を挟んだ西に当たる。調査直前は個人住宅・工場建物であった。標高はT.P.+6.40mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた多角形である。調査面積は約560㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第1～3層で現代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、土坑、溝を検出した。

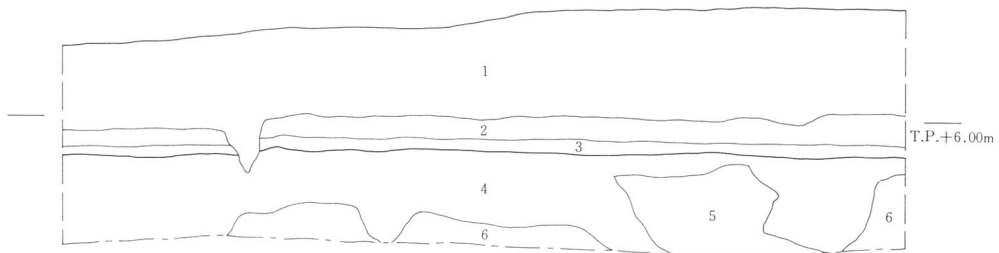
層序（第124図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、北西方向へ向かって薄くなり、全域に広がっている。層厚は0.6mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器片が出土した。

第2層 褐灰色土（10Y R4/1：第III-a層）で、段差面が見られ、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+5.80mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は現代の陶磁器片が出土した。

第3層 にぶい黄褐色土（10Y R5/4：第III-b層）で、SEからVHにかけて広がり、ほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.70mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は現代の陶磁器片が出土した。

第4層 明赤褐色土（5Y R5/8：第IV層）で、粒径の違いで上・下部に分かれ、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+5.60mである。地山である。遺物は出土しなかった。

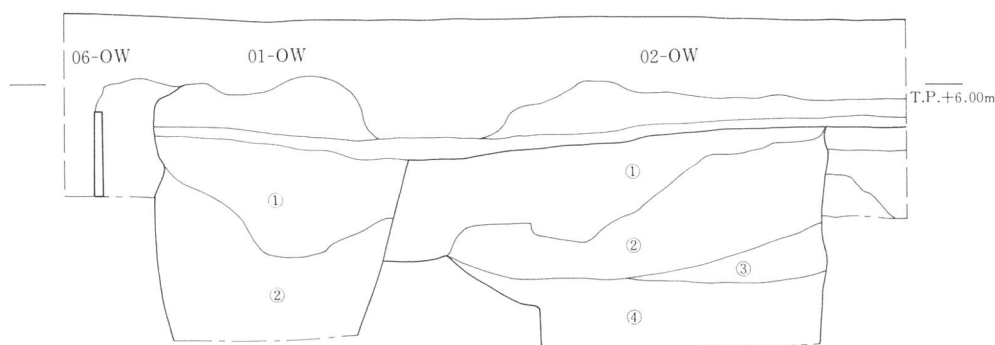


第124図 中開遺跡6-38区基本土層断面図

遺構

01-OW（第125図） TEの東部からTFの西部で検出した不整形の井戸である。06-OWに切られ、02-OWを切っている。肩部直径2.2m、底部直径1.7m、深度1.15m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は2層で、上から黄灰色土（2.5Y5/1：褐色土ブロック混じり）が0.65m、にぶい黄褐色粘土（10Y R5/4）が0.4mである。遺物は出土しなかった。

02-OW (第125図) T Fの南部で検出した不整半円形の井戸である。長軸が西北方向を指す。01-OWに切られ、東北側は調査区外へ広がっている。断面形状は、東南側が直、西北側が二段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明である。肩部検出直径2.9m・短径1.1m、深度0.7m、二段目検出長径2.7m・短径0.6m、底部長径1.2m・短径0.3m、深度0.5m以上を測る。確認した埋土は4層で、①灰黄褐色土(10Y R4/2:2~5cm大の礫混じり)、②明黄褐色粘土(2.5Y7/6:礫混じり)、③灰黄褐色土(10Y R4/2:礫混じり)、④灰色土(7.5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。



第125図 中開遺跡6-38区01-OW・02-OW・06-OW埋土断面図

03-OW U Fの中央部で検出した不定形の井戸である。肩部長径1.4m・短径1.3m、底部長径0.9m・短径0.9m、深度0.42m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土(5Y5/1)である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

04-OW U Gの西南部で検出した楕円形の井戸である。長軸が西方向を指す。09-OSとつながっている。肩部長径1.6m・短径1.2m、底部長径1.3m、短径1.0m、深度0.85m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰褐色土(10Y R5/1:礫・砂混じり)である。遺物は出土しなかった。

05-OW V Gの西部で検出した不整円形の井戸である。肩部直径1.7m、底部直径1.4m、深度0.88m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土(5Y4/1)である。遺物は近・現代の陶磁器・瓦が出土した。

06-OW (第125図) T Eの東北隅部で検出したコンクリートの枠をもつ半円形の井

戸である。東北側は調査区外へ広がっている。肩部径1.6m、底部径1.2m、深度0.75m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

07-OW QBの西北部で検出した円形の井戸である。西側は調査区外へ広がっている。肩部直径1.0m、底部直径1.0m、深度0.4m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

08-OO XGの西部で検出した不整円形の土坑である。断面形状は二段でテラスを有し、全て逆台形である。肩部長径1.6m・短径1.5m、深度0.2m、二段目長径1.2m・短径1.0m、底部長径0.7m・短径0.7m、深度0.4m以上を測る。埋土は1層であり、褐灰色土（10YR5/1：礫・砂混じり）である。遺物は出土しなかった。

09-OS UGの西部からVGの西北部を通してUGの南部まで西南西方向に直線的に伸びる溝である。東端は調査区外へ伸び、西端は攪乱孔に切られ04-OSとつながる。検出長2.0m、幅1.0m、底部幅0.6m、深度0.38m測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

検出した遺構は近代～現代のものである。いずれも埋め戻しされており、僅かずつの時期差が考えられる。

6-50-2区（付図8・図版47・49）

C地区の東北部で6-38区の西に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はXYでT.P.+6.50m、XVでT.P.+6.60mである。調査区の形状は底辺を南に置いた台形である。調査面積は約500㎡である。

調査により確認した土層は基本的に3層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第3層上面で井戸を検出した。

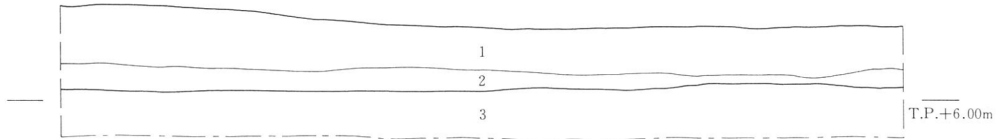
層序（第126図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、ほぼ全域に水平堆積している。上面の高さはXYでT.P.+6.50m、XVでT.P.+6.30mである。層厚は0.2mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 褐灰色土（5YR4/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高

さはXYでT.P.+6.15m、XVでT.P.+6.10mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 橙色土（5Y R6/8：礫混じり：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはXYでT.P.+6.05m、XVでT.P.+6.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第126図 中開遺跡6-50-2区基本土層断面図

遺構

01-OW WXの南部で検出した不整円形の井戸である。肩部直径3.0m、底部直径2.4m、深度1.0m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では深度0.5m付近まで逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰褐色土（5Y R4/2）である。遺物は出土しなかった。

まとめ

01-OWは住宅建設直前のものと考えられるが、遺物の出土もなく時期は不明である。

6-50-1区（付図8・図版47・49）

C地区の中央部で6-50-2区の西に隣接している。調査直前は園芸用地であった。標高はSWでT.P.+6.30m、ULでT.P.+5.90mである。調査区の形状は底辺を北に置いた台形である。調査面積は約340㎡である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1層で現代の遺物が出土した。遺構は検出しなかった。

層序（第127図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、西方に向かって低くなり、全域に広がっている。層厚はSWで0.3m、ULで0.1mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

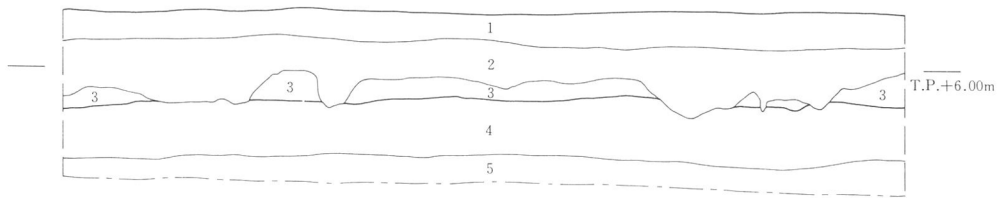
第2層 明赤褐色土（5Y R3/4：第IV層）で、西方に向かって低くなり、TQから西南方向に広がっている。上面の高さはTQでT.P.+6.00m、ULでT.P.+5.80mである。

層厚は0.1mを測る。腐植土である。遺物は出土しなかった。

第3層 黒褐色土（7.5Y R3/1：第Ⅲ-a層）で、西北側が低くなっており、TQを境として0.2mの標高差があり、全域に広がっている。上面の高さはSWでT.P.+6.10m、ULでT.P.+5.70mである。層厚は0.25mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第4層 明赤褐色粘土（2.5Y R5/6：多量のマンガン粒混じり：第Ⅳ層）で、西南方向に低くなり、全域に広がっている。上面の高さはSWでT.P.+5.85m、ULでT.P.+5.70mである。層厚はSWで0.15m、ULで0.1mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第5層 明赤褐色粘土（2.5Y R5/8：礫混じり：第Ⅴ層）で、SRから西南方向に広がり、ほぼ水平堆積している。上面の高さはSRでT.P.+5.70m、ULでT.P.+5.60mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第127図 中開遺跡6-50-1区基本土層断面図

まとめ

現代以前の遺構・遺物はない。

6-37区（付図8・図版47・49）

C地区の東北部で6-50-1区の北に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高はRXでT.P.+6.30m、PXでT.P.+6.25mである。調査区の形状は底辺が北を向いた台形である。調査面積は約360㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出できなかった。

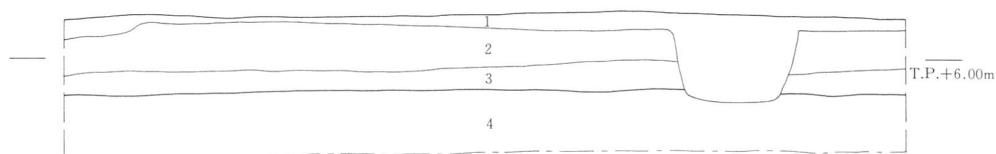
層序（第128図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第Ⅱ層）で、全域にほぼ水平堆積している。上面の高さはRXでT.P.+6.30m、PXでT.P.+6.30mである。層厚は0.2mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒色土（2.5Y2/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはRXでT.P.+6.10m、PXでT.P.+6.10mである。層厚はRXで0.1m、PXで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい橙色土（5YR6/4：第Ⅲ-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはRXでT.P.+6.00m、PXでT.P.+5.90mである。層厚はRXで0.2m、PXで0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 赤褐色土（5YR4/6：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはRXでT.P.+5.80m、PXでT.P.+5.80mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第128図 中開遺跡6-37区基本土層断面図

遺構

地山面上を精査したが、現代の建物に伴うと考えられるピットやゴミ穴を検出したのみである。

まとめ

現代より古い遺構は無かった。

6-5区（付図8・図版47・49）

C地区の東北辺で6-50-2・37区の北に当たる。調査直前は造園業者の植樹地であった。標高はOBでT.P.+5.50m、HRでT.P.+5.30mである。調査区の形状は底辺が東北を向いた三角形である。調査面積は約730㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出なかった。

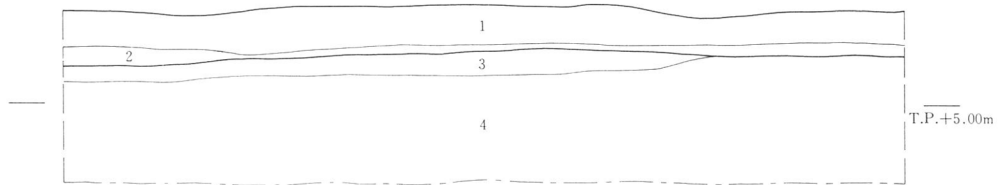
層序（第129図）

第1層 灰色粘質シルト（10Y4/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。現代の耕作土である。遺物は出土しなかった。

第2層 橙色粘土（7.5YR6/2：第Ⅲ-b層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.30mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第3層 黄橙色粘土（7.5Y R7/8：第Ⅳ層）で、JU-O T、AN-O Yの間に堆積している。上面の高さはT.P.+5.20mである。層厚は0.6mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色土（10Y R6/8：第Ⅶ層）で、全域に広がっている。上面の高さはT.P.+5.20mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第129図 中開遺跡6-5区基本土層断面図

まとめ

植樹による攪乱ばかりであった。他区での遺構検出面は第3層上面である。

6-39区（付図8・図版47・50）

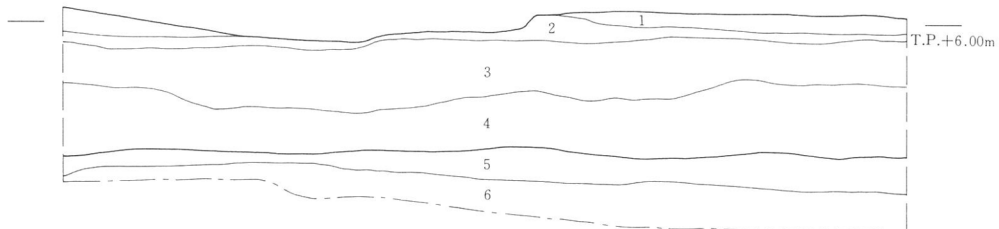
C地区の西南辺で6-34区の西に隣接している。調査直前は大阪トヨタ販売の工場であった。標高はT.P.+6.00mである。調査区の形状は底辺を西南に向けた三角形である。調査面積は約160㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出しなかった。

層序（第130図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第Ⅱ層）で、東に向かって厚く堆積している。層厚は0.1mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黄灰色土（2.5Y6/1：第Ⅲ-a層）で、全域にほぼ水平堆積している。上面



第130図 中開遺跡6-39区基本土層断面図

の高さはT.P.+5.90mである。層厚は0.05mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 灰黄褐色土(10Y R6/2:微礫・円礫混じり:第Ⅳ層)で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.85mである。層厚は0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 橙色土(2.5Y R6/8:第Ⅴ層)で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.65mである。地山である。遺物は出土しなかった。

まとめ

深く削平を受け地盤改良されたため、遺構・遺物の検出は無かった。

6-35区(付図8・図版47・50)

C地区の中央部で(一部が西南辺にかかる)6-39区の北に隣接している。調査直前は約10軒の個人住宅及び進入路であった。標高はC JでT.P.+6.60m、V IでT.P.+6.30mである。調査区の形状は底辺が東南を向いた台形である。調査面積は約1,070㎡である。

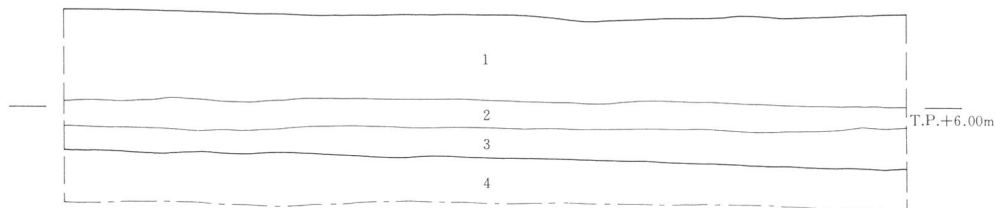
調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出しなかった。

層序(第131図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第Ⅱ層)で、全域に広がっている。層厚はC Jで0.6m、V Iで0.3mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒色土(10Y 4/1:第Ⅲ-a層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはC JでT.P.+6.00m、V IでT.P.+6.00mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい黄橙色粘土(10Y R6/4:第Ⅵ層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはC JでT.P.+5.90m、V IでT.P.+5.90mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。



第131図 中開遺跡6-35区基本土層断面図

第4層 明赤褐色粘土（5Y R5/8：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはC JでT.P.+5.60m、V IでT.P.+5.60mである。層厚は0.3mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

まとめ

住宅に伴う便槽、埋設管、会所、ゴミ穴等を検出した。すべて現代のものであり、古い時期の遺構は無かった。

6-36区（付図8・図版47・50）

C地区の西北部で中央寄りに位置し、6-35区の北北西に隣接している。調査直前は3軒の個人住宅と進入路であった。標高はS QでT.P.+6.20m、U IでT.P.+6.20mである。調査区の形状は底辺が西北西を向いた台形である。調査面積は約460㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あるが、遺物は出土しなかった。遺構も検出しなかった。

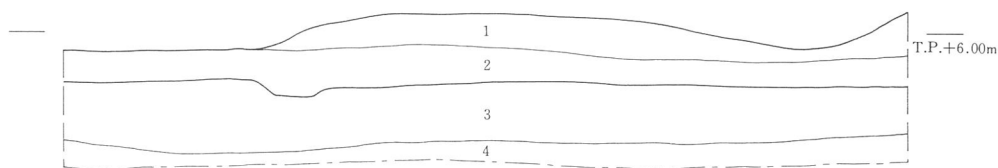
層序（第132図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第Ⅱ層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.3mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 灰色土（5Y5/1：第Ⅲ-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはS QでT.P.+5.90m、U IでT.P.+5.90mである。層厚は0.15mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 明赤褐色粘土（5Y R5/8：第Ⅳ層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはS QでT.P.+5.75m、U IでT.P.+5.75mである。層厚はS Qで0.35m、U Iで0.25mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

第4層 明黄褐色粘土（10Y R6/6：礫混じり：第Ⅶ層）で、起伏が見られ全域に広がっている。上面の高さはS QでT.P.+5.40m、U IでT.P.+5.50mである。段丘礫層である。遺物は出土しなかった。



第132図 中開遺跡6-36区基本土層断面図

まとめ

住宅に伴う便槽、ゴミ穴等が見られたが、すべて現代のものであり、古い時期の遺構は無かった。

6-40区（付図8・図版47・50）

C地区の北隅部で6-5区の西に隣接している。調査直前は数軒の住宅であった。標高はT.P.+5.80mである。調査区の形状は底辺が西北を向いた多角形である。調査面積は約870m²である。

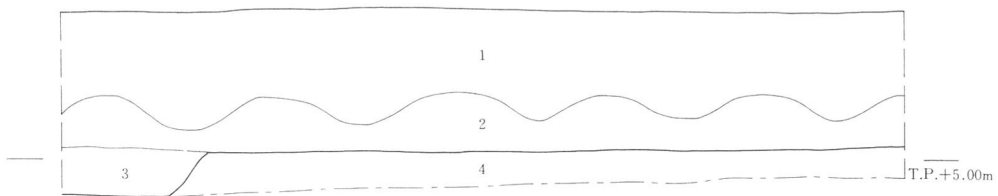
調査により確認した土層は基本的に3層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第3層上面で段を検出した。

層序（第133図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、全域に水平堆積している。層厚は0.6mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黄灰色土（2.5Y4/1：第III-a層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.20mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 明褐色土（7.5YR8/8：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.10mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第133図 中開遺跡6-40区基本土層断面図

遺構

01-OZ MOからOJで検出した黄橙色礫混土を削り込んだ段である。北北西側が低くなっており、高低差は0.5mである。段の上面はT.P.+5.55mで、割合平坦である。下面はT.P.+5.05mで、平坦である。低い部分には暗灰黄色土（2.5Y5/2）が堆積していた。

まとめ

01-OZは、隣接の6-16区や6-5区にはその続きが見られないもので、住宅建設時に削平してできた段差ではないかと考えられる。

6-16区（付図8・図版47・51）

C地区の西北辺中央で6-35・36・40区の西に隣接する。調査直前は西北端は駐車場で西南部は田畠であった。標高はA IでT.P.+5.90m、L HでT.P.+5.90mである。調査区の形状は底辺を東に向けた多角形である。調査面積は約660㎡である。

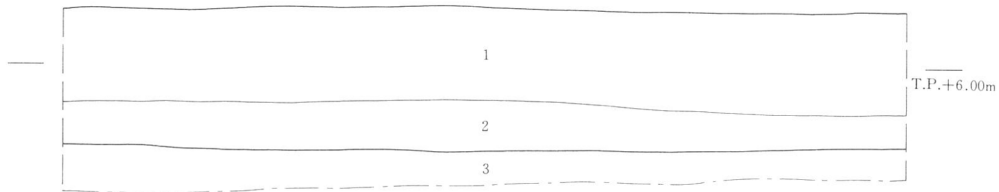
調査により確認した土層は基本的に3層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第3層上面で井戸、建物を検出した。

層序（第134図）

第1層 褐色土（灰色土・黄色土混じり：第II層）で、西北端に水平堆積している。層厚は0.2mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 黒色土（2.5Y2/1：第III-a層）で、西南部に水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.70mである。層厚は0.15mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 黄灰色粘土（2.5Y6/1：第IV層）で、全域に水平堆積している。上面の高さはT.P.+5.55mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第134図 中開遺跡6-16区基本土層断面図

遺構

01-OW 02-OBの北2m程離れて所在する井戸で、掘方径3.0mの穴に径1.2mの桶を据えたものである。安全を考えて底まで掘り切らなかったもので、深度は不明である。この井戸は、02・03-OBの建物群に伴うもので、近年に埋められて廃棄されたものと考えられる。

02-OB 調査区の西端に堀と柱、建物跡2棟を検出した。南棟のものを02-OB、北棟のものを03-OBとした。02-OBは南北5間（18.5m）、東西1間（3.7m）の規模のものである。柱間寸法は南北・東西ともに3.7mで、柱間の中央にはすべて副柱がある。主柱、副柱ともにレンガを基礎としており、レンガの一部にはモルタルの付着したのもあった。主柱の掘方は、0.2~0.3m程の深さがあるが、副柱の方はせいぜい数cmで、畑耕作時に除去されてしまっているものもあった。

03-O B 02-O Bの北に2.4m離れて所在するもので、南北3間(6.5m)、東西1間(3.7m)の規模である。南北の柱列の方向は、02-O Bのそれと全く一致する。柱間寸法は南北で2.1~2.3m、東西で3.7mを測る。02-O Bのような副柱はない。これらの建物は近・現代のものであり、農機具小屋またはたまねぎ小屋で、近年に撤去されたと思われる。

まとめ

近~現代の農業に関連すると考えられる建物や井戸を検出した。他は攪乱として扱った。

6-21区(付図8・図版47・51)

C地区の西隅部に当たる。調査直前は倉庫であった。標高はX EでT.P.+5.95m、U AでT.P.+5.90mである。調査区の形状は底辺を西南に向けた台形である。調査面積は約360㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第3層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で土坑を検出した。

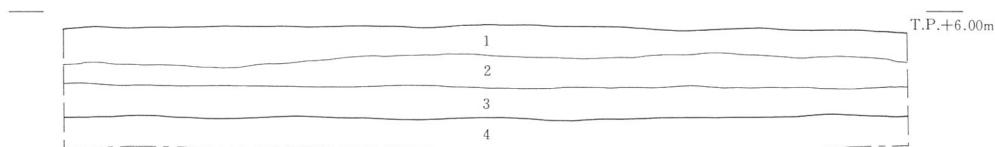
層序(第135図)

第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり：第II層)で、全域に水平堆積している。層厚はX Eで0.2m、U Aで0.3mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 緑黒色土(10GY2/1：第III-a層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはX EでT.P.+5.70m、U AでT.P.+5.75mである。層厚はX Eで0.1m、U Aで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 にぶい黄色砂(2.5Y6/4：第VIII層)で、全域に水平堆積している。上面の高さはX EでT.P.+5.60m、U AでT.P.+5.55mである。層厚はX Eで0.1m、U Aで0.2mを測る。遺物は近世の陶磁器・紡錘形の土錘が出土した。

第4層 明赤褐色粘土(5YR5/8：第IV層)で、全域にほぼ水平堆積している。上面の高さはX EでT.P.+5.40m、U AでT.P.+5.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第135図 中開遺跡6-21区基本土層断面図

遺構

01-00 QDの南部で検出した不整楕円形の土坑である。長軸が西南方向を指す。西南南部が側溝によって切られている。肩部長径1.4m・短径0.8m、底部長径1.1m・短径0.6m、深度0.3mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐色土(10YR4/6)である。遺物は出土しなかった。

02-00 SBの東部で検出した楕円形の土坑である。長軸が東南方向を指す。西北方向を測溝によって切られている。肩部検出長径0.9m・短径0.9m、底部検出長径0.7m・短径0.6m、深度0.3mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐色土(10YR4/6)である。遺物は出土しなかった。

まとめ

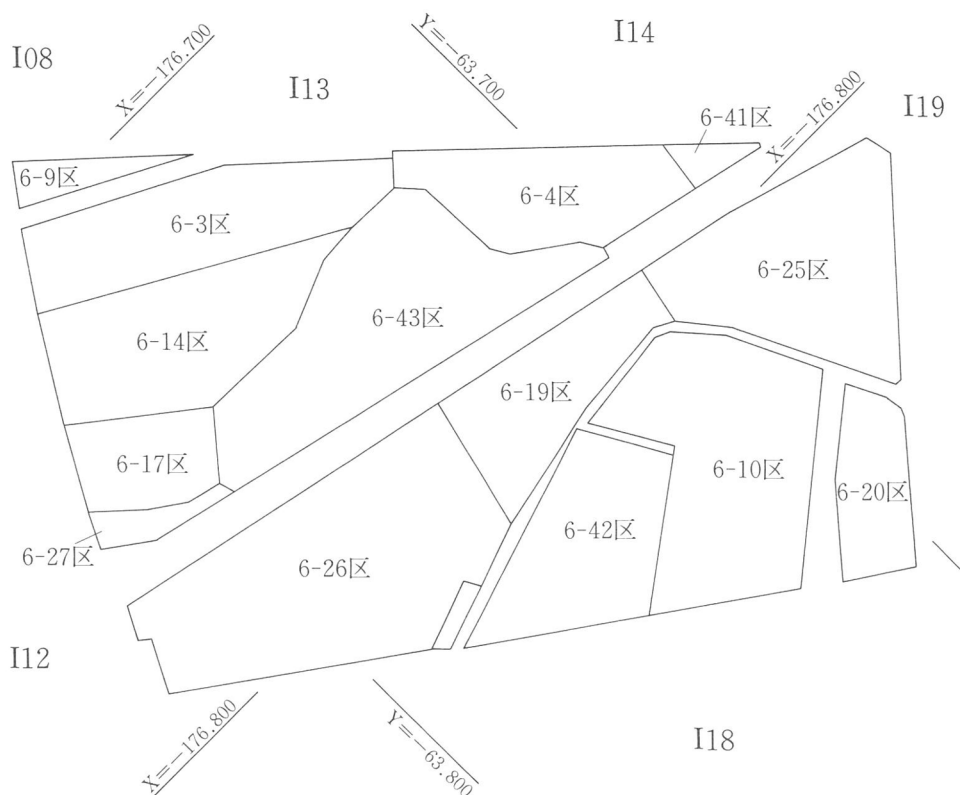
土坑は、埋土内から遺物は出土しなかったが、第3層から近世の遺物しか出土していないことから近世以前と考えられる。第2層は倉庫建築以前の田畠の耕作土と考えられる。

6-C地区のまとめ

最近の盛土や地山を除くと耕作土と床土が2層(0.2~0.3m)堆積しているだけで、検出したのは井戸や土坑の多少深い遺構が多い。溝・鋤溝も少なく、常に削平されていたようである。この付近は過去の人間に利用された痕跡が極端に少ない調査地区であった。ただ、近世後半から現代にかけては田畠として積極的に利用された地域である。その結果として過去の痕跡を削り取ってしまった可能性も無いではないが、当地区および周辺地区の調査結果から見ると、近世を大きく遡る明確な人間生活の痕跡を窺うことは無理なようである。

2. 6-D地区の調査

市道見出川羽倉崎線と本町羽倉崎線とに挟まれた範囲であり、面積は約17,000m²である。東隅から西隅にかけて大阪陶業の私道が東西に、北隅を稲倉2号水路が東南から北西に伸びており、調査区を3分している。東隅に大C-3-9-I13・14・18・19の、西隅に大C-3-9-I12・13・17・18の交点が位置する。私道より南側は大阪陶業の社宅やテニスコートと田畠等があり、6-25・20・10・42・19・26に分けて調査した。北側は大阪陶業の社宅と田畠等であり、6-41・4・3・43・14・17・27区に分けて調査した。稲倉2号水路から北は田畠で6-9区として調査した。



第136図 中開遺跡 6-D地区調査区配置図

6-25区 (付図9・図版52・53)

D地区の東隅部で、東南辺は市道見出川羽倉崎線に面している。調査直前は大阪陶業(株)の社宅であった。標高はCLでT.P.+5.50m、YYでT.P.+5.00mである。調査区の形状は底辺を東南に向けた台形である。調査面積は1,320㎡である。

調査により確認した土層は基本的に4層あり、第3層で中世・近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で溝を検出した。

層序 (第137図)

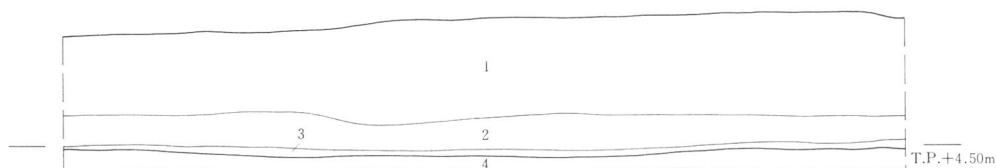
第1層 褐色土(灰色土・黄色土混じり:第II層)で、西方向に向かって低くなり、全域に広がっている。層厚はCLで0.55m、YYで0.3mを測る。現代の盛土である。遺

物は出土しなかった。

第2層 黒色土（10Y R2/1：第Ⅲ-a層）で、全域にはほぼ水平堆積している。上面の高さはCLでT.P.+4.95m、YYでT.P.+4.70mである。層厚はYYで0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 明褐色土（7.5Y R5/8：第Ⅲ-b層）で、AC～YYまで水平堆積している。上面の高さはACでT.P.+4.55m、YYでT.P.+4.50mである。層厚はYYで0.1mを測る。床土である。遺物は中世の土師器・瓦・蛸壺、近世の陶磁器・備前の播鉢が出土した。

第4層 明黄褐色土（10Y R7/6：第Ⅳ層）で、西方に向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さはCLでT.P.+4.75m、YYでT.P.+4.40mである。地山である。遺物は出土しなかった。



第137図 中開遺跡 6-25区基本土層断面図

遺構

01-O S CLの南部からF Iを通過してJ Dの東北部まで東北方向に直線的に伸びる溝である。両端とも調査区外へ伸びている。検出長40.5m、幅0.6～1.5m、深度0.2～0.45mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は3層あり、上から黒色土（7.5Y R2/1）が0.15m、黄褐色土（10Y R5/6）が0.2m、褐色土（10Y R4/6）が0.1mである。遺物は出土しなかった。

まとめ

調査直前の社宅造成時の盛土及び直下の水田耕作土を含むものを攪乱として扱おうと遺構は無くなってしまふ。調査区の東南辺が僅かに高くなっており、その境に01-O Sが伸びており、水田の地割り溝と考えられる。隣接する6-20区と6-10区の境に農道と水路があり、元は01-O Sにつながっていたと考えられる。社宅用に造成された時点で廃棄されたのであろう。しかし、01-O S埋土の上部1層には水田耕作土が混じっていると考えられるが、下部2層は水田の耕作土とは全く異なっている。このことから01-O Sの掘削は多少遡ると考えられる。ただ、明確な時期は不明であるが、近世後半以降の可能性が考えられる。